

ギャグってスゲエのな…。あっちこっちって…

文才皆無。

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

いざ行かん新天地!!

そう言つて転校できればどれだけ良かつただろうか…。ドンドンのし掛かる災害と言う名の人生の荒波を押し退け強くなつていく人の少年の物語が始まつた。

嘘予告デスヨー。

これは本来ほのぼのとしているはずの世界に迷い混んだ主人公がギヤグを交えていくとどうなるのだろうかという奇科学的思想を元にできた妄想です。あっちこっちが好きな人は：okな人とダメだ：という人に別れると思います。

因みにこの小説は原作の漫画の時間軸で御送りしたいと思つてしまふので、アニメとはそこが変わつて来ると思うんですよ？

では、以上でいきましょー！準備はいいかー者共逝くぞ！

目 次

1	いい加減にしてくださいな…死んでしまいます。	1
2	積み重なる束、埋もれる先生。	7
3	学校ってこんな感じだつたつけ?	15
4	過激な昼休み	21
5	見捨てられたのはデイアベルはんじやなくて俺だつたんだな…。	29
6	新たな仲間、あらわる。	40
7	赤い色に染まるシャツ。	48
8	驚いたら罰金な♪	56
9	口マンを求めて	63
10	戦場の絆	70
11	我が身に降りかかる最悪	79
12	見守ってるよ。	87
	番外編 前の学校、昔の友達。	95
13	センチメンタルハート	104
14	プロは何があつてもプロだからプロなんです	113
15	春だけど夏の予寒	118
16	宣伝かい	125
	お気に入り百件記念 消失	137
17	理解するよりも感じとれ	145
18	お茶会に失礼します	154
19	話題があつちこつち	164
	番外編 Non stop my way	173

1　いい加減にしてくださいな…死んでしまいます。

ある晴れた日のことである。

俺は出会ってしまった。

それは偶然で片付けてしまっていいものか…運命なんて表面的な物で表現するべきなのか…。

兎に角この出会いは冬を目前にした俺の下にやつて来た新たな家族と不可思議なクラスメイトとの学校生活である。

これは幾分か前のことなんだが少し聞いてほしい。俺は何故か親から家を追い出され、気付くと勝手に転校届けを学校に出された。勿論何にも知られずにである。

そしてその日の朝のこと

「…あ、そうそう忘れてた。アンタ今日からあの学校行かなくていいから。

これからはここに書いてある学校に行きなさい。そこの校長が私の知り合いでアンタのことを話したら是非会いたいって言われたから思わず転校させといたわ。じやあ後はよろしくねー…おっと、此処から学校に通うとなると面倒だから一軒家でいい物件も探しておいたから色々手配の方も出来てるわ。お金の方もアンタの口座に一先ず一千万程入れといたからそれで当分はどうにかなるでしょ？住所とかそれもある紙に書いてあるからね、あの紙持つてれば取り敢えずなんとかなるはずよ。まあ、何かあつたときは電話ければ出ると思うからその時はその時ね。んじゃ、バイビー」

そういうて、仕事に行つてしまつた我が家の母。俺は意味が分からず、口を開きにして間抜けずらでもしてたんじやないかと思う。

我に返つてその言葉の真相を問いただそうとしたときには既に家は俺以外もぬけの殻。

学校に間に合わないつていうのは笑えないのでイライラしながらも母が指差していたその紙を引つたくるように持つと、通帳や一先ず必要になるであろう物全てを持つと家を飛び出していった。スクールバッグはパンパンで重く、走りづらい…訳わからんねえー

ぼやいてもぼやいても収まることのない怒りは逆に募つていき、人からみたら切羽詰まつて見えたらしく優しさから声をかけてくれた人がいっぱいいたがそれが鬱陶しい。荒れに荒れているが仕方ないだろう、許してくれ。

「あー、クソッ!! マジなんだあのアホ親は! 破天荒とかつていうレベルじやねえだろ!? 何なんだよつたく!」

紙に書いてある場所にはバスを使う必要があり、そのバスの発車時間が走つてやつと間に合う位だった。本当に…  
はあ…。

と、いうわけだ。全然説明になつてないかも知れないが俺自身分からないことだらけ何だ…許してくれ。

そしてアノ後はバスの時間にも何とか間に合い、バスに揺られていた時間もあつたために精神的余裕も出てきて落ち着くことができた。今だけは悲しい歌聴きたくないよ…。

降りるバス停に着いたときには案外時間の余裕があつた。朝飯も無しに駆けて来たために少しお腹が空いたためにコンビニに寄ると目の前にいたアホ毛が特徴的なメガネの男子と黒いリボンをしたポワポワしてるおんなの子が仲良さそうに話しているのが見えた。

考えてみれば、俺つて知り合いのいないところに行かなきやならんのだよな……あはは。鬱だ、死のう……。

「あのー、大丈夫ですか？」

「顔色悪いみたいですけど……それにその制服ここら辺で見ませんしどうかしたんですか？」

目の前から件のリア充が声をかけてきてくれていた。うん：ちよつといけすかないなつて思っちゃつたけどいい子達だ。俺、君らのこと勘違いしてたっぽい！

一姫!？それに貴方も大丈夫ですか？」

嘘間違つてなかつた、やつば嫌い

もうなんなんだ…目の前が真っ赤だぞ？俺がいつたい何をしたつて言うんだ…。泣くぞ？齢16にしてガチ泣きすんぞコラ！そしてメガネ君、君は神の子なんじやないかい？

優しすぎなんだよ…なんで白いハンカチで赤い何かをふけるんだ…。目立つちやうんじやないかな

「あはは、姫が失礼しました。とんだ災難だつたと思つて許してくれあげてくれませんか?」

「…君の顔を立てて此処は引き下がらせてもらうよ」

「あ、ありがとうございます…。でも、本当にごめんなさいです。私は昔から鼻血が出やすい体質みたいで、少しの刺激であふれでちやうんです…」

「そ、そうか…災難だつたな。…これつて鼻血？この量つて致死量じゃ…まいつか。」

何故だかこれだけは触れてはいけないような気がした。例えるならまるで刃物を突き付けられてるような、そんな寒気が止まらなかつたのである…。

「すいません、お返しについて訳じや無いですけど何か出来ませんか？」

姫と呼ばれた少女は何故か異様にヤル気満々で息巻いてて意地でも譲りませんよ！とでもいうかのようだつた。うん。適当に頬みごとして去つた方が良いと俺の勘が告げてるぜ！

「じゃあこの場所つてどこにあるか分かるか？一応用が在るんだがこちら辺は初めてで…」

「どれです？」

「俺も力になれるかもしないから見せてもらいますね？」

「どうぞッス。」

鼻血姫さんに続くようにメガネ君が俺の手渡した紙を見ていた。その場所はどうやら知つているようで鼻血姫さんが力になります!!と喜んでいて、良かつたなつてメガネ君も嬉しそうにしていた。うん。この子達やつぱりいい子達や…。

「で、此処へはどういけば良いんだ？」

「ふつふつふ、じゃあ案内させてもらいますね？」

「ん？ 聞き間違えか知らないが案内するつて言われたような気がするんだが？」

「はい!!任せてください！」

「ほら、姫ちゃんと説明しないから混乱しちゃつてるぞ？」

「はわっ!!」

え？ なんで早く離れたいつて思つたらこうなつたの？ しかもちやつかり手を握られてるんだけど…。俺の朝食は？

なんでしかもコンビニから遠ざかってる？え、何この有無を言わせない強引さ…

「で、ここまで来ちゃつたけど二人はこここの生徒だつたつてことで良いんだな？」

道中手を離してくれない事を悟つたので大人しくドナドナされて付いていくと学校に行き着いていた。途中で色々話したこともあり、友人と言つてもいい間柄になつた。それはつまらない他愛ない世間話やゲームの話、授業の話に一風変わつたクラスメイト達まで上がつていた。…ちょっとぴり幸先が不安になつたのは二人には内緒だ。

「それで合つてるよ。そういう貴方は転入生つてことか…」

「おう、どうやらそうらしいな…。俺の人生波乱万丈過ぎて置いてかれた挙げ句に理解も追い付かないから切ないよ。」

「それはまた…」

「あはは、訳ありなんですか…でも16つてことは一年生か二年生何ですね？ならおんなじクラスだと良いですね？」

「それはまたその赤い奴で狙撃するっていう宣告か!?」

「ち、違いますよ!!」

「狙つてたのか？」

「伊御君!!」

「冗談だ」

「もうー!!」

冗談を言い合いながら楽しくふざけあつていたが俺は一応転校生らしいので職員室に行かなければならぬ。そう切り出すとメガネ君こと伊御君は拳をつき出した。

「俺は音無 伊御だ。一年で姫とも同じクラスだから何かあれば頼つ

てくれ。」

「おう!!頼むぜ?伊御君!俺は羽団 心結(うと みゆ)って名で同じ一年だから同じクラスになるかもしねないな!!」

そう自己紹介をしてつき出されていた拳に拳をぶつけた。こうして新天地初の友達が出来たと言うわけだ。幸先がいいな։。お人好しで優しすぎる奴が友達になるつて結構勝ち組じゃね?だつてボツチにならないで済むんだぜ?これつて冗談抜きにしても最高やん!!「よろしくです!!私は春野 姫ですよ!!忘れないで下さいね。」

「よつ鼻血 姫!!」

「春野 姫ですよ!?」

なんて笑い合いながら姫ちゃんと仲良くなつた俺は二人に御礼を言い、職員室へと急いだのだった。

## 2 積み重なる束、埋もれる先生。

職員室に赴いた俺は入つて一発目に後悔することになつた…。

「ふええー待つてくださいー・オプツ!？」

「もう勘弁してください…これで何回目つすか?」

後悔と言つたが、正確には先生とは何だつたか辞書を引きたくなるぐらいに飽き飽きしてきていたのだつた。

少し振り返つてみよう。

俺こと、宇団 心結は職員室に赴くと騒然としていた。あえて無視しても良かつたのだがそうすると教室の位置も所属も何もかもが分からぬという事で仕方無しで扉を開いた。

「失礼します。転校生という事で本校に参りました宇団心結です。なにやつてるんすか?」

この時は完全に素が出てしまつたがそれも仕方がないと言わざるを得なかつた。目の前にいる白銀の髪をした人が何かしらの資料と思わしき書類の下敷きになつていたからだ…。

「…失礼しました。」

「ここで見なかつたことにされました!? ちよ、待つてください! ? 助けてくれないんですか! ?」

「ある人は言つてました。諦めが肝心だ、と。」

「ふえー、見捨てないでくださいー。」

職員室にいるつてことは教師という事で間違いないだろう…。流

石に困つてゐる人を見捨てたくなかったが……だが、もしこれが担任だとしたらと思うとかなり関わりたくないのも事実。この女性はジーツとこちらに助けてくださいオーラ全開で見ながらジタバタと手足を動かして全力でもがいていたりしている。抜けられなくなつたとう事だらうな…。

「はあ…幸先が不安で仕方ない…」

「面目次第もありません…。」

と言い女性を助けだし、書類の山を一先ずかき集め一纏めにしておく。その間その女性はボーッとしながら俺の動作を見ていた。特に変なところはなかつたはずだが何だろうか？

生徒に見られたら不味い書類があつたか？それともそれ以外の案件？

「…どうかしましたか？」

「あ、えつと…ありがとうございます。」

「別にこれくらいは構いませんよ。ただ、整理ぐらいは定期的にやらないと大変になると思うのでこれからは確りしてくださいね？」

「…はい。」

叱られた子犬のように項垂れる先生を尻目に漸く本題に入れると思い、やつとか…と小さな達成感に浸つていた。先生の方に関するは流石に放置するのは後味が悪かつたので少し何か気の利いた事の一つでも言つておこうか。

「美人なんですから生徒さん方には憧れの存在なんじやないですか？その思いに応えられるように頑張つてみたら良いんですよ」「ふえ？…なつな？びびび美人ですかの！」

ここまで御世辞で取り乱す人もそうそういないだろう。前の学校

でも確かにそんなこと言つて怒られた記憶があるから注意されるかなつて思つたんだけどなんでだろう？

あの時は、そんな事を無表情で言われたら真に受けちゃうでしょ！！そんなことさらつと言わないでっ！つて怒られた筈だ。…表情がいけなかつたのか？

「ええ。（にこつ」

うん、我ながら完璧な笑顔だな。ヽヽヽまでできれやあ演劇部もいけ  
るんじやね？自画自賛バンザーイ!!

先生は頭から煙を発しながら俯いていた。気のせいいか室内温度が  
上がつたような気もする。

ふと、思い出したがここつて職員室なのにこんなに騒いでお咎めな  
しつていうのは少し変だよなつて思つて、見渡してみると女性教師の  
方は赤くなつてボーッとしていて、男性教師の方は青くなつていた。  
うむ、これだけ暑ければ赤くなるのは当たり前つちや当たり前だな！  
男性陣は逆に青いが…ま、どうでもいいな。

それにしても…信号？

「…あ」

「えつと…その『あ』つてなんですか？嫌な予感しかしないんですけど  
…」

「あはは…そろそろ出ないとホームルームが…つて…」

苦笑いする先生に何を言つてるんだろうかという目を向けると明  
後日の方を向いて目を全力で反らしていた。

時計を確認すれば8：25を指している。この学校は知らないが、  
前の場所は30分がHRだつた。

「…はあ。もうなにがなんだかつて感じですよ。しようがないので俺  
の所属クラスと場所を教えてください。」

「すいません…。心結君のクラスですが私のクラス…か、帰ろうとし

ないでほしいですか?」

現実を受け入れる時間が欲しいだけだ!!けして逃げようとしたんじゃない!!

まあこんな感じで今に至るつて所だな。

そして未だに職員室である。

というのも、出ようとすると先生が書類をひっくり返したりコケたりするから…しかも、態となんじやねえか?と疑いたくなる程やらかしてくれる。もう時間が三分を切つていて笑えないので俺がその書類を全て纏め、先生が躊躇かない場所に置いておく。その動作を繰り返すこと約5回。

もういい加減にして欲しいものだ。

「遅刻しますよ」

「ほういわれふえもー」

「ああもうじつとしててください!後は全部俺が片づけりますんで」

「で、でも…」

「でももくもあるか!!折角間に合つたのに遅れるって事にはなりたくないんすよ!!」

「うう…すいません。不甲斐ないばかりに…」

最後の紙山を片付け終わると同時に、先生を抱き上げ廊下をダッシュする。最初は暴れていたが事の重大さに気付いてくれたのか大人しく抱き上げられていた。

「それでクラスの位置は何処ですか?」

「そこを右ですの。それで3つ行つた所が私のクラスの1のー」

「はい、着きました。お、何とか間に合つたみたいですね…。良かつたです。」

### キーンコーンカーンコーン

学校のチャイムがタイミング良く鳴り出した。

まだ何か言おうとしていたが俺は折角間に合つたのを台無しにしてほしくなかつたので先生を急かして、教室に入らせた。うむ。転校生といえばこういうイベントだよな。

扉の前で頷きながら中でどんな事を言つてるとかと少し耳に意識を集中させてみると中の声があーら不思議、聞こえてくるではありますか！

「皆さーんおはようございますの。」

「因みについて調べてみた先生の本質は天然王と出た」

「王!?」

「凄いなー」

「なんなんですか!?その哀れむような視線は!?」

聞き覚えのある声と知らない男性一人と女性二人の声もしたが概ね雰囲気は良好だった。

先生ってやつぱり天然のドジなんだな…。しかも職員室でだけじゃなくて生徒の前でも大概あの様子つて考えると表裏のない良い先生か…。まあ、あのドジがたまに傷だが良い先生なのは変わらないし運は良かつた…のか？

ううーん…断言できないのが悲しい…。

「では、どうぞ入つてきてくださいですの!!」

考えている内にどうやら準備が整つたみたいで、俺は先生に声をかけられた。クラス内の緊張感もMAXで今か今かと待つてゐる様だつた。

「……。」

「……ん？ 入つてきて下さいですのよ？」

「……。」

「聞こえてないんですかね？ おーい、おーいですのー」

俺はこういうときってインパクトが大切だと思うんだよ。

だから思いつきで一発ネタをやろうと思つてるんだよね、それで敢えてすぐに入らないでおいたら後ろのドアから一人の男子生徒が来て今の俺を見てネタの真相に気付いたみたいで親指を立てて良い笑顔をすると隣のクラスに駆けていった。

うむ…奴、出来る。

深呼吸を一つ付くと、盛大に且つ力強くドアを開け放つ。

ガラララ！

「貴様らは今を以て、本校を完全に俺様に占拠された。貴様らは全員捕虜だ！」

手を頭の後ろで組み、床に伏せろ!! さもなくば、撃つ!!

「……え？ ですの。」

俺は何故か手元にあつた機関銃のレプリカを構え、クラス内の生徒に銃口を向けていた。

ポカンとする先生を除き、決まつていたかのように全員息の合った動作で身を低くしていた…。

「そこの教師。貴様はどうしてもここで死にたいらしいな」

「ふえええーーー!」

「さあ、此方に来い！」

うん、ちょっと面白くなつてきちゃつて歯止めがきかなくなつてしま

ちやつたよ。

緊張感が違う意味でまた最高潮になつてきている。だが、一つだけ言わせて欲しい。

何でこんなに普通の高校生が統率の取れた行動が出来んの？おかしくね？

「うわわわわ、ですの！？」

俺はあからさまにイラついている様に見せて、レプリカの銃のトリガーを引いた。

ズガアン！

「と、いうわけで俺の名前は宇図 心結です。そらを図る心を結うと書いてうとみゆです。よろしくお願ひします！」

銃口を少し上に傾け、発車されたのは弾ではなく、色とりどりのカラフルな紙屑そしてカラーテープ。

所謂、クラッカーである。パーティ用グッズがまさかこういう風に役立つとは思つていなかつたがどつきり大成功みたいにしてやつたりと嬉しかつた。

先生は未だに状況が読めなかつたらしく呆然としていたが、ノリが良いのか回りの人は拍手していくくれた。嬉しすぎて歓喜しちゃう！！あ、違つた。一人だけ氣絶してゐる…

「姫ちゃんん！」

「はえ!? 心結さんでした!?」

「ゴメンね驚かせて…。ドツキリだつただけどまさかこんなに驚いてくれるとは思つてなかつたんだよ。

お茶目として許してくれないか？」

俺は膝を付き、固まつてしまつていた姫ちゃんの手を取り忠義を誓

う騎士とその主みたいな構図で囁くように言つてみた。ヤベエ…テ  
ンションがサイコーにハイつてやつだ。

「え、ええつと…はいい…」

「ありがとう。嬉しいよ、姫。」

ブシャーーー!!

鼻血姫は相変わらずも鼻血姫だつた事を追記しておこう…。  
前の学校の制服、完全に血だらけだな。

### 3 学校つてこんな感じだつたつけ？

血だらけのブレザーを脱いだ俺はこの冬の近付く季節ということもあり、少し寒い外気に身を震わせていた。

流石にびしょ濡れとなると風邪引きかねない為に着るという考えは自然と断念させてもらつた。

あんな悪ふざけをしたにも関わらず先生からは『めつ!!』と言で勘弁してもらうという謎染みたお叱りを受けた。それはそれで良いのかと心配になつて問うと、『このクラスつて面白い子が集まつてるんです。なので多少のオイタは多目にみますの』とのこと。  
…これ、多少か？

まあ気いたら負けってことでいいな。それで本来だつたら一時間目は授業だつたんだけど先生の英語を削つて態々俺の為に自習にしてくれた。

その時のクラスは歡喜しまくりヒヤツハーハー状態だつた。

「おんなじクラスだつたんだな…」

「おお…伊御くん!!」

ブレザーを真っ赤に染め上げてくれた姫ちゃんがいた時点でもしやと思つたがやつぱりそつだつたみたいで、今年一年は面白おかしく過ごせそうだ！

「少し寒そだねん。」

「うん？まあカイロのお蔭で無理じやない程度だから大丈夫だよ…君は？」

「おお、私とした事が自己紹介がまだじやつたね。片瀬 マヨイじやよ、よろしくねん。」

そう名乗つた彼女は前髪を鼻の少し上位で切り揃えたオカツパみたいな頭にシニヨン？で纏めていた少女で何故か白衣を着ていた。

白衣の天使とかの白衣じゃないことは念押ししおこう。  
科学者とかのアレだ。

「うん、よろしくナメクジさん」

「初めてナメクジって言われたんじゃよ!?」

「間違えた、マゾイさん」

「悪意のある間違い方じや!?」

「えー、もう我が儘だなあ。じゃあマゾでいいよもう。」

「なんか私が悪いみたいに言わないで欲しいんじゃ!! 最後の最後で  
雑つ!? しかもじやあつて完全にわざとじや…」

「私の時は鼻血 姫つて覚えられました…。」

「姫つちは名前だけでも合つてるだけマシにや。」

「ん?俺の時は間違えなかつたぞ?」

それは弄られて輝く原石つぽかつたからなんだけどね! でもこの  
人がクラスのムードメーカーって考えて間違いないだろうな…。  
だつて、ほら。

「あの転入生、片瀬さんの調子を崩したぞ!」

「スゲエ…あの空気ブレイカーと吟われたあのマヨイさんをだと…」

「なん、だと…」

つて向こうの男性陣も言つてるし。え、女性陣?  
やり過ぎたみたいでちょっと遠くにいるよ。心の距離も現実の距  
離も少し離れたっぽい。

でもやっぱり転入生イベントつて皆ワクワクするみたいで賑やか  
だつた。うむ、でもやっぱりこは逆に俺を弄るんじやなく俺が誰か  
を弄ろう!

「…そういえば伊御くんと姫ちゃん、今朝はすまなかつたな」  
「なんだ、しんみりした雰囲気になつて?」

「朝？」

近くにいた小柄な子が問うように発言する。以後、この少女は猫みたないので自己紹介までは猫娘と呼ぶことを心で決めました！

因みにこの猫娘。伊御君の話題をあげた瞬間にピクンつて反応したので少しカマをかけたくなつてね～。

え？ 悪い顔してる？ 良いんだよそんなの、面白ければそれが正解だ。

「別に気にしなくても良いんですよ。私達の好意でやつたんですから」

「姫つち顔が赤いけどまださつきの引き摺つてるん？」

「ち、違いますよ!?」

そうは言つた姫ちやんだつたが、ちょっと我慢出来なかつたのか鼻血が垂れてた…。

それにさつきつていうとアレだね。案外俺の演技力も伊達じやなかつたつてわけか!!

「嬉しいよ、姫」

まあわざと聞こえるように呟いたんだがな…。 猫娘弄りもいけど姫ちゃんも弄りがいが有るから。

「はうううーー!!」

「姫つちー!?」

「今のは、出てたぞ？」

「ナンダツテー!?：照れるような所なんかあつたか？」

「…無自覚なん？」

「いや、ネタであなことやるのつて結構頻繁だつたから分からないんだよね。」

「い、言わないでください、マヨイさん！」

「フツフツフ、それは前振りかえ？ てつきり私は姫ちゃんの名前の

ニュアンスがお姫様みたいだつたから命を賭けてでも守ってくれる騎士様とお姫様みたいだなつてでも考えちゃつたのかと思つてたよん♪

「恥ずかしいですー！」

「……。」

まあ良いんだけど、やつぱりあの姫ちゃんの鼻血の勢いつて変だよな…。致死量つてどれくらいだつたけ？

今度機会があつたら調べてみようかな…。友人に死人とか笑えないし…。

「でも、アレは姫ちゃんじゃなくても反応しちゃうんじゃないかしら？」

「だよねー。つい、姫ちゃんじゃなくて私だつたらって思つたら照れ臭くなっちゃうもんね!?」

俺の後ろ、丁度死界になつてて見えにくい所からだつたから反応に遅れてしまつた。振り返つてみると女性陣からしたら一番身長の高いと思われる金髪のグラマラスボディな子と、縁？黄緑？位のグラデーションの髪をうなじのところで2つに括つてる活発そうな子いました!!

そしてその言葉は前ふりかい?  
ヤつちやうよん?

「…ふむ。貴女も草原に咲き乱れる麗しき一輪の花のような美しき女性ですよ。

貴女も強く強かに生きる力強さを感じる。お二方の可憐な姿に俺は思わず惹かれてしまいますよ（にこつ）

うん。何事も諦めが肝心つて分かつてゐるんだけど、やつてから恥ずかしくなつてきた…。なんでよりもよつて、ナンパ野郎みたいなこ

と言つちやつたんだろう…。

ネタといつてもこうじやないだろう!? うがー!! 恥ずい、穴があつたら入りたい! この際、犬神家みたいになつても良いから!! さもなくばいつそ一思いに殺してくれ…。

「まさか、本当にやるとは…恐ろしい子!?」

「やつぱり女の子としてはそんな台詞を一度でも良いから言つてもらいたいって思つちやうけど…何よりもちよつと照れ臭いわね…それになんか良いわね…//」

「はわあー、凄いね! 何がすごいって態とらしく聞こえないところがスゴい!!

それにその手をお腹の前に曲げてお辞儀してゐ所なんて本職の執事さんみたいだつたよ//

「執事さん!? ブシュー!?」

「たぶん榊と西原がやつたらこうはならないわね…」

誉められて嬉しいのやら恥ずかしいのやら…。そりや、今までネタのためなら体張つてきただけどこういう張り方はしたことないから流石に照れるんだけどな…。

「ふふ、これから今までよりもっと楽しくなりそうね♪ よろしく、心結君。私は崎守 咲よ。」

「あ、私は深山 佳奈だよ。よろしくねー、ミユミユ♪」

うん、そのあだ名ちよつと抵抗あるんだけど…。女の子みたいな名前だつて、親近感わかれた事もあつたけどあつて早々にあだ名まで付けられたのはこれが最速だよ…。

結果オーライみたいだから良いけどね。

「おお…照れ隠しはもういいのん?」

「隠してたんじやないさ…それに、誰だつて照れたくもなるさ。こん

なかわいい子達と友達に成れたんだ嬉しいし、照れたくもなるつても  
んだよ。それが偶々今回俺がその立場に立つただけだよ。」

「…これが、純粹な力か」

「それだけ聞くと姫つちと揃つたら歯止めがきかなくなりそうじやね  
ん…。」

「「…／＼／＼」

頭から湯気を出す姫ちゃん、佳奈ちゃん、咲さんの三人。これつて結構ヤバイような気がするんだけど大丈夫なのかな…？今日は芝居とかしてないし問題は俺じやないだろうな…。

そしてダクダクと流れ出すその鼻血つて見た目がヤバいんだけど  
…。死因、テレリコ？

「えつと、咲さんに佳奈さんのその湯気をつて大丈夫なのか？なんなら少し窓開けるけど？」

「ううん、大丈夫よ。でもあのタイミングでのアレは回避不可よね…」「あはは…ちよつと不意討ち気味だつたから余計、ね…。それに気遣いの出来る所が伊御くん並みだよお」

当人が大丈夫っていうなら、大丈夫なの…かな？それにあんまり俺が触れちゃいけない話なのか小声で話してるし…。うーん…：

因みに姫ちゃんは未だに復活できずに己の鼻血の血溜まりに沈んだままで、救出されたのはこの後異変に気付いた伊御くんの手によつて救われていたのだつた…。

## 4 過激な昼休み

血溜まりに沈んだ箸の姫ちゃんは何故か衣服に血液一つ付いてないという魔法チックな瞬間に驚愕していたら午前中が終わっていた。俺自信何を言つてんだか分からないんだけどマジックとかそんなチヤチなもんじやねえ：恐ろしいモンの片鱗を垣間見たような気がするぜえ：

「やつほー、俺心結だけど今貴方の目の前にいるの。昼休みなの。」「メリーサン!? しかも後ろじゃない!?

「そりや、こうして自己紹介してるんだから目の前に居なきや変だろ?」

「ソウダソウダ！ナニイツテンノオマエ？」

「なんかメツチヤ引かれてる!？」

昼休みにて、いつだかの会話に出てきた西原くんとやら?と咲さんに訪ねた所このツンツンボーリが紹介された。

何故か咲さんにアイアンクローされながら連れてこられたんだけど…ね。

で、異様にツッコミを入れてるこっちが榊くんらしい。朝、サムズアップした人だよ?

では説明しよう!

伊御くんの友達。以上！

「もつとなんかあんだろー!!?」

「キレイやすい最近の若者は怖い。」

ちよつと良いこと思い付いた♪いざ、実行!!（実食じやねえぜ！）

「榊さん、なにやつとるん？心結さんが怯えすぎてウサギさんみたいに端っこでプルプルしてるんじやよ!？」

「榊、お前…」

「伊御!? 落ち着け!! 誤解なんだ!!」

「問答無用だ」

ズドン

「あべし??」

俺が蹲る後ろで、榊がアターされた声が聞こえたが気のせいだ。  
そして何度も言うが昼休みなので、教室で騒げば誰だつて気になるつてもんだ。よつて、こうして何かあると観戦者もしくは参戦者となつて騒ぎが大きくなるんだよ!!

うむ! 余は満足じや!

「大丈夫ですか?」

「たぶん姫の杞憂だと思うわよ? 彼のソレ、演技よ?」

「あはは、猫娘は鋭いね!」

うん、心配してくれてありがとねん、姫ちゃん。嬉しかったよ♪

「今のも演技だつたんですか!?」

「勿論。」

姫ちゃんが『驚きです…』なんていう、ウサギの家を英語にしただけの喫茶店の娘さんのような驚き顔をしていた。

え? ご注文? ウサギじゃなくて犬がいい。

そして猫娘は『私は妖怪じやない。』つて小さい声で言われたんだけど、自己紹介されてないから名前が分からぬのだよ、ワトソンくん。

「アレつて演技じゃつたんじやね…。クオリティー高くて気付けなかつたんじやよ…」

「榊、すまない」

「大丈夫! 榊は皆の心に生きてるのさ…」

「それ、死んじやつてるよ心結さん…。」

「おおーい!! 勝手に殺すな!」

「お前の事は忘れない…。」  
「続けるのかよつ！」

うん、良いツツコミだ。

榊は俺と似た所があるようと思えたから敢えてボケさせなかつたんだよね♪。ペースを崩す事において誰も俺に着いて来させない（キリツ

そして気付くと空気になつてる西原。

「にしはらじやねえ!!さいはらだ!!」

「もしかして…エスパー!?」

「声に出てたよ!!」

「わざとに決まつてンだろ。ナニイツテンノ?」

「ウガあああー!!!」

「カラオケ?」

「ちやうわ!?」

うん、良い具合に壊れたね♪今日も楽しいね（^ー^）

「その顔文字がイライラする!!」

「ちょっと、食事中にウツサイ。京谷のくせに」

「す、スマセンデシタ…。」

「あはは…ま、まあその辺にしましようよ、ね?榊みたいになつちやい  
ますから。」

「心結くんに感謝しなさい?」

そうして、アイアンクローラーから解放された西原あらため、京谷豆腐はクレヨンな5歳時のような顔の潰れ方をしていた。ちょっと咲さんが怖くて敬語になつてしまつたな、俺…。

そして西原は…うむ、榊一步手前だ…。死ななくてよかつた…。

「まあ、俺が全ての元凶なんだがな。」

「ホントだよ!!」

お、もう復活してる。  
リスボーンが早いね♪

「クソツ!!：じやあ今度一緒に神食いやるぞ！」

「なあ、そのクソツって言葉は必要だつたのか？」

「本当に見も蓋も無かつたな…。やるけど。」

「そんなんだから、エリックに京谷（笑）つて名付けられるんだよ♪」「言われたことねえよ！」

「エリック（笑）」

最初より復活の速度が上がった榊と供託して、うまい具合に地に沈んだ京谷を放置。撤去。回収。されたのを見て咲さんと京谷さんで仲良いなどおもいながら購買のあげパンを食す。

柔らかめなパンにきな粉がマッチしててウメエ…。

この時の席は

猫娘 伊御 自分 姫

机 机 机 机 一咲

マゾ 榊靈 佳奈 豆腐

つて感じだった。

「なんか余分なの付いてた!?」

「マゾじゃないじゃよ!?」

「名前に掠りすらしない!?」

上から順に榊、マヨネーズ、西田だよ！

「マヨしかあつてないんじゃ!?」

「誰だよ!?

うん。マヨイさんに京谷だつた。…飽きた。

「失礼じゃ!!」

「間違えといてそれは酷くね!?」

「あはははは。まあまあ、これあげるから許してくれ。」

そういうつて渡したのは購買でなにか知らんが、神々しく輝いていた何かだつた。

気になつて買つてみたが結構人気なのか、これ一個しかなかつた。値段も一個500円と購買にしてはちょっと値が張つていた。まあ、初めての利用だし良いかと購入したものだ。

「こ、これは!?」

「ゴクッ…」

「なつ!？」

「これ、本当に貰つても良いのか!？」

「うん。購買で500円と割高だつたけど奮発して買つたんだよ。でも、運悪く一個しかなかつたから分けてくれると嬉しいかな。…でも、こんなので許して良いのか? 結構もので釣つてる感強いんだが?

?」

目の色が変わつた三人に少し焦…呆れながら、少し思います。チヨ

口くね?

そして、チヨコの入つたくるくる巻きのパンはチヨココロネです。

只、ああも取り乱してゐ所を見ると少し気になるんだよね♪たかがパン一個でどうしてああもなれるんだろ…。高校生つて凄いね♪

ここで猫娘さんが俺を見ていた。パンに食い付く三人を尻目に無

視という暴挙のもと放置し、猫娘さんとの会話を楽しむとしたよう。

「貴方も高校生でしょ？」

「そうなんだけどさく…つて、そういうえば猫娘さんやい。あなたの名前を聞かせてもらおうか！」

「なんでそんなどこの山賊みたいなノリなのかは気になるけど、確かに朝の時は結局自己紹介してなかつたわね…。私は御庭 つみきよ。」

「つみきって漢字？」

「いいえ。平仮名よ…なんで？」

「いや、大した事じやないんだけど気になつたから？」

「なんで答えた貴方が疑問なの…」

いやー、だつてねえ。もし漢字で積木だつたらもはや憐れみすら感じないかい？

感じない？…そう。

「伊御くんや、つみきって名前つて可愛いと思わないかにや？」

「ん？…うん。つみきによく似合つてる可愛い名前だよ。」

やつぱり確実にこれは氣があるね！今も姫ちゃん並みに盛大な血のアーチが出来てた。

そして、うん。今のセリフ録音したんだけどまだ誰ともメアドとか交換してなかつたの気付いちやつたよ…折角録つたんだし無駄にしちゃないしなあ…。

よし！

「ねえ、ミニワン」

「その渾名嫌なんだけど…」

「まあまあそう言わずに。俺の肩書きつて恋する乙女の味方、キュー ピーちゃんなんだよね？」

「そこはマヨネーズじゃないんだから普通にキューピッドって言えばいいじゃない。」

ミニワンがマヨネーズつていった瞬間にマヨイが反応してたのは面白かったよ。ビクウツ!!!ってなつてた。

そしてキューピーつていったのは別にネタ的に言つて回りにバレにくくしただけだから気にしなくても良いのにね。

何故なら、ギャグ的に言えば回りは『なんだギャグか…』程度に捉えるからその物の意味がバレにくくなるんだよ。

「少し嫌悪感抱かれるかも知れないけど耳元で話すよ？」

「…何、構わないわよ。それくらい。

……!!?」

「つて訳で、メアド交換しよーゼー」「いいわよ…。」

尻すぼみになつたのは果たして、好意を寄せる人がバレて恥ずかしかつたからなのかは分からない。まあ、聞くなんて野暮はしないけどな。

…の録つたセリフは、まあ気にしない方向で頼むよ

(「さつきの伊御くんの言つた言葉をボイスレコードしたんだけど、どう?」)

勿論回りにはおろか、本人にも気付かれてない。もしイエスならこの後合図するからその時にイエス、ノー答えてくれれば、一緒に送るよ。」)

というものだつた。ここまで言えばさつきの冗談が冗談では無かつたつて分かるつて寸法よ!!

これが孔明の罠つてもんよお！まあ、只単に相手の真相心理を利用しただけのミスディレクションなんだけどね。

「ほいほーい。」

「あ、ありがとう…。」

「年中無休のキュー。ピーは何時でもマヨネーズを売るぜ♪何かあつて連絡くれれば要相談の下提供するよ。応援してるからな～」

ミニワンのメアドをもらつてすぐにメールに添付して送ると、ミニワンは幻視した耳がピクピク動いていて、尻尾がクニャクニャ曲がっていた。ううーん、猫っぽい…。

だけど喜んでもらえて嬉しいね♪

「どうやらあの気難しいつみきさんを攻略したみたいだねん？次はあたしかな？」

「アツハツハ。何迷い事抜かしてるのかな？マヨイさんや。その頭のお団子モグゾ？」

「扱いが酷いんじやあ!? そういうのは私じゃなくて榊さんだけで十分じゃ！」

「何で俺なんだよ!？」

「なら!! 榊の場合はモグ部位が無いから間接かな♪」

「モグつ!? 外すのか!? それは俺に対してなんだよな!? ひどくねえ!? 俺はなんもしてねえ!!」

発言が既にアウトだつた。いや、やつてないのは分かつてるんだけどリアルであんな盛大な振りをされたら其処に乗つかつてやんないきや失礼だろ?

立ち上がる俺は榊の後ろに回るとジタバタする榊の腕を抑え、口メロスペシャルをキツめにかけておいた事をここに追記しておこう。

伊御くん、食べるのに夢中になつてたね…。そんなに焼きそばパンがすきなのかな…。

それで、だれも止めてくれないから止め処が見えなくてつい、やり過ぎて変な音がしてた…。榊、すまん。

## 5 見捨てられたのはデイアベルはんじやなくて俺 だつたんだな…。

どうやらこの学校の授業は前の学校より少し遅れてるらしい。それは昼休みを終えての授業でよく分かつた。

先生は教科書などの道具が無いことを気にかけてくれて、心配してくれていたが大丈夫と伝えると『そう、ですか…』と残念そうにしているのがテンプレのように繰り返していた。

どうやらこの学校は生徒を気遣いながら授業をするから遅れていったんだなど納得しつつ、ノートに黒板の文字を写していた。まあ、おさらいだつて思えば良いんだから結構楽な授業だつたな！

ホームルームで先生（名前は桜川 キクエというのを先程初めて聞かされた。）の話の下、教科書類は来週には届くとの事で落ち着いた。そして放課後。

「今日もお疲れ～！」

マヨイの音頭によりだらける面々を横目に乾いた血だらけブレザーを羽織り、教室を後にしようとすると誰かに引き止められた。

後ろからこう、服を（☒8☒ チュンと…？

伝わらない？ううん…じゃあチョコンと摘ままれる感じでいいか

？

「で、どうしたの姫ちゃん？」

「えっと…そのお」

「もしや!?これは噂に聞く！」

「え？噂に聞く、何ですか？マヨイさん」

「愛の会瀬への誘い!?姫つち、策士!!」

愛の会瀬なんて単語で反応しないはずも無い姫ちゃん。ええ、もち

ろん皆様の想像通りだよ。

真っ赤なお服の心結さんは♪コンチクショ一!!

鼻血がブシャー！姫つ血ーなつ血ー!!

うん。非公認ゆるキャラさんに怒られそうだ…。あつちは梨だけ  
ど此方は血痕だし、惨状が発禁ものだな…。いつたいどれだけの子供  
のトラウマを作るんだろうな…。

「そんな軽快にジャンプ出来ないですー!!」

「ツツコミ所そこつ!?」

「いやいや、姫つち。それより私のボケに突っ込んで欲しかったん  
じゃよ…」

うむ。やっぱリマゾイさんか…。態々ツツコミにいくなんて…そ  
れよりコイツなんて言つたつけ?

え？俺と姫ちゃんの愛の会瀬？ほう？いい度胸じやねえか？

そういう話題で俺を弄るなんてなあ？

「伊御ー帰ろ…何か不穏な気配があ!!」

「一瞬榊がそこに居て、シャーペンが突き刺さつて飛んでつたような  
…」

「伊御くん。世界の理には触れちゃいけない事もアルンダヨ？」

「ふええーなんか心結くん怒つてますう!?」

「あはは、怒つてなんかないさ。ただ…フツフツフ。アツハツハツハ  
!!」

高笑いする俺の急変に回りのクラスメイト達もギョギョギョ！つ  
てしてたお

あー、面白い。思わず机バンバンしちゃつた。

「えつと、心結さん？」

「何かなマゾ？」

「マゾじやないんじやよ!?」

「じゃあ、死に急ぎ野郎か?」

「巨人となんて戦えないんじや!つて野郎じやないんじやよ。」

「まあいい。問題はそつちじやあない。」

「あのお…その笑顔スッゴい怖いんじやよ…止めない?」

笑顔とは本来威嚇に使うものだから何も間違つたことはしてないよ?アハハ可笑しいなあ

ちよつと怒りのボルページ上がつちやつたよ♪

「さて、じゃあ本来の問題に戻ろうか。

貴様は事もあろうが、俺をダシに人の恋心を嘲笑うような真似をしてくれたな?」

「あのお…そのキヤラ付けはー」

「貴様は怒られている最中に私語が話せるなんてよっぽどお氣楽な御花畠脳ミソをしてるらしいな。

そんな貴様は今日からウジ虫で十分だ!」

「酷いんじやよ!?言うことかいて乙女に向かつて虫扱いなんて!!」

「フハハハハ、貴様にやる慈悲などない!!宇団 心結の名の下に命ずる…相手の恋心を弄ぶ下郎がつ姫に謝れ!!」

「ルルーシュ!?」

「京谷、アンタ空気読みなさいよ!!

「ヒデブツ!!」

うん。言い切つた。チョースツキリ!!

このキャラちよつと嫌いじやないな!何かあつたらまた利用させてもらおうかな?

「あの時のキュー・ピッドつて…」

「キュー・ピーなんて言つてふざけてたのかと思つたけど…」

「ちよつと怒りの矛先が理不尽かなつて思つちやつたけど…でも、あ

ミニワン、咲さん、佳奈やんのセリフだけど、でもそれもちよつと観点が違うような……ふあ！

待つて!? 咲さんその手を放してあげて!?

指かめり込んてるから！書を通り越して京谷が豆腐並みに白くなつてるから!!

あ、まだ生きてる！ 口からヒューッて息が漏れてて声が出てなくて分からぬいけど…腕が上がった…。

そして弱々しく握られた拳からヒーンて感じて親指だけ矢に向かつて立ち上がった。

「京谷あああ—————」

お前の死に様。しつかり見届けたからな!!こんな所で死にやがって…この、バカ野郎が！

「京谷、お前の死は無駄にしない…」

ああ、  
きつと天国で安らかに俺達のこと見守ってくれてるはずだぜ

「榊、お前も…」

舞は神ヅ立ウニシム、庵の間ノアリ置ケン。

笑顔で…。

そして伊織くんもその隣で無言で目を瞑り酔いた  
神のセリフで、俺達は続くよう冥福を祈る。

「ああ。京谷……」

「捧げるな!! つうか、音無は止めてくれよー。」

「キモいつて思つてたけど…」

「おやが！」まで体はつてたなんて…」

「バカだけど…」

「「黙祷」」

「真似すんなよ!!しかも、思い出で既にディスられてる!?」

生きてたみたいで安心した。イヤー、あの灰みたい白くなつて倒れた瞬間は思わず『立て!!立つんだキヨー!!!』って叫びたくなつちましたよ。手遅れっぽかつたから流石にヤバいって思つたんだよね…。

何故か忘れてしまいかけていたこの話の中心人物、マヨイと姫ちゃんはというと

「ぐすっ…。すまないんじやあー！姫つちの純粹な好意をバカにするような気は無かつたんじやよ。本当じやよ？許して欲しいんじゃーーー」

「マヨイさん!? 大丈夫ですから少し落ち着いてください。大丈夫です。私、マヨイさんの事信じてましたから」

「姫つち…」

「はい！」

「ありがとーーー！姫つちは天使なんじやーーー！」

泣きながら謝るマヨイを見てちゃんと反省出来るじやねえか。くくく、俺は余計な事をしてしまつたかな?…そう思い、静かに席を外す。

誰にも悟られることなく、この涙に溢れるハートフルな展開を後にした。

因みに後で聞いた話によると、この瞬間を偶々見てしまつた京谷は俺の姿が伝言板のXYZの後ろ姿のように見えたのとの事。ハードボイルドだつて。

：硬茹で玉子つてあんま好きじやないんだけどな…。

そして別に、止めてから引く…を実行した訳じやないんだけどな。

そのあと止まることなく、俺は一先ず校長室に向かつて行つてあの母の奇行について文句を言いに行くと土下座されました。

ええ、見事なまでの綺麗な土下座。思わず間抜け面したけど仕方ない。

そして校長曰く、まさかアノ癖が未だに直つてない事を知らなかつた。

ああいつた性格だつたのを忘れてた。

君には本当に悪いことをした、贖罪じやないが制服代と教科書代は全て此方が払わせて貰いたい。⋮らしいツス。

あんまりに低姿勢だから心配になつて声をかけたら泣かれた。

うん、ドン引きするぐらいに鼻水まで出してグチャグチャ。  
その後なんとか慰めて落ち着かせたら、まだこんなんじや贖罪にならないとか言い出してなんか面倒そうだつたから無理矢理お話しゆーりよーさせて教科書と制服だけ頼んでおいた。

いや、俺だつて懃々学校にそんな迷惑かけたくなかつたよ？でもそ  
うでもしないと帰してくれねえんだもん。

それじゃあ君に悪いから！とか言つてドンドン条件増やそうとするし⋮で、結果妥協出来る最低限度のこの結果に落ち着いたつて訳。  
そんときの校長つて少し残念そうにしてた。けど、どうしてなのか  
とか聞くのやぶ蛇つぽかつたから遠慮しておいた。校長先生のショ  
ボーンつてもはや誰得？

少しげんなりした気分で校門に向かつて歩いてる時の事。

「あ、心結さんじや！」

「本当だ。」

「……ブシャー」

「姫⋮？」

「アサシン?」

と、前にマヨイ、伊御くん、姫ちゃん、ミニワン、榊がいた。

姫が何故鼻血の噴水を作ったのか?とか榊が何故、俺をアサシンと呼んだのかとかは一先ず置いておこう…。

「なんかぐつたりじやね…」

「うーん?ああ、マヨイか…それに皆も」

「この十分チョイでいつたい何があつた!?

「大丈夫ですか?コレ、余っちゃつたお菓子ですけどどうぞ…はい、

あーん」

「ありがとー…。ん、うまい。心に染み渡る…」

口に差し込まれるように挿入されたのはニヤツキー。けしてポツキーなどではない。

細いビスケットにチョコでコーティングされたそれは姫ちゃんの優しさで美味しさが倍増してたと俺は語る。

⋮ニヤツキーって昔ＮＨＫの子供向け番組で無かつたか?

ううーん…青と黄色の芋虫…。

「甘さが舌に染み渡るとかじやなくて、心に染みたんじやね…。」

「それは、ほら。姫つちだからじやね?」

「ナルホドー」

「はああー、生き返るゝ。姫ちゃんはいい奥さんになりそうだ。結婚してくれ!」

「も、もう!!冗談でそういう事いつちやメッです!」

「鼻血出しながら言つても効果無いわよ…。それと…」

トン…

首に瞬間的な衝撃を受け、一気に意識が覚醒した。

後ろで榊とマヨイがなんか「無視だけはヤメテ」つて騒いでたけど

どうしたんだろうか？

「ハツ!?俺は一体何を!?そして知らない天井だ…」

「此処は外よ。」

「なんか意識が朦朧としてたみたいだけど大丈夫か?」

「伊御くん…。大丈夫だ、問題ない。」

「あの言葉は無意識だつたんですか!?」

「うん?なんか言つたつけ?それに少し残念そうだけど…俺がトッポ食つちやマズかつたのか!?」

「トッポじやなくてニヤツキーですよ!?!」

おお、そうだつた。んくでも、さつき俺つてなんて言つたつけ?  
なんか訂正しなきやいけないよな気がするんだけど思い出せん!!  
どういう風に氣がするのかつ『言うと、こう…ゴーストがそう呟く。み  
たいな?』

でも姫ちゃんつて本当に鼻血出しすぎなんだよね…。回りが慣れ  
ちゃつてるのか分からんがいつの日か血液足りなくなりそうで怖い  
んだよな…。

「…つて、俺つてもしかして、姫っちの事気になつてるのかな?」

「…直球過ぎじやないか//／

「ブシャー!!?

「にやつ!?

「ほほ~」

俺の発言に赤くなる伊御くんとミニワン。ニヤニヤするアホ。  
キユピソ!と無い目を光らせたマゾ。謎の躍りを始める姫ちゃん。  
うん、姫ちゃんは一旦落ち着け。別に気になつて当然なんだから。

「つて、アホつて俺の事か!?

「目が無いんじやん無くて隠れてるだけなんじやよ!?

「男子高校セーいの日常一♪」

「女じゃ!!」

テンポの良いツッコミに惚れ惚れするね〜ん。

でも伊御くんとかが赤くなるって事はこれって勘違いさせたっぽいね!

幼馴染みとか多かつたからこの手の会話つて前の学校じや日常茶飯事だつたんだよね。伝わるから、つい主語とか修飾語とか抜けちゃつたりね。

「あー、たぶん皆は近すぎて慣れて気付かなかつただけなんじやねえか?」

「皆、私の事が好きなんですか!?」

「…そういう事(なのね)か?」

今の発言でどうやら姫ちゃん以外は気付いたようだつた。⋮人間誰しもが思うことだよ。

てか、思わなかつたらそれこそトチ狂つてる奴位だろ?

今一瞬視界の端に赤い妹が居たような…。次の瞬間には銀色の軌跡と一緒に消えてたけど…もしかして鬼畜がいたのか!?

「ちよつと、姫ちゃんは落ち着いてね?」

「⋮ブー」

「うん、お前らは後でぶつ飛ばす。」

「御無体な!!」

「エンガチヨつ!?既に手が出てるぞ!」

ブー垂れるマヨイに、ぶたれた榊。この二人の扱いは分かつてきたな。

マゾは放置、榊はアタタタタ、ター

「その誤解は止めて欲しいんじやよ!?」

「それやつたら確実に死ぬ未来しかねえ!?」

と、放置して姫ちゃんの誤解を解いておかねば！最悪、今後顔を会わせづらくなる！

「オイ、誰だ今ヘタレとか抜かしたやつ！」

「野郎ー！ぶつコロコロしてやる!!」

何だ。転がすだけかつてガツカリしてんな？

安心しろ、吐くまで俺はお前を転がすのを止めねえ!!

冗談も此ぐらいにして真面目に言わないと相手に失礼になるからな…。ギヤグも許される所とされない所があるからな。ましてや回答一つで相手を傷付ける場面にギヤグはダメだ。

「…姫。聞いてほしい。」

「わい!? そのお、あの…。…はい…。」

「これは、本気だからしつかり聞いてほしいんだ。」

「…ゴクリ」「」

「姫はとても魅力的で誰かを気遣つてあげられる優しい子だよ。

いつもふざけてる俺から見ても姫ちゃんの良いところを挙げられる。それは全部本当だよ。

…気になってるって言つたのは心配になるからだ。姫ちゃんつて鼻血で良く血溜まり作つてるから足りなくなつたら…って怖くなるんだ…。大切な人だから余計に、ね。」

「…。」

「だから、さ。その、えつとー…。これからもこんな俺と友達でいて欲しい。」

「ズコー」

「まあ、そうなると思つたわよ…。」

「うんうん。良い話だ。」

転げるマヨイ神に、なんともいえない顔をするミニワン。うんうん

と仕切りに頷く伊御くん。そしてプルプルと震える姫ちゃん。

なんでや…なんでデイアベルはんを見殺しにしたんや！

何故かこのセリフが頭から離れない。何故？

「ふふふ、ふふ…ふ。」

あ、なんかデジヤブ。

プルプル震える姫ちゃんを見たマヨイはガタガタしている。榊は陸軍兵士よろしく伏せていて、伊御くんは首を傾げる。そしてミニワーンは…

「つみきさん、そのままでお願ひします。」

「何!?え、なんで!?なんで俺、縛られたの!?」

「…キューピットになるならもう少し女性心を知つた方がいいって事よ。」

「なんでや!?わいは眞面目に傷付けないよう最善を尽くした筈や!!」

「あのくだりでアレは酷いんです！」

私の純情を返してください!!」

「へ?てか、その鼻血大丈夫なのか!?」

「もう知りません!ふん。心結くんは一度優しさについて熟考してみてください!!」

「カハッ!!」

訳も分からぬまま、綺麗なボーデイブローを鳩尾に決められ俺は宙を舞つたあと、母なる大地に叩きつけられましたとさ…。

背後からはフィニッシュユ!!って聞こえた気がしたが、此処はブレイブルーじゃないのできつと幻聴だろうな…ゴフツ。

チーーーン。

## 6 新たな仲間、あらわる。

……。

え？

これは帰路についた時だつた。

それは姫ちゃんに殴り飛ばされた後のこと。意識を手放した後幾分かして目を覚まし、俺は痛む身体に鞭を打ち立ち上がつた。

何度か飛ばされた後、バウンドしたのか結構色んなどこが痛い…。でも、心が一番痛かつた。

あの温厚な姫ちゃんを怒らせちまつたから…。

：俺つてまだまだ未熟だつたっぽい？  
ぽいー！！

うん、止めよ。一人でボケても悲しいだけか…。

そして静かに帰宅…出来ないんだつた…。  
確かに右ポケットに…おお、あつたあつた。

テレレレレッテレ♪何か色々書いてある紙  
ノブヨさんボイス禁止？しつかたないなあ。

では説明しよう。この紙はとりあえず色々書いてある紙なのだ。  
スゴいのだ！

山寺さんも禁止？じやあどうやつてヤツターマンネタすれば良いんだよ!?リメイクされた方に関しては全然興味なかつたからこんなのがしか出来ないぞ!?  
それに山ちゃん禁止令が出たら龍が如くの秋山さんネタも封じられた事になっちゃうじゃん!  
なんだや!!

え、コイツはいいの？

…でもなんかいや。キバオウつて噛ませ犬っぽいし。

しかも翌々考えたらまだ一回も口に出してない辺り、扱いの差があるのが歴然だし…。

おつと、紙だつたよね♪

何々、そこから真っ直ぐ行つてポストを右に、コンビニの2つ隣  
…つてナニコレ？

珍百景？チャイマツカー

適當すぎねえか、これ？適當なのは俺の流すように出でてくるネタ  
だつて？そりや勘弁だ！

あ、ポストつてアレだ。違うよ？目を逸らしたんじやないんだから  
ね！！

……。

こわつ！？

全て予測済みなのか!?なんで!?

取り敢えずツッコむのも程々にして歩いてみる事にする。

まあ、幾らかしたら目の前にコンビニも見えた。うん。適當じやな  
くて的確だわ、コレ。啞然だよ。

「…これは!？」

テレレーン、テレレレレーレーン♪

あ、別に鼻から牛乳じゃないんで帰つてください。カモンつて言つ  
てもCome onじやねえから！

お前えの席ねえから!!くんな!!

「…クウン。」

「おーよしよし…つてなるかあー!!」

は？だつて目の前にいるのつてあれだよ？現代日本で見ることが

出来なくなつた狼だぜ？

捨て犬じやなくて、捨て子狼なんだぜ、これ。品種としては確かに  
コーカラス白銀狼。緋弾のハイマキか？

しかもこつちに首をコテンつて傾げてんのがスッゲエ可愛い。もう、モフリたい。だつて子犬の大きさで毛並みがもきもさなんだもん。

もさもさなんだもん!!

もちろん大事だから二回言つたんだぜ？そこんとこ宜しくな！  
ネタとか抜きにしてコイツに心臓を握られたような気がする。：  
ハツ!?これが恋だ!!

チャイマスネー。

「うぐ…だが、狼を養えるほど金……あつ、あつたじやん。  
問題も案外無かつたよ。ダメじやん。俺、籠落されちゃう!!」

「ガウ!!」

「うん。俺的にも今のはつまんなかつたさ…。だからつてタックルす  
んな。

今は小さいからいいけど大きくなつてからそれされたらひとたま  
りもないんだよ。そんな癖つけさせることにはいかん!!

お父さんそんな事許しませんからね！お前さんを立派な狼に育て  
あげるんだい！！

「うー…わん!!」

「よし。いい返事だ！今日からお前はエリマキだ!!…はい冗談なので  
足に噛みつかないで。」

ガシガシと噛み付く狼。まあ、甘噛み程度だからいいんあだけど  
さ。

…あと言い忘れてたけど、なんでSUN値がピンチになりそうな返  
事の仕方をしたし。（・ω・）うー（／・ω・）／にやー！じゃない  
辺りお前さんのアイデンティティを感じるぜい♪  
（・ω・）うー（・ω・）ワンつてお前…敬礼してんじやねえか  
…。器用だな、その手の関節どうなつてるん？

あ、頭擦り付けてやがる。匂いを付けんな！何回りに所有物アピールしてんの!? 所有者は俺でお前は逆じやボケ!!  
おりやおりや!! どうだ、参つたか！

「あらあら～仲良しね♪」

「え!?」

「ワン!!」

突然後ろから現れたメイド。彼女の正体は一体!?  
次回に続く!!

なんて訳ねえだろ。

始まつたばかり♪

：それは僕たちの奇跡～つてちやうわ!!

「ええっと…貴女は？」

「ふふ、申し遅れました。私は戌井　みいこつて言います。」

「え…あれ？あ、どうもツス。俺は宇団　心結です…」

「よろしくね」

「お願ひします？」

いや、訳分からなさすぎて全然意味が分からん…。だつて、え?  
エリマキ(仮)も俺の顔を見ると…つぶらな瞳で見返す。うん可愛  
い。

あ、違う。コイツ、只ガン見してるだけじゃん。舐めるなよ!  
狼なのに…。猫じやねえのかよ。

なめ猫改め、なめ狼。語呂悪つ!!

「ふふ、その子本當になつてゐるのね。その子、誰にも心開かなかつたのよ？」

貴方に撫でられてる時に尻尾が動いてるじゃない？他の子がやると怒つてるのか尻尾がピンつて立つてゐる。

でも、捨てられたのかある日此處で見つけたのだけど私は飲食店で働いてるから拾つてあげられなくて…」

「あ…なるほど。だから元々いたここで面倒を見ていたつて事ですね。」

これでメイドさんがこんな道端にいたつてことが正当化されたね。グラマラスメイドこと成井みいこさんはあらあらうふふと俺達を見ている。正直に言うとやりづらくて緊張して、しかも俺つて狼とジャレ合つてる姿見られたんだつて思つたら恥ずかしいつたらありやしねえ。

それにコイツ、狼は捨てられて親と離れ離れ…。

そんな時でした。

この時撫でてる手に湿つた感触がして、手に視線を送ると舐められてた。

…コイツがなんて感じてゐのかなんて俺には分からないよ。でも、気にすんなつて言われてるような気がしたんだよな。

コイツの居場所は無くて…一人で、この段ボールの中だけで生きてる。誰にも甘えないので、気高く生きてる。

それつて野生で生きるよりも過酷だよな…。

それなのに他者を気遣つてゐる。

「…なあ、狼。もしお前さんが良ければ家に来るか？」

同情とかそんなモンじやない。可愛いからでもない。

俺はコイツの生き様に格好いいって思つたんだ…。謂わば惚れたつて奴だ。

飼い狼としてじゃなく、友達とかそういうのとして俺は力になりました。一緒に歩みたいって思つたんだ。

「ふふ。いいわね、男の子つて。」

「そんなんじゃないですよ。俺は一人の人間としてコイツの力になればつて思つただけなんですか…それに、この子が立派に育つような育てかただつて分からんんですから。一緒に成長したいつだけです。」

「わん!!」

狼の返事は分からぬけど、一緒に頑張ろうつていう励ましだと思える。

尻尾をブンブン振り回して足元をぐるぐる走つてる姿は微笑まい。健氣にも思える。

「ううん。それは貴方の大切なかけがえのない思いよ。真摯にそう思つてるからこそこの子も心を開いたんじゃない?だつたら、それつて貴方が立派になつたつてことよ。」

「…そう、ですかね?」

「ええ、そうよ。」

「わん!!」

足にくつつく狼を抱き上げ、顔の近くに持つてくると見上げながら顔を舐められる。

その様子をみいこさんがニコニコ見て嬉しそうにしていた。

「ふふ、その子のこと頼みましたね♪

私ははちばちつてお店で働いてるので一緒にいらして下さいね。またお二人にお会いしたいですし顔を見せて下さいね♪」

「…はい!!」

それだけ言うと、みいこさんが抱いている狼の頭を撫でて帰つていった。なんかゆつたりしてゐる人だけどしつかりしてゐるなうつていうのが印象だつた。姉がいたらあんな感じなのかな？

まあ、俺は母と二人暮らしだつたからしらねえけどな!!

そして帰宅。先ず狼に名前を付けようつて事になつたので色々考えたんだが氣に入らないのかかなり頭をかじられた。

：オレ、オマエマルカジリ。

うん。獵奇的過ぎるのでその想像はやめてもらおうか？天使並みなキユートな子を悪魔みたいな目で見るんじゃねえ！四肢切断すつぞコラ！

実際はガブというより、アグアグつて感じだ。

それで格闘する事十分でネタが尽き、コーラサスハクギンオオカミからとつて「はく」と名付けた。そして氣に入らつたのが今は扇風機と化す尻尾を俺の頭の後で振り回して時折ぶつけてくる。

可愛いから許す！

そのあとは：描写がメンドイから適当にやるな。

- ・大家に挨拶。
  - ・部屋の掃除。
  - ・水道、ガス、電気の確認。
  - ・一先ずコンビニ。
  - ・何が入つてゐるのか分からぬ段ボールの開封
- 入つてたのは衣服、ケータイの充電器等の必要性の高いもの、何かの紙だつた。
- ・衣服を既に配備されてたクローゼットにしまう。
  - もともと必要がありそうな家具は既に配備済みだつたのである。
  - で、疲れて食事はカツプ麺とドッグフードを準備。冗談で一食分

買ったんだけど、はくが気に入つたらしく直ぐにペロツつと平らげていた。

：オオカミがドッグフードて…。

そこで、一緒に風呂に入つて和んで睡眠。

こん時にはくが布団に侵入&俺のシャツにインして窮屈になつたが楽しく1日を終われた。

これが俺の新生活初日。友達を作り、弄り、笑い合い、怒り、怒らせ、家族が出来た。結構色々あつたから忘れてたけど、朝のバスで心配してたことは嘘のように消え去つていた。

きっと、この転校は失敗じやない。そう、思いながら重い瞼を閉じたのだった……。

## 7 赤い色に染まるシャツ。

ええ、事実から言います。

新しいシャツが血だらけです。

そういった経緯について回想という名の形容しがたいものですが、付き合つてくれると嬉しいな♪

…おえ

これだけはねえ。正直言つて「キモーい、敬語が許されるのは小学生までだよね♪」状態だ…。うん…リバースカードがオープンしそうだ…。

そして回想。

今日の朝6：00頃という傍迷惑な時間に宅急便が来て起こされ、イライラしながら受け取った物は制服でした。

あの人だつて仕事だろうけどかなりブラックな宅急便だという事の証明にならないかな…。

仕事がブラック、やつてて睨まれて…踏んだり蹴つたり、泣きつ面に蜂、もはや泣きつ面蹴つたりだな!!

まあ、うん、あの会社は今後使わない方針で生活していこう。

そんなせいで何時もより早い起床したがやることも無いから朝食と弁当を作り、身支度するけど初めての制服に心ピヨンピヨンさせてコーヒー飲む。さあ、出発!!

となつて、出かけました。

察しのいいかたは既に気付いたかもな…。俺は気付かなかつたが……。

後悔先に立たずつて言葉、知つてんか?

俺は見に染みてるよコンニヤク（口）がーーー!!

登校時、俺は妙に人に見られた。そりや転校生だし見られるのがおかしいなんて思つてないけどそれでも、なんか視線集めるなつて思つたんだよ。だつて生徒、教師ならまだしも用務員さんまで見てくれるもん。そこで違和感を感じたのさ。

でもメンドイから「まあ、良いか…」で片付けたら…。

「おはよー」

「オッスー、おつ今日は普通に制服なんだな」

「…おはよう」

「おはようー、昨日のは大丈夫だつたんだな？結構派手に飛んでつたけど…」

「おはようです。うう…伊御くんもそう思いますよね…」

姫ちゃんが聞こえてるのに気付いてないのかボソボソといつてる言葉が聞こえちゃつたんだけど気にしそぎじゃないかな？当の本人ピンピンしてるんだしむしろあやまるのつて俺だよな？うーん…なら此処で気付かなかつた降りをするのが優しさか？

「ん？あー、前に居たの皆だつたんだ。気付かなかつたぜ♪ 楼とかマヨイとか影薄いからなあ…」

「そんな事、言われたことねえよ（ないんじやー）！？」

今日も息ピツタリ!! それに追撃と言う名の追い打ちをかけますん♪

じやあ、あえて真似するぜい？

「ふえふえふえ！」

「マヨイさんですー!!」

「姫つちは今日帰りどうする？どうせなら私が考案したゲームでもどうじや？」

ふつふつふ、腕がなるの♪

「な、何するつもりなんですか!?」

「いやいや、今のは普通にマヨイだよ。俺じゃない。あと、俺ならこのタイミングでイタズラするなら姫ちゃんじやなくて榊を痛め付けるかなー」

「俺かよ!?」

バツと振り向いた姫ちゃんに笑いながら、手を振つて否定する。

マヨイの復活も早くなつたもんだ！ヤハハ、俺のお陰だな♪

俺つてヘッドホン付けた異世界に行つた高校生の真似似合わねえな…。

石投げても音速ブツチしないし…座右の銘は『強きを挫き、弱きも挫く』じゃないもんなあ♪

「あはは、あんまり意地悪はダメですよ。」

「…私もこのタイミングで榊を弄ると思うわ。」

「御庭まで!?」

「ふつふつふ…腕が鳴るわ」

「なんか危険が迫つてる!?」

む、ミニワンも出来るな…。

その榊はと、いうとギャーって声で覚醒した榊がトランザムでミニワンから逃走。気のせいか、赤く光つてたような…。

G N粒子つて有害だし…殺つちやおうか♪

「ワーワー、待つたストップストップ!!死ぬ！死んじやう！だから勘弁して!?」

「命乞いすれば助かるというその幻想をぶつ壊す！」

二重の極み、うおおおおー!!!

おお、榊よ。死んでしまうとは情けない。ではここでトドメといこ  
うか、ふふ。」

「そげぶつ!?殴らないんかい!!投石つて酷くね！」

薄々感じてたけどかなりサディストだろ!!」

「なあにイツテンダ～♪」

「だよな、 s…」

「俺つてドSだぜ？じゃ、 いつてみよー！ オイツスー！」

「「オイツスー！」」

「マヨイと伊御までやるのかよ!! てか、 俺の謝罪しようとした気持ちを返せっ!!」

「まだまだ、 声じや小さい。 オイツスー!!」

「おいつす！」

「ヽヽでふよぶよ!? つか、 無視!？」

「ふよぶよっていうよりウイツチの真似だね。 …でもマヨイつて魔女とかよく似合いそうだよね」  
「ま、 俺はどつちかつていうとウイツチよりアルル派だがな！」  
「む、 貴様…見ているな？」

「おはよ～ります、 先生。 あんまり背後に立たないで下さいね？」

「はい、 おはよ～ります。 …つて、 ノールックで居場所がバレましたの！」

「いやいや先生、 居場所つて…。 すぐ後ろじやよね？」

「そこかっ！ 俺はゴルゴの13をツツコむのかと思ったぞ！」

「あ、 榊さん。 マヨイさん。 おはよ～りますですの」

「おお～、 先生の登場でうやむやになつたから自己申告するんだけど…さつきのオイツスはドリフターズだよ？」

「高校生の年代じゃないんだけど面白かつたからね～♪ よく覚えてるんだよね！」

「あとはひょうきん族とか鉄ドンとかか？」

「元気なのは良いんだけど怪我しないようにしてくださいね？ それと、 伊御くん、 御庭さん、 春野さんもおはよ～りますですの。」「「おはよ～ります」」

「…それで皆さんに少し訊ねたいんですけど心結くんの頭のそれってなんですか？」

「頭？」

「…………？」

え、ナニソレ怖い。俺とおんなじように姫ちゃんと伊御くんは首を傾げて俺を…というか俺の上を見てた。

それで、メタギアのスネークみたいにビックリマークが出てた！擬音にして”テエレン”だな。

「伊御さんと姫つちは気付いてなかつたんじやね…。」

「俺は敢えて触れてないのかと思つたぞ！」

「子犬可愛いですー！」

「ガウつ！」

「怒られちゃいました！」

え、なに今の？ガウつて…それに今気付いたが心なしか頭が重いような…それに鳴き声も上から聞こえたし…。

子犬？え、心辺りが有るんだけど…

「…あ、そういうえば今日の朝見なかつたような…。」

「飼い犬か？」

「…うーん、何処かで見たことがあるような気がすんだよなー。」

「およ、榊さんは見たことあるん？」

それに見たことない犬種だけど何て言うの？」

オオカミです。

そう言えたらどれだけ楽なんだろうね…でも学校だし、問題になるよな…。

じゃあ、オオカミに似た犬種…犬種……あ!!

「し、シベリアンハスキーです。ちょっと珍しい柄してるけど…」

「「そうだつたんですか（の）一」

ギリツとしてなんか心結に似てるな!!

「どう、ううん！」  
食い力は食い主に似るって奴じゃれ！」

柄かいまだに悩んでるのか怖いけど  
諂魔化せたようでホッとした

—先すどうにかなつたか  
今から帰つたら遅刻するし…どうしよう

私が校長先生に許可をもらってきてありますので仕方無いですから

「ふえええ――――――!?

「ありかどうござります！俺先生の生徒で良かつたです！本当にありがとうござります!!一生貴方に付いていきます！」

「せせせ、先生として生徒のためでしゅの////」

感極まつて抱きついてしまつていたが、この時は本当に嬉しくてそんなの気にしてなかつた。

先生が囁んだとか、後ろで「囁んだ…」とか「羨ましい…」とかそんなの聞こえん。俺は今嬉しくて、嬉しくて堪らないんだ！

「はやつ？」  
先生が「わわわんしゃーーー！」

「チーターも目じゃないんじやねえか?」

「それは流石にないでしょ？」

もうダツシユする先生はあつという間に消えてしまった。え、ええ

：置いてきぼり？

と、とりあえずハクについては問題ないってことで良いんだよな？

「わん!!」

「お前が返事すんなよ…つたく。ふふ。」

——キュン

え、なんだ？今の水10でやつてた宮迫が『車車車、車3つで轟です』みたいな声は？

コレは流石に古すぎて伝わん無さそうだな…。

しかもきゅんじやなくて『うん、ギュンっ!!』だしな～♪

「あはは、だらけて垂れかかつたら前が見えなくなるだろ？ホレホレ、しつかりしてくんないと困るんだよー。」

やつぱコイツつて、利口っぽい。

俺の言葉を理解してんのか直ぐに頭をどかしてくれて見えるようになつていて。…まあ、尻尾がプロペラになつてベチンベチン背中とか首とかに当たつてるんだがな。

それに犬っぽい！

「うん、いい子だ。そんなお前に御褒美だ。」

良いことしたときは全力で褒める!!

掃除好きの愛犬家の坂上さんがそう言つてたもんで実行してみました！もうムツゴロウさん並みに愛情を込めて撫でまくる。例えだけど、撫でボツ！するぐらい撫でて撫でて撫でまくつた！

背中を叩く尻尾は勢いが更に増して気付いたら気持ち軽かつた…。

おい、まさかほんとに尻尾で飛んで？いやまさか…な。

「ボンバヘッ」

ブシャー!!

「姫つちーー!?」

何があつたのか、また血を溢れさせる姫ちゃん。…ほんと感受性た  
かすぎじゃね!?

…おい、その噴水の向きつて…!?

「アガペー!?

「しゅ、しゅみましぇん…」

ええ、勿論我が純白の鎧…白のシャツが綺麗な赤色に染められまし  
た。そりやあ基が赤いシャツって言われても違和感がない程度に  
真っ赤だぞ。

ほら、皆も一緒に!!

この手を放一すもーんか、真っ赤な血かーい!

あはは、以上。今日の回想でした！

## 8 驚いたら罰金な♪

テレレツテテテツテ♪

心結は血塗られた呪われたシャツを装備していた。  
過去進行形!?ヤメイ!!なつ脱げない!?何故だ!!

「何一人でパントマイムしてるんだ?」

「うわっ…本当空氣読めないな♪ 楠さんはダメダメだ。もう駄目だ  
な。死ぬしかないな♪」

「辛辣!!なんでそんなに罵倒されなきやいけないの!?」

「そりゃあ俺がドエスでお前が楠D A K A R Aかな♪」

「もう名前が別称!?」

「まつたく、道の真ん中で騒ぐなよ。回りに迷惑かかるだろつたく。」

「俺か!?俺なのか!?俺が悪いのか?」

オコなの? プンブン丸なの?

だが、皆に目配せしてみると楠に見えないところでグツジョブして  
るのを見て、ニヤアーニーをする。

楠はその悪どい顔をみて一步、二歩と後ろに下がっていたが甘いな

♪

「楠煩いわよ。」

「ああ喧しいな」

「楠さんは少し自重っていう言葉を知った方が良いじやよ?」

「…え?」

追い討ちをかけて確実に追い込んでいく三人にノリだけで意外と  
黒いことするなあ~って思つてたんだけど、我らが天使姫ちゃんは一  
人分かつてなかつた。

うん、でもだからこそフォローしなかつたことで楠のHPを削つて  
いつてるんだろうけどね?

説明するけどＨＰはヒットポイントじゃなくてハートポイント…  
心身的ダメージ値だな。このメーターをふりきるとＳＡＮ値がピン  
チになるんです！

はいよつてくるんだよ、貞子が。

「ニヤル子じやない!?」

「…マヨイは凄いな！自重と自嘲をかけて榊に的確に抉りに行くなん  
て！よし、俺も行くぜ！」

「やめろおおーーー!!しかももう十分！さつきの間つて確實に判断下  
してた時間だよな？あえての無視だつたわけか!?なんなの、ついには  
泣くぞ？」

「ふむ…あとちょっととか。」

「確信はあーん!?ドエスつてレベルじゃなくね!?もうＳの仮面を被つ  
たなにかだよ!!」

「魚雷飛びだよ!!」

「走り高飛び関係えねえ!!」

今日も鋭いキレだね！本調子っぽいしもういいかな。

「べ、別に榊の体の健康を遠回しに確認したわけじや無いことも無い  
んだからね！」

「むしろトドメ刺してくるから!!」

「ツンデレじや…」

「あれがツンデレなのか…」

「伊御はもう少し人の心情に機敏になつたほうがいいわよ。」

「ツンデレだつたんですか!?ならいいことしてたんですね!!」

「「「し、信じちやつた!?」」「」

驚きすぎて皆が姫ちゃんに向かつて首がぐりんつてなつた。怖い  
とは思うけど、俺も人の事を言えないでの何も言わない。首つてこん  
なに可動域広かつたんだね！ウフフ

もう全部妖怪のせいって事にして解決しないかな?  
やつてなんだけど収集がつかなくなっちゃったんだよね…。どうしよう…。

「いや、無言で踊り出さないでほしいんじやよ!」

「ヨーデル、ヨーデル、ヨーデル、ヨーデル、ヨーロレイヒ♪♪」

「なんか違いますう!?」

「ちょっとブランコ乗りたくなった。でもそれよりも面白いのが頭に浮かんだんだよね…。」

というのもミニワンがハイジの服着ておしーえてーおじいーさんしてる姿が思い浮かんだんだけど、違和感が仕事しねえんだけど、どう思う?

もし演劇するなら配役はこんな感じじゃない?

伊御くん…お爺さん

俺…木A、B、C

ミニワン…ハイジ

姫ちゃん…クララ

マヨイ…ヨーゼフ

キクエ先生…クララの家庭教師

榊…。

「おれ省かれたああー」

「男のキャラクターが思い浮ばなかつたんだ。すまん。」

「…たしかに其処まで重要度のあるキャラクターとなると男性つて確かに少ないんじやね」

「馬車引きの人とかいましたけど出番もあんまりありませんもんね。」

「それより木だけでABCつているのが?」

「バカヤロウっ!!」

「アスラン!?」

「殴られた時のかけ声が京谷さんみたいになつてたね…。」

「お前はあ!!お前はなんにもわかつちやいねえ。そこに確かににあるだけ生まるる安心感。なくてはならない存在、それが木だ!!生物学的にももし植物が無ければ人間という生物も生まれることがなかつたんだぞ!それを今、お前はバカにした。神様、仏様が許してもこの俺様がゆるさねえ。この聖天太斎孫悟空様がな!」

「お前、人間!」

「カカロツトオー!!」

「そつちじやねえー!!」

「あ・クリリンの事かあー!!」

「違うのはセリフじやねえ!!」

「おれ、めんどくなつてきた。」

「じゃあ止めろよ!」

うん。やつぱり楽しいよね♪友人弄りはやつぱこうじやないとね  
ヽ、お?前方に豆腐発見!!

突貫します!

「よし、許可する!」

「はつ伊御総長、心結一等兵いきます!!おれ、無事この戦争から帰つたらあの子に告白するんだ…。はは、なんてな。

じゃあ、行つてくるぜ…」

「心結うううーーーーー!!」

「無茶しやがつて…。バカ野郎…」

「榊さんと心結さんは分かるけど伊御さんまで乗るつて珍しいんじや。」

「この前、榊の家で戦争の映画見たつて言つてたわよ?」「だからだつたんですね~」

そんな声が聞こえたけど、そんなことより今は豆腐だ!!バールでもめり込ませればいいのかな?

バールにめり込んだ豆腐の様なもの？

あれ？これじゃあ逆か。んん？これでもいいか…物凄いんだし！

「おっはよー、京谷！」

「おはようさん、つて朝からすげえー！？」

「ん？何が？」

「おま、お前…大丈夫か!? そんな状況で登校なんかして、なんなら先生に休みの報告ぐらいしておくぞ!?」

「京谷が…デレたあー…!!」

「京谷のツンデレ、キモい。」

「うおおおい!? 楼、そんな事言つてる場合じやないだろ！心結が…心結があーー」

「え、フラグでも回収した？」

「ある意味それが正解っぽいねん。姫つちの被害者じやし、死人に見えなくもない？」

「あれ、マヨイ？ それに春野さんつて事は…？」

「たぶん京谷の勘違いじやねえか。」

ポカンとしながら見る俺の顔を見て京谷がホツと安堵してた。

うん、いいやつだね。ツンデレついうかキヨンデレっていうの？  
キヨンくんもビックリだね！

弄るまえから盛大に疲れてるみたいだし、まあいいか。

「お、もう着くな♪」

「ああ、ビックリし過ぎて時間の経過が分かなくなつたがな。」

「いきなりアレだつたら誰でもビックリね。」

「たしかに…」

「で、スルーしてたけどその頭の奴は？」

「ガルルル r」

「あーこらこら。ハクつて言う名前で昨日偶々拾つた…犬で気付いた  
らついて来ちゃつてたんだよ…。」

「なんかすげえ見られてんだけど…」

「気に入つられたとかじやないか?」

「むしろ噛みつきそうな目をしてるんじゃけど…」

「元からじやないかしら」

「ええー!? 可愛いじやないですか!」

「睨んでるのは仕方ないよ。捨て犬だつたんだ、コイツ。

それで人間不信氣味だつたんだよな。それでも気に入られて飼う事にしたんだ。ほら、こうやって頭撫でると目を細めて和んでるの見えてると落ち着くんだあ！」

「心結がデレデレだつ」

「確かにこんな姿昨日の姿からは想像がつかないな。」

「でも、ちょっとキュンつてきたんじや」

「もう姫は鼻血の噴水を作つてるわよ。」

「はは、そうそうなんだ…。てか、俺つて皆にどんなイメージもたれてんの? 俺動物とかつてかなり好きなんだけどどうなんだろう?」

なんかよく分からぬけどあんまりよく思われてないとか? でも出会つてばつかりだし印象も悪くない…はず。んで、昨日1日でなにがあつたかななんて考えたら弄り倒して笑いあつてたから結構お調子者な感じだとと思うんだけどどうなんだろう?

「……。」

「さつきから姫ちゃんは静かだけどどうしたの?」

「う、ううん。何でもないですよ!? ですよ!!」

「いや、何があるつていう雰囲気で言われてもなあ、なんてな。もしないにか相談があればいつてくれ」

そんなのないと思うけどな! でもなんとなくいつた方がいいような気がしたんだよね。てか、イヤな雰囲気醸し出してたから誤魔化す

ためにもお調子者の道化を演じさせてもらつたつてだけかな。

それで当の姫ちゃんはとすると、スッゴい真剣な顔をしていた。何

かを言いかけては諦めて…。意を決してはそれを止める。それでふざけてる場合じゃないんだって思つた…。

「俺はバカ野郎だし、どうしようもない奴だけど…誰かの為に体を張れる。誰かの為に傷付くことに抵抗なんてない。それが俺って言う人物で、変わりようのない不变のものだ…。ま、まあ…言つちゃえば言いたいことは言うのが良いぜつてことで!!」

すつげーハズイ。いや、言つてる間はそうでもなかつたんだけど、いざ意識してみるとドンドン恥ずかしくなつた。

「そ、そうですよね!!うん、背中を押してくれてありがとうございますう。じゃあ言いますね！」

そして姫ちゃんが落としたのは小さな物なんかじやなく、核爆弾級の兵器だつた…。

「心結くんの言つた告白つて誰にするんですか？」

俺は言葉を失つた。…どうせなら一緒に意識も手放せれば良かつたのにな…。

## 9 ロマンを求めて

「…それで、言つてもらつてもいいですか？」

「私も詳しく知りたいなあつて♪」

「恋に恋する乙女は気になるんだよ？」

「あ…あははあ…何がでしようか？」

…これがジャパニーズ shurabaですか。

そうですか…。

目の前には三人の女性。一人は姫ちゃん。次に咲さん。最後に佳奈やんなんだけど…どうしてこうなつた…。

現在私めは昨日と同じ様にミニワンにぐるぐる巻きにされて引っ張られました！ いつたいあの小さな体の何処にあんな怪力があつたのかつていうのは気になるねん♪

その時の様子だけど西部劇にある馬に引き摺られるアレを想像するものが正解ですぜい？ んでんで、教室まで来ました！

「まさか階段までこれとは思つてなかつたよ…。」

「大丈夫ですか？」

「天使だ。目の前に天使がおる！ これさえあればもう何もいらない（キリッ）

まあ、この姫ちゃんが言つた告白つていうのが大元なんんですけどねん♪。

それでこうなるのもさつきあの場に落ちた核弾頭、告白の一言が原因ですわい。その時に偶々通りかかつた崎守さんの号令のもと、マヨイが悪ノリしてミニワンをたぶらかして有無を言わせず手伝わされた京谷。

余りの手際の良さにいつもならツッコンできそうな榎は目を点にしてる内に俺がドナドナされていた。助けを求める隙もなかつた…。伊御くんも止めようとはしてくれたんだけど、ミニワンに「女の子は時にアグレッシブになるものなの…」つて言われて黙つちやつただけど…。

伊御くんのことだから女の子の嬉しそうな顔を見て、言わないので正解とでも思つたのだろう。

俺からしてみればこの時の姫ちゃんとマヨイと崎守さんの顔は「綺麗な顔してんだろう（女の子三人が）、これ（俺は後で）死んでるんだぜ？」だつた。

佳奈ちゃんはドナドナされた終点の教室で事情を聞いてこうして詰め寄つたつて訳です。

…あ、これでどうしてこうなつたのかの説明が終わつたつて訳か！  
案外アツサリしてた！

どれくらいのアツサリ感かというと新作のポケモンぐらいのアツサリ感かな？

1日でリーグ突破しちゃつたし…。

まあ、そんな訳で気付けば学校ですよ、皆さん。  
身体中擦り傷だらけですね…。たはは…はあ…

「それで俺の好きな人だつたつけか？」

「告白の相手ですよ、心結くん」

「いや、姫ちゃんそれおんなじじゃないかな？」

「佳奈の言う通りよ。そっちの方が回りくどくなくて良いじゃない。」

あはは、ホント律儀やな…姫ちゃんらしいつちやらしいんだけどね。でも、どうしたもんかなあ…？

実はネタで言いましたとでも言えばいいんか？うーん、本当のこと

だけど納得してくれなさうだしなあ…。

ならあえての人物名を言う？ 驄目だ…即決でこれだけは禁止させてもらおうか…。

俺はあくまでもキュー・ピットだから、そんな不逞なことができねえぜってな。

だとしたらどうやつて言い訳を考える？…駄目だ告白なんてしたことねえから分からん。ましてや昨日そういうので怒らせたばかりだし…。誰かに助けて…は無理だな。

伊御くんは頷いてるし、きっと仲良くすることは良いこととか考えてそう？

次に京谷なんだけど咲さんにかしづいて…怯てる。助けを求めるのも無理じゃねえかな…。

祐は論外だ、考察する予知すらないな。

アイツなら楽しんでるだろうからなあ。

ううむ…。告白、告白かあ…ん？あら？

うし!!これだ!!人間としては最低だけどこれで俺が汚れ役を請け負えば全部丸つと解決だつて訳だな！

んじやまあ言つてみよう、

「なら言わなきゃいけないな！俺がしようとした告白についてと好きな人、だよな。」

「はいです!!」

「…あら？」

「咲もなんか変な言い回しなの気付いたのん？」

「なんでかしらね…嫌な予感がするんだけど…。」

あちやー、気付いちやつた？俺つてC○C○壱番でやらかしちゃうんだよね。

誰だ！カレーをデイスつた奴は！それはカレーが好物の俺に対する挑戦と取るぜ？

よろしい、ならば戦争だつ！！

俺の拳が真っ赤に燃える！ばあくねえつゴッドおフイン  
ガアアーー！！

お、このネタはちゃんと通じたかな？いやいや、ガンダム史上一番  
好きなんだよね。熱いし、世界の見方とか結構辛辣だけど俺の考  
えに近いものがあるしな！

男はやつぱりロボと展開の熱さを求めちゃうんだ!!

：つは、思わず熱くなつちまつたな♪でも男性諸君！君達にも分か  
るだろう？

「ウオオオオー！！」

「煩いのよ、京谷の癖に」

「もうアイアンクローはイヤだあー」

もうこれって鉄板のネタなのか地に沈んでいく京谷。咲さんが  
段々怖くなつていくのは一種のミステリージャンルかな？  
そして京谷がこうなる事を分かつていた筈なのに叫んだのを表し  
て俺はその散り際を見てこう言つてやる事にした。

「京谷、お前：最高な男だつたぜ：」

「倒されたのか!?」

「お前はもう死んでいる。」

「…………ん？あれ？」

「北斗神拳正統後継者じゃないんだからそんなの使える訳ねえだろ  
……。いくらなんでもそれは、な…ナイワー。」

時間が経つても何も起きないことにいぶかしんでた京谷に呆れな  
がら見てやるがポカンとしてホツとしたように胸を撫で下ろす。：  
でもそのひ弱な反応は男としてどうなんだつて思うわけですよ？つ  
いこうも思うんだ。

それでもーーー（ピー音）ついてんのか！それでも俺はやるぞ。  
やつてやるぞおー！なんてね（笑）

「何考えてんの？バカナノ？シヌノオ？」

「饅頭!? 神も惡ノリすんな!!」

「くつ、やるな!! 柿!! なら俺もだ! ウオオオオー!!」

「なんで今回そんな熱い青春マンガ染みた展開なんだよ!!!」

ぞ京谷！」

「心結のいう通りだ。こう言うのは頭で考へるんぢやない。心で感じとるんだ！さつきまでのお前はどうしたんだ!!」此処で、

俺と榊の戯れ言に肩を震わせて雷が落ちてくるエフェクトが背景に見える位に驚いた顔をしてるんだけど本当にアイツって奴は面白い奴だ…。俺もアイツと友だつて思うと楽しいよ…。

いものをよ！」

「それでこそ男だ！」

「伊御：お前は俺がこうなる事を信じて静かに：俺は馬鹿だつた。」

「だからうつせこって言つてんの!!」

ほら、分かつても地雷に飛び込むんだもん。たしかに俺と榊も悪ノリさせたけどさ…ああも綺麗に自滅出来るか？普通。俺はアイツ以上の自爆男は見たことねえ…。オモロー!!

芸をする人間にとつてはサイコーの誉め言葉だつたな！

俺達にとっての大先輩って出川さんとタチヨウケテアヒヨウエク  
ラブ、こつこクラブだもんな!!

「ふは、アヒヤハハハハ

「えつと、これって？」

「まあ分かつてたことだな。伊御くんもナイスアシストだつたよ！」

「男にしか分からぬ世界つて奴ね…。」

「そ、そうだつたんですか…」

「いやいや、姫つちそれちよつと違うんじやないかなあつて」

皆でこうやつてグダグダにしちやつたけど…これでよかつたのか  
？京谷が人柱になつちやつたけど助かつた…？

案外実はそこまで気にしてなかつたとかだと俺としても嬉しいか  
なあ♪

では続きましては…

「ふふ、これで心お氣なく聞けるわね♪」

デスヨネー。あは、アハハはは…はあ  
うええ、咲さんの一言で加えて佳奈やんも詰め寄つてきたし諦め  
ろつて事つすね。はい。

「まあいいか。で、何処から説明すれば良かつたんだつけ？」

「告白についてを言えばいいんだよ？」

「うんうん。教えてほしいです。」

「諦めたんだくふふ少し気になつてたのが聞けるつてなると嬉しいわ  
ね」

うーん、やつぱり女性つて恋愛事情の話つて好きなのかね♪。  
まあ、その事を騙す俺は最低な奴だな…。

これが波風立たないやり方つて頭じやわかつちやいるんだけどど  
うしてもしたくなくなつちやうんだよ…。へたれた訳でもなく友達  
を騙すつていうのが嫌なんだよな…。

「ふ、ではいいましょか～告白はキクエ先生にだよ。俺、実は一人暮ら  
しなんですけど高校生なら寮暮らしした方が良いですかねってな。  
用事の際何も出来なくなる可能性がでてくるじゃん？だから信頼  
してる先生にはあんまり心配かけたくねえなって訳で告白するつて  
言つたんですねえ。好きですね～。」

ポケモン大好きクラブの人の真似付きでやつてみました！どう、ど  
う？上手くね♪

「…やつぱり。予想的中ね（だ！）」

「…またですか？またなんですね！もう良いです。怒りましたよ！心  
結くんなんて知りません、フンッだ！」

置いてかれるように教室から出ていつてしまふ姫ちゃんを傍らで  
見ながら一つだけかんがえていた。『嫌われたけどこれが正解だつた  
：…んだよな…』っていう後ろ髪を引かれる思いだけだった。  
くく、女々しいな、俺…。

## 10 戦場の絆

みーなさーん!! 聞いてくださいよ!

学校に来てたつた二日目にして何故か新聞の号外にのつてゐるんですよ!? スゴくね、スゴくね?

因みに写真とかはまだ無かつたからいいんだけど中の記事が結構不思議なんだ。名前、クラス、性別、好きなもの…まあ俺が昨日一時間目の自習の際に言つた奴は大抵書かれてたんだけどその下にどんな人物なかつていうのが寄せ書きみたいな感じで書かれてたんだ。

云わばクラスメイトの第一印象なんだろうけど…一番多かつた意見がよく分からぬ人だつた。

まあ、これに関しては仕方ないとも思うんだけどね♪ゲームの話で盛り上がりがつたり、近所で起きた事件の話を皆の横で聞いて領いて知らないことを誤魔化してたり、京谷いじつたり、物真似してアホやつたり、榎にアターしたり、佳奈やんと一緒にファイト一発したり…こうしてみるととにかくマトモなことしてないなあ…。

おおつと、それで告白についてであの三人の事だけ結果から言うと無言を貫き通して見詰めて誤魔化してたらなんか分からぬままにうやむやになりましたとき、チャンチャン♪

え? もつとしつかりした情報寄越せ? 貴様ー何様じやー?

読者様?なら仕方ないね!

「ねーねー三人に聞きたいんやけどどうしてあんなに聞きたがつてた情報について言及止めたん?スピリチュアルパワーでも働いたん?」「そういうえば作者つて神田明神で初詣したみたいだからねー」

「佳奈、それはメタジやない?」

「メメタア…です。」

「で、眞実はどうなんだ?」

聞くと直ぐに目をそらされました!俺は何かしたでしようか?  
あと、忘れてないので頭をかじらないで下さい、ハクさん。

「もう、良いのよ!それを聞くつて言うのは野暮つてものよ?」

「そうだよ!そんな真っ直ぐな瞳で見られたからつて訳じやないからね!」

「佳奈さん…それ全部説明します…。」

「…そうなのか?真っ直ぐなんて言わたることないんだが。」

「心結さんつてやっぱり鈍感なんじやね…。」

「いや、鈍感つていうか天然か?」

「うん、そうなのか?」

「伊御だしな…」

「西原の言う通りね。」

「「うんうん」「

「なんか失礼なこと言われてないか」

後ろでの会話は伊御くんの話だな。結局あの話はうやむやつて事で終局だな。

局つていうと囮暮だが俺は因みに囮暮は出来ないからヒカルの暮の如くサイさんは見えないからな!ルールすらしらないぞ…。あえて言えば五目並べなら出来るけどな♪

「まあ、いいか。」

こんな感じで二日目の朝が終わりましたとさ、チャンチャン。

…なんて訳なかつたですね。

一時間目が潰れて、集会になつてました!!

そりやあ確かに転校生だもんね。いや、忘れてた訳じやないよ?  
だつてクラスメイトがキャラ濃いとかそんな言い訳する訳じやない  
からな?忙しないからとかでも無いからね!お兄ちゃんなんて(r y  
え、略すな?ネタが雑?

仕方無いじやん。むしろこのタイミングでボケられただけ褒めて  
欲しいよ…。

「…では転校生の一年、宇図 心結くんの言葉です」

この通り、いきなりこれだ。なのにボケたんだぞ？緊張で胸が張り裂けるぞ！？

心が鉄でできてない限り結構クるものがあるからな？

「よ、ツハ！！…つと。みなさんどうも、紹介にあつた通り宇図 心結です。…。あ、まあその…宜しく！」

「え、終わりですか!? ちよ、ちょっと、心結くん!! 心結くん!？」

司会進行役と思われる先生からめっちゃ言われたけど気にせず元の位置に戻っていくと他の生徒からも見られたよ？  
考えてみてくれ、いきなり前に出て話してくれとか言われてもできるわけないじやん。

むしろ思い付きで壇上でマイク投げてパフォーマンスしただけでも機転が効いたと思つてくれ。

こんな感じで終わつた。

…このあと先生に呼び出しを受け、恒例のメツ!!をもらいました。  
解せぬ…。

そして、なんやかんやで学校が終わりました！

いや、キングクリムゾンじゃないから。ちゃんと授業とか受けたし、お昼も食べたからね？

授業の際、キク工先生が壇上でヘッドスライディングかまして倒れ

た所で、不謹慎な先生が息をしてない…っていうネタをしたあとに何故か怒られ、罰として俺が保健室に運ばさせられたり（先生が恥ずかしながらも何故かお姫様だっこを強要されました）、お昼の際に出したこの弁当のせいで一悶着あつた（誰に作つてもらつたのかという口論からアイアンクローラの流れだつた）けど兎に角終わったことは気にしないのだ！

言いたい事はまだまだあるけどこんなもんじや！

スクエニのゲームに白いふさふさのカモノハシみたいな居なかつたつけ？ドラゴンクエストで出てくる雑魚モンスターとして扱われるくせになんやかんやで雑魚くないアレ。

「それ、モモンジャじゃないか？」

「おおー、それそれ。流石京谷。でもよく覚えてたな？」

「まあな。結構好きだし」

「ああー納得。」

確かにどことなく感じる小物臭とか、やられ役とかそんな感じがあるもんない。京谷＝モモンジャの公式が出来るぐらいだもんない…。親近感からか…

「ちやうわ!!」

「中國の犬？」

「それはチャウチャウ！」

「関西の否定」

「ちやうちやう。…これイントネーションが違うだけじゃん。」

「ハア？何言っての、お前」

「なんかメツチャムカつくな、その顔！」

「パークスクス。」

「ぶん殴るぞ！」

「ギヤー！」

「テメエは俺を怒らせた」

「しゅんしゅんしゅん」

「クリリンの事かあ！」

「あ、ドラゴンボールなんじやね」

「そこはジヨジヨじやないのね…」

「伊御くんも榊くんも止めに入らないんですか!?」

「姫ちゃん、大丈夫だよ！咲がホラ」

京谷から意識を外し、伊御くん達の声に意識を傾けた瞬間の出来事  
だつた。視線を元に戻そうとしたら…  
そこには…

「フギヤアーーー」

「きょ、京谷あーーー」

「二人とも少し騒がしすぎじゃないかしら？」

「ハイ、ソノトオリデス。スイマセンデシタ。ナノデソノテヲ…ウ  
ギヤー」

雪国ならぬ出血で真っ赤な大地が広がりました。

恐怖心から声が上手く出せなく、片言になりました。何時もは端から見るだけのこのアイアンクローラーは笑えない威力でした。…あ、婆ちゃん。今からそつちに向かうね…。

「どつせい!!」

「眩しいよ、熱いよ、はつ!!アンリエットさん」

「誰かしら、それ？」

「え、咲さん？あれ俺は何してたんだつけ？婆ちゃんは？それに背中に痛みが走ってるような気も…」

「気のせいじゃないかしら？」

…で、そのアンリエットってだあれ？」

「いや、あの…咲さん？怖いよ？」

「ふふ…」

拝啓、天国の婆ちゃんへ。

気温もめつきり下がり、冬の訪れをヒシヒシと感じさせる今日この頃。婆ちゃんは如何お過ごしですか？

俺は元氣です。でも元氣過ぎるが故にソツチに行くかもしされません。先人の教えもバカに出来ないことを身をもつて理解させられたよ…。

口は災いのもと…。

では、お体お気をつけください。

p. s. お風呂上がりに耳掃除をすると湿っている。

「俺もそれは聞きたいかな？なんて…あはは」

「ギルティ」

「待って!!ジョーク!!ジョークです！」

アンリエットはリュパンの母の名前です！知り合いじゃないです

!!

「それならそうと直ぐに言いなさいよ。まつたく…焦つちゃつたじゃない。」

「す、すまん…。」

冷や汗が止まんなかった。気付けば二、三歩下がっていたが何時だか言つた言葉がブームランになるなんてな…。  
笑顔、怖い。

「あれ？ そういうえばなんで咲さんが焦つてたんだ？」

「え！」

「ダメです！」

「ん？ 姫ちゃん？ 声荒げてどうしたの」

「ミユミユ、それは女の子の秘密つて奴なのさ！」

「…ま、いいか。」

佳奈やんと姫ちゃんに距離を詰められた為に納得してないけど折れた。皆、考えても見てくれ。

もし敵がいるとしよう。

こちらは無防備、だが敵は構えていて目と鼻の先。これつてもう摘要でるだろ？

ボクシングならアツパー入れられる寸前だぜ？

無条件降伏あるのみだろ？

第二次世界大戦の日本でもないし、バカじやない。受け入れるよ、まだ死にたくないもん…。

そして俺達を無視して何故か口ケット鉛筆を構えるマヨイが目に入った。

「くらえー、伊御さん！」

「……。」

ヒヨイ

「そんなアツサリ!?」

…サクツ

「かふつ」

「ええええーーー!？」

直ぐ後ろで口ケット鉛筆の刺さる京谷を見た瞬間に助かつた筈の俺達に止めが入つたことを直ぐに理解した。

スローモーションの様に感じる俺の感覚の中でゆつくりと地面に倒れる京谷へ、戦友が倒れ伏す事への無慈悲な一瞬の悲しみが満たす。

もう俺にはなりふり構つてられなく、伊御くんとマヨイの声が：回りの音が一切として聞こえなくなつていた。悲しみにくれる事も出来ず、倒れる音だけが静かに耳につく。

俺は倒れた京谷に走り寄る。肩を持ち、うつ伏せだった京谷を仰向けにさせる。

「なんで…なんでなんだ…。京谷、京谷!起きてくれ。俺を見捨てないでくれ…。残していかないでくれ…京谷あ…。俺、まだお前に謝つてないんだ。ありがとうって感謝の言葉も言えてないんだ。目を開けてくれ!お願ひだ…。お願ひだよ…。嫌だ、嫌だよお。」

目から零だけが頬を伝い、垂れ、顎にその零が集まり落ちる。

ピチヤン…

そんな音が耳に届いた。俺の涙が京谷の頬に落ち、静かに床に流れしていく…。

「心結…。顔を上げてくれ…。俺はもうダメだ…。俺の分まで心結が生きててくれ…。幸せになってくれ…。

俺さ、短い間だつたけどお前に会えて良かつたよ。つまらない日常生活がかけがえのない物になつたんだ…。俺はダメだけど、お前だけでも…お前だけが……」

それだけ言うと京谷の顔は力なく落ちた。

「京谷…。お前、最高の男だつたよ。俺は京谷の友達になれて誇りに思う…。そこで見ててくれ。俺、頑張るからさ。お前の分まできつと…必ず…絶対に幸せになるからさ。それが俺に出来るお前への手向けだよな…。クソ、目から汗が出やがる…。」

「京谷さん」

「京谷…」

伊御くんとマヨイが俺のすぐ横に歩いてきた。

俺は流れでるものを見てもせず、二人を見上げた。そしてソツと静かに抱えている京谷の頭を地面に下ろす。

戦友の立派な散り姿をこの目に焼き付けて、二人に向き直る。

「伊御くん、マヨイ…」

「はい…」

「ああ…」

俺は二人を静かに見やる。俺が何を言おうとしてるのか理解しているようで首を曲げ、頭の天辺を此方に向けていた。右手に力を入れ、京谷の敵をとる。

「室内で危険なことすんなやあ!!」

「すいませんでしたー!!」

このあと、口ケット鉛筆の先を回収して演技に協力してくれた京谷も無事救出しました。

詳しく説明すると本日二度目の保健室に行きました。

# 11 我が身に降りかかる最悪

さつきの不幸な事故は京谷ロケット鉛筆事件という名が付き、無事解決する。

京谷は保健室に送り、不在となつたのだがそれと同時に咲さんと佳奈やんも帰宅。榊はバイトとなりこの場には俺の他には伊御くん、マヨイ、姫ちゃん、ミニワンのみが残された。

「…ロケット鉛筆はあんな使い方するなよ。危ないし、先が無くなると使えんぞ？」

「あ、そうじゃあ!?」

「はい、これ。マヨイさんもう危ない使い方しちゃダメですよ?」

「姫つち…了解じや!!」

「俺が避けた後、京谷に当たつたから窓から落ちなかつたんだろうな…あとで改めてちゃんと謝りなよ?」

「勿論じや!!伊御さんも粗つてすまなかつたんじや」

「うん、仲良きことは美しきかな…なんてな」

以上、京谷の尊い犠牲のもとに得た一連の流れでした!!

そのあとは各自だらけるように且つ時間を無駄にするようにな…え？それおんなじ意味だつて？…指摘ありがとう。

たまには素直に謝つておこうと思つたんだけどないな。一周回つてキモい。鳥肌が立ちすぎて鳥になるどこだつたぞ？もしそんなことになつたら三重県にでも送つてくれ♪ぶつちぎつて優勝してやんよ！

ところでシャドウボクシングつてカツコいいよね。

：見苦しいところを見せたね。気を鳥直s：取り直して一度頭に乗せてたハク机の上に乗せて落ち着いて撫で回すと目を細めて機嫌良く尻尾をブンブンさせる。全くもつて気分屋だと思う。

気に入らないと噛みついて、嬉しいとこうして擦り寄る。…ドッグデイズの姫様とかみたいな奴なら大歓迎なんだけどな…。あ、勿論性格面の話だからな？順従っていうか…表裏がないというか…ラバーズというか…。えつ？違うの混じってるん？え、ああそう。

ガブつ

「いつ!!?」

「へ？」

「夢斗どうした？」

「あ、あははは…何でもないよ？心配してくれてありがとうね伊御くん」

本気と書いてまじと読む…レベルで心配してくれる伊御くんに何でもないとジエスチャーで無事を伝えると噛まれた手をブンブンとする。コイツ、噛みつきやがった!?しかも今まで一番強い噛みつきだし!!

まじコイツはアニメ初期エクレール並のツンケン具合だよ。反抗期ですかあ？このヤロー。

温厚な銀さんでも怒っちゃうよ？それはもうカンカンになるからな？どれくらいカンカンかと言われたら…もう、カンカンだよ。

指からその立てた歯を離さず上げた手にぶらーん、とブラ下がるハクをそのままにして立ち上がる。

「いやいや…心結さん？」

「それ指大丈夫なのか？」

「痛そうね…」

「ふええーーー！それどうなつてるんですか！」

「いや、痛いのは一瞬だけだよ。慣れれば問題ない（キリツ）

「痛いのは一瞬だけって台詞をまさかお日様が上に出てる学校で聞くことになるとは思わなかつたねん…」

「格好つけてもその腕だとつくものもつかないわよ」

「今的心結に違和感がないんだよな…。なれつてこわいな…」

「グスン…」

「格好よかつたですよ!?だから泣かないで下さいね」

「姫ちゃんは天使だあ！」

「ひにやつ!?

「コツペ!?

ありのままに起こつた事を話すぞ?

俺は地面に熱いベーゼを交わしている…。

何やつてんのとか言わないで!!順を追つて説明するから。

これは俺が……え? フオレスト・ガンブ真似ようとしたのにネタが分かりにくいたつて? 見れば分かる。アイツは英雄だ。

あー、尺が!! もう手短にイクぜ!

俺傷心。

癒しは姫ちゃん。

俺頭を撫でられる。

発言。後、ポイ。

うん。捨てられた。掌底つてこんなに痛いってはじめて知ったよ  
…。ついでに心も痛い。

死のう…もう、世界に救いはある。

「あるんじやあ!!?」

「いきなり叫んでどうした、マヨイ?」

「マヨイのいつもの病気ね。」

「そんな優しい目で見ないでえ」

「ツツコミ戦隊、アルンジヤア!」

「絶対心結さん分かつててやつてるでしょ!! 助け船の一つもないのん

!?

「面倒なんで、イヤナンジヤア!」

「バツサリ！」

「基本サディスト、心結ナシジヤア！」

「しつてるう！現在進行形で被害にあつてるから！」

自分、無器用ですか？

原型かない!

「それか  
和でさがれ！」

「庶民の心は、常にこの辺に浮いてゐると言ふ」

「スライムだな…」

「確かに青いアニアの先が尖ってるのですよね?」

「機械とかあんまり使わなきそ.udたもんね。  
姐はあんまりケーブルやう

「ア」

「なんで伊御さんのやらないかって部分だけ聞き取ってるん!?」

失礼な！ 基本友達のいつた言葉は殆ど聞いてるから！ いつでもボケる準備は怠らないのさ♪

やるぞ？やつちやうぜえ？

「ほい！壁ドーン」

「壁に投げられた!? 女の子になにやつてるの!?」

なあ…マ王様

新編 本居宣長全集

「アーティストの心」――アーティストの内面世界

八  
九  
十  
一

「では、ご一緒に

「よゐこの皆は真似しないでください。プロの指導のもと実践しております。大変危険なので真似せぬよう、心がけましょう!」

「…つてなにわせるんじや!?」

「とつたぞおおーー!!」

「それを言うならとつたどおおーじや!!」

「安西先生：無人島に、行きたいです。」

「知らないんじやああーー!!行けばいいんじやよ、もう!!」

「…マヨイ、そんなに…すまない」

「ま…まあ、謝つてくれたのならそれでいいんじや。」

「一ヶ月一万円の方、なのか？ずいぶんとまた、マニアックだね。」

「んなのどうでもいいんじやよ！揚げ足とつてばっかり！」

「揚げたタコの足つてなんであんなにオツマミにピッタリなんだろうね。」

「し、る、かああーーーー！」

「おい、未成年！」

「いや、伊御くん。それは流石に冗談だつてヴァー！大丈夫大丈夫、甘酒のオツマミにしてるだけだから♪」

「持つてさせないセーラー服」

「甘酒に蛸足つて美味しくなさそくな組み合わせね…」

「胸焼けしそうです…」

「大丈夫！世の中にはゲソにピーナツツバターを付けて食べた猛者すらいるのだから！」

「ソーマ?！」

ネタは尽きないがマヨイもそろそろ息切れを起こして止めるか。

ここに京谷と榎がいればもう少しやつても良かつたんだけどね！チつ

「息も絶え絶えになつたところで」

「計画的犯行じや!?」

「あーうんうん。計画通り。」

「雑つ!!」

「一先ず飲み物でも買つてくるけど皆は何飲みたい？謝罪の意味も含めて奢るよ？」

「じゃ、じゃあ貰おうかな…」

「チヨロいな。」

「餌付け!!」

なんでだろうな…。良いことすると逆に悪ふざけしたくなるんだけど…照れ隠しとしてだつたら申し分ないんだろうけど、この気持ちはうなんだろう♪  
あ、またふざけてた…。

「冗談だ。んじやま、伊御くんから順番にどうぞ！」

「うん？ なら俺はボカリで」

「姫ちゃんどうぞ」

「お茶？」

「…牛乳」

「……」

「……」

「私も胸の為に牛乳にするんじやよ！」

「……」

「なんで一直線で胸になるんですか！」

「マヨイ…言い残したい事は、ある？」

「…ノーコメント。」

マヨイが落とした爆弾は結果、自分の足元に落ちて爆発しましたとさふん、俺？俺は伊御くんに救いを求めるという意味で無言で見てたらノーコメ言われた。

選べ：

1. マヨイに悪ノリする。
2. 突然走り出す。
3. 権藤大子さん召喚。

…え”？なあにこれえ？

選べ。

え、ちよ、ま・

ぎにやああーーーっ!!痛い痛い痛い！頭痛がする!?なんだこれは  
!!

じやあ、一番は論外だから!!死ぬ。最悪死んじやう!!三番の大子さ  
んつて誰!?もう、二番でいい！二番でお願いします！

本当に？

なんで急にフランクになつた? yesだ、んなもん。

ファイナルアンサー?

なんでそんなに変えたがるんだよ！ファイナルアンサーだよ。

つち。

舌打ちされた!?

大子さん召喚したかつたな・

ただの願望になつてんじやん。だからだれだ!!  
召喚とか世界観無視か！

今からお前の春を殺すからだ

今冬と秋の中間だから。なに?ヤンキーのモトハルに言つたよう

にお前の頭が春か？とてでも聞けばいいのかよ！

ちえーしつつかたねえーな。じゃあ、ひとつ走りして行つてこい！

その声を聞いたのが最後に俺は体が勝手に走り出したことで、自販機まで全力失踪：おつと失礼。疾走することになつたとさ。  
ちゃんちゃん。

「ざつつ！」

そんな声が遙か彼方から聞こえたような気もしなくなくもない。

## 12 見守つてるよ。

：で、戻つてきてみればこれだ。

さつきのアホを見て呆れてる伊御くんも居れば、何があつたのかいまだに理解できなくて処理落ちして固まっちゃつてゐるのもいる姫ちゃんがいるし、笑つてるマヨイと逆に無表情のミニワンもいると：いやね、もう心が折れそうッスよ。

もうやけくそ精神で他人言みたいになつてたときに妙に冷静になつちやつて冷静になつたときには自販機にや牛乳は無いつて気付かされて、だから下手したらコンビニまで走らせられるとか気にしてたけど心配無用だつたらしく自販機に着いたら体のコントロールもちろんと戻つてたよ。いやあ…焦つた焦つた！

コンビニともなると家の近くまで戻るつて事だから帰宅してんじゃん？更には死ぬつつーの。高校生の体力なんて所詮紙レベルのペライ奴なんだから、帰宅部を走らせないでほしいぜ。

で、牛乳は無いから適当にC2レモンとプペシコーラにしておいた…。あ、いや…問題は無かつたように見えるけど考えてみてくれ。

人間一人にたいして持つペットボトルは五本腕は二本…どう持てば良いんだろうね？横にして持つと崩れて落ちちゃう。で縦で持とうとする足りない。貴方ならどうするう？

うむ。八方塞がりつてこういう事だね！

「何か使えそうな物はつと…」

「ワン！」

いや、目の前から走つてくる一匹をして思つた感想がこれつていうのも如何なものかと思つたけど言わせてもらおう。

もうハクさん貴方、犬ツスか？

鳴き声がモロ犬だよ？仮にも貴方はコークサスハクギンオオカミの子供だよね？何？オオカミとしてのプライドは何処かにポイしたとか？プライドなんて犬にでも喰わせとけ？バカなんじやないかな

?

俺の思考はガン無視で足下にすりよつてくる姿を見て、俺自身が馬鹿馬鹿しくなつたがまあいい。

キュピーン!!

この時心結の頭の中である計算が高速で駆け抜ける。それは一重に神からのお小言のような：一種の天恵だつた。

両手で4つまでなら持てる。ならば、もう一本はどうするのか：そ。彼はこう考えたのだ：

今日の前にいるハクにくわえさせて持たせればいい！と…（あえてセルフツツコミを入れておくぞ？自演乙）

「こおれだああーー!!」

「ビクツ!?」

「いいか、よく聞けよ？これをくわえるんだ。それで持つてきてほしい。報酬はその水を分けてやる。どうだ？」

「??」

デスヨネエー！

人の話す言葉を理解するのなんてできっこないかあ…。面倒だけど二回戦でもしますかね…：

人は必ずしも成功させる生き物じやない。そう、完璧な人間が存在しないように不可能はあるという事だね！うん。俺はバカか？諦めが肝心？

はつ君はあの御方の言葉を知らないのか!!

そう、あの方だ。

諦める？

バカいってんじやないよ!!お前、言つただろ。富士山みたいに日本一になるつて言つただろ！昔を思い出せよ！

今日からお前も、富士山だつ!!

そう、松岡さんだ！真夏のような真っ赤な戦士SYUZOOUだよ。

Never Give Upの精神だ。人間やれば出来る。諦めなければいつか夢も叶うんだよ！さあ、立ち上がり！髪の毛達よ！

「ハアアア――――――！ フンツ！」

シユインシユイン、ボン。

……。

で、できたああ―――！俺、今スーパー野菜人だ！立つた…立つた  
よ、修造先生…。俺、やりました！

クララもビックリするぐらいに立ち上がりました！俺の髪の毛！  
スカ○プDでも出来なかつたこと成し遂げました！怒りとかじやな  
くて、修造先生のお言葉でやつてやりました！貴方は偉大だ！今日か  
ら貴方は、神様だつ！

「グルルルr」

「アツハイ。行きます。サーセン。」

ハクは俺が遊んでる間にペットボトルを倒してたらしく、それをく  
わえながら俺を置いていつて先に行つちやつてた。  
：何か大切な事が抜け落ちたような気もするけど、まあいいか。

「HEY、pass！」

「グハツ!?」

「マヨイ!?」

「マヨイさん!？」

ペシッ、パン。ドオオオーン（ぶつかつた後ペシが爆発し、そ

の勢いで壁に激突した音）  
「壁ドンその二ね。」

「落ち着きすぎですよ、つみきさん!?」

「いつたい誰がやつた、んじやあ……ガクツ」

「私だ。」

「お前だつたのか。」

「暇をもて余した」

「神々の」

「遊び（ドヤツ）」

戦闘力が上がつてゐのを忘れて放置してために何時もの感覚で投げた為少し強すぎてマヨイに突き刺さつたペペシ（爆発済み）の残骸とマヨイだつたものを見詰めたあと、死んだと思つたら復活して聞かれた為に悪びれもせず返してみた。

そしたら、あーら不思議。世界が勝手にギャグ補正をかけてくれます。

リスボーンしたマヨイと共にオチまでやりきつた俺は気合いでスープーモードを解除してみた。うん。出来た。

気合いってスゲエ。

つか、野菜人になれたことが驚きだわ。俺：人外やつたんやんね  
ww

これからは宇宙人名乗つた方がいいかな？

「マヨイさん凄いです。」

「あのペットボトルの爆発、意外と大きかつたな。」

「人間止めてたわね。」

「あれえ？」

「お、お帰りなさい。心結」

「ああーうん。はい、ポカリ。」

「サンキュー」

普通に受けとる伊御くん。君、スルースキル凄くない？  
あと、なんでミニワーンはやつとその領域まで辿り着いたか、みたい

な顔で頷いてる？

姫ちゃんは……常識人だね。

マヨイは興味津々で“どうやたのん”とか聞きにきてんだよ…。  
野菜人より、マヨネーズなのに。サラダでも作る気か？

チャララツチャツチャ～♪チャララツチャツチャ～♪  
三分クッキングの時間でござります。  
全部氣合いでどうにかなります。

(ry)

事前に用意しておいた物で～はい完成です。これがマヨイネーズ  
の野菜人（サラダ）です。

では、番組は此処まで。次回もまた見てくださいね～♪ジャンケン  
ポン。ウフフフ～♪  
チャツチャラララララ～♪

つは!? 今何か電波受信した！

しかも放送権が奪われた！貝類が名前の母君も出てきだし…。  
つて、そうじやなかつた。これ渡さなきや。

「はい。姫ちゃんは紅茶華伝のミルクティーね。」

「ありがとうございます。」

「勿論自販には牛乳は置いてないから適当にこれで…OK?」

「何でも良いわよ。ありがとうございます」

「マヨイはもう渡したよね～」

「たつた今さつき爆散したんじやよ!？」

「爆散っていうか、爆慘？」

「べつに上手くない!!」

「じゃあ、はい。」パンつ

「こいつ、鍊成しやがった!!」

「どうも、ペペシの鍊金術師です。」

「これは、鋼じやないのがミソですぜい。かにミソは脳ミソではないんだぜい。ワイルドだろおう?」

そして私は男子高校生です。

「はい、マヨイさま。こちら暖めておきました。」

「うむ、くるしゅうない…って、炭酸を温めないで欲しいんじやよ!!」

「冗談です。お嬢様はバカで御座いますか?」

「謎解きはランチの後で!」

「今は放課後だけだな。」

「…じゃあ謎解きは after school の後で?」

「語呂悪いし、" after "と" 後で "で意味が被つてるぞ?」

「…難しいんじや。つて、普通に渡してくれればいいなじやよ!」

「(誤魔化した)」

「(誤魔化したな)」

「(誤魔化ました)」

「(誤魔化したわね)」

「分かつたよ。ちゃんと渡せばいいんだろ。じゃあ…  
はい、ケバブ。」

「ありがとう…渡し方は正しいのに渡した物がおかしいことにツッコ  
メばいいんじやよね? なんでホントにケバブが出てくるんじやよお  
…」

「ブラジルの人ー、聞こえますかー?」

「いや、聞いてる心結さんだから」

「今のはケバブのネタをやつてる人とかけてみました!」

「そんな清々しい顔されても困るんじやよ…」

「俺、手品が得意なんだよね。」

「いや、ペペシだそうよ」

「ペペシル、ブシャー!」

「ウギヤーーー…目に、目にいーー!?」

「メデイーーーック!!」

ここまでが一連の流れだつたとさ。

で、マヨイ弄りに精を出してたらミニワンが大変な事になつてたん  
よ…。

だつて、ミニワンが伊御くんに抱きついてるじや、アーリマセンカ。  
酔つてる?酔つてるよね?だつて、ボーッと違うとこ見てるもん。

「美味しそう」

「y o u パクパクねー」

「人肉実食!?

「そう言われると、○肉○食つて問題思い出しちゃいます!」

「もういいだろ。起こすぞ!」

「あ、伊御くんや。俺も手伝うよ。」

「ああ、サンキュー。」

「いい加減目を覚ませ」

パン!!

伊御くんがミニワンのほつペをムニイしちやつたタイミングでや  
らかしたっぽい。

俺もまさかそんな典型的な事するとは思つてなかつたから…

「伊御くん…すまん。」

「あー、仕方ない、かな?最初にそれに気付ければそうしてたと思うし

…

「…という訳でしてだからその辺で離してあげませんか?」

「マジ噛みですな…」

「……!?」

ガジガジから、ギリイつて音になつたもんね。噛み付きつていうよ  
り締め上げ、もしくは咬みきりに入つてたよね。

伊御くんもちよつと頭から血が出ちやつてるし…

「…これぐらいで、許してあげる。」

「…すまない」

つて、収まつた。

それから、あのパン！は猫だましの音だよ。

意外と効き目があつたからこつちも驚いたもんだ。流石は猫娘といつたところか…。

でも、酔つて乙女の純情を傷付けずに済んでよかつた。そういう行為はやつぱりちゃんと意識がある時にやつてほしいからな…。

それが御庭の為と伊御くんの為になる筈だよ。お兄さんは君達の恋愛模様は応援してますから。

## 番外編 前の学校、昔の友達。

ふつふつふ…聞いて驚け、見て笑え！我ら閻魔大王さまの一の子 b  
…じやなかつた。宇図 心結です。

なんとなく、やらなきやいけないような気がしたから少しだけ聞いてほしい。

俺の前の学校の事を。そしてその時の友達の事を。  
ほんの少しの昔話を…

それは…始まりのある日の事だつた。

入学式。それは始まりの季節。

だが、俺にとつては終わりの日でもあつた。幼馴染みの子が亡くなつた。そして昔仲良くなつてずっと会つていなかつた友達もその日に亡くなつたらしい…。

というのも、その日俺は呑気に入学式を受けていたから。幼馴染みの名前は上野ちひろ。友達の名前は渋谷いづみ。

俺達三人は知り合つきつかけはバラバラで上野ちひろ、俺はちーちゃんなど呼んでいたんだが彼女とはずつと家が近所の癖に遊ぶ機会が一向に来なくて…でも互いに知つてるという変な関係だつた。

この時の俺はまだ思春期+反抗期という面倒な時期だつたんだ。引っ込み思案と言えばいいのか…そんな感じで…。

だけどある日のこと。学校で困つてた所を手伝つて貰つた。出会いとしてはありふれた物で面白みも欠片もない。だけど、俺はそれからなんとなく一緒にいることが居心地がいいものとなつていたんだ。彼女もそう思つていてぐらたら嬉しい。でも、それも確認する術はもうないので。

そしてもう一人の少女、渋谷いづみ 別名アホの子。

彼女は普通というものにコンプレックスを感じて、それでいて生真面目で人を信じてる弄り甲斐のある面白い子だ。

出会いは母方の実家の田舎に帰った時に公園で会ったんだ。

誰か仲のいい知り合いもないし、暇で暇でしかたなく公園で一人ブランコに乗って一周して見せる！とバカな事をしている時のことである

小さい子っていうのは猪突猛進で目の前しか見てない故に隣に居たのに気付いてなかつたんだ。

いつの間にか隣で寂しくブランコ少女なイズミンはなんか黄昏てた。それで俺はそんなの気にせず一人盛り上がり上げて空中ブランコをした。

勿論それを見てたイズミンは口をあんぐりつて開けて目をこれでもかつて位にかつびらいて目が合つたんだ。それで初めて隣に居たのに気付いて話すようになつて、友達になつたつてわけ。

だよ。

黄昏てた理由も何てことない。普通が嫌で特別が良かつた：何て言うもんだ。

この時にはちーちゃんとも仲良くなつてたから普通が一番つて知つてたからそれも個性だつて言つたら怒つちやつて：必死にそれで謝つたんだつけ。

でも許してくれなくて、どうしたらいいのかつて思つたら思い付いたのがアレだつたつてわけ。

じやあ、人の心を征服したらしい。そう言つたんだ…まるで雷が落ちたような驚きをしてたよ。

征服して皆を引っ張つていけるリーダーになれつて、そうしたら馬鹿にする人もいない。子分も報われる。いいこと尽くしじゃんつてね。

そしたらそれから面白いぐらい人が変わった。

俺も子分にしてやるつていつてきた。じゃあ、俺がいづみちゃんの子分第一号だねつて約束して最後の日に別れ…あの言葉を婆ちゃんから聞いた。

### 話を戻して、入学式の日

普通に学校に行つて入学式の時に異変に気づいた。

先生方が一人の生徒が居ない。そして連絡もとれないと騒いでいた。それで何か怖い予感がして本来そこにいる筈の人物を探すと…居なかつた。

ちーちゃんが…。

俺もそれで電話をかけようとすると出ない。お母さんの方にも電話をかけると焦つた様子で心結くん今日あの子を見てない!?と聞かれて悟つた。

ちーちゃんに何かあつた…。

それから一瞬の合間に電話が来た。婆ちゃんから…。

それどころじやなかつたけど出なかつたら後悔するような気がして出た…。

「もしもし、婆ちゃんよ。落ち着いて聞いてね…。心結と仲の良かつたあの…渋谷さん家の、いづみちゃん。さつき観光バスに轢かれて…亡くなつたの…。」

それ以上はもう覚えてない。頭の中が真っ白になつて…でも、ちーちゃんのこともあつたから先生に一言言つて式の途中で早退させてもらつた。

帰り道はどうやつて帰つたのかも覚えてない。その時は只ちーちゃんの後ろ姿を探していた。いづみちゃん…それにちーちゃん…。何で? つて。

家に入つた俺は微かな希望で偶々ちーちゃんが遅刻しただけ。ど

うせ、何時もの奴だ。困つてゐる人の手助けをしてて遅れただけ…。そ  
う無理に思い込もうとしてたんだ。

心が引き裂かれるような…そんな感覚がずっと残つてゐる。  
分かつてゐる。でも知りたくない。何があつたのか予想がつく。で  
も、直視何てしたくない…。

渦巻く思いと考へで自分が黒く染まつていくのに気付いた。

「あ…心結、お帰りなさい。」

「うん、ただいま。」

たつたこれだけの会話なのに何を言おうとしてるのかに気付いて  
しまつてゐた。あの変人な母がマトモな事を言つてゐる…それは天  
変地異の前触れと本能が知つてゐるのだから…

「あはは…やつぱり、そなんだ。ちーちゃんだよね…トラックで  
も轢かれちゃつとか?」

「つ!?

「あーあ。予想してたけど、キツイ、なあ…。いつぺんにこうも大切な  
ものが無くなつてつたら何を支えにしたらいいのかわからんねえや…」  
「…ごめんなさい。」

このごめんなさいは何に対しての謝罪なんだろうか：俺はマトモ  
に考へることすらできないぐらいに神経が麻痺して いたんだと今は  
思う。

支えになれなくて、無力で、たぶんそなだらう…。

でも正直謝つて欲しくなかつた。俺はこれ以上惨めになりたくない  
い。俺は…

で、大切なものを失つて、道筋すら見失つて無意味に足搔いて過ご  
しながら一学期はいつの間にか終わつてゐた。

夏休みもこうして無価値に過ぎていつてしまふと分かつていても動く気には成らなかつた。

だが、終業式を終えて帰ろうとした時の事…

「そこのアンタ……死つと序四！可勞手こ帰らうと てんのよ！」

「...」

「うえ!? 嘸つた!!」

「用がないなら帰らせて貰うぞ」

「アーリー、月を眺めるね」

「あーうん。こへかう西ナリヤ

サヨナラ

〔  
⋮  
〕

ああ怒らしゃる……でどうよ！何無意味で無価値に帰ろう

「それが俺の個性なんで…。  
では

そういうつてまた、腕を掴んで引っ張つてくる銀髪の黒いカチュー  
シャが特徴の面倒そうな女性。だが、俺には関わらないでほしい。

「貴方が妖怪なのは丸つとお見通しなんだから！」  
「電波は帰つてください。てか、俺が帰ります。」

卷之三

「うるさい高飛車。放つておいてくれ」

「勝手にしろ。俺は帰る！」

強情ね。なら私も考えがあるわ！」

そういうつて今度は俺の腕を掴んで胸に持つていく。コイツハはバ

力なんだろうか？

そんなに帰らせたくないのは理解した。だが、こいつは貞操観念つてもんが欠落でもしてるんだろうか…。

「あー、はいはい。分かりましたよ。だから手を離せ！んで、状況も話せ！」

「ふふ、貴方別に上手くないわよ♪」

「……。」

「はい。冗談です、なので殺意をこっちに向けないでください。」

「…ふう。それで話よね。貴方、勿体ないとは思わないの？」

「…どうでもいい」

「あなたは折角この学校に来てるのに初日以外全然楽しそうじやない…。」

「…あの日が最後だつたからだ。」

別に話す気はなかつた。だが、付き合わされるのも御免だ。だから適当にあしらつて帰ろう。明日からは夏休みだ。

凌ぎさえすればもう辛い記憶を思い出すこの場所に居なくとも良いんだから…。

「お前はお節介のつもりかもしない。俺を救う？冗談キツイ。俺は生きる意味も見いだせなくなつちまつたんだ…そつとしておいてくれ…。」

「嫌。」

「…何？」

普通ならこれだけ言えば苛立つて関わらないだろうと思つていた。

だが、彼女が返したんはその逆だつた。

何故？放つてくれればいいのに…

「貴方は諦めてない。」

「知つたようなこと言わないでくれ」

「いいえ。言うわ。

貴方の心は真っ直ぐなもの！傷付けるのが怖い…そうやつて逃げてるだけよ！」

「かもな。俺もそれは分かってる。」

「でしようね。全部分かつて尚そやつて停滞してる。」

「何が悪い。停滞がいけないか？大切なものを守ろうとすることがいけないのか？」

死んだ人間は帰つてこない。その記憶を薄れないようにして何が悪いんだ！」

「…それが本音ね。」

このあとは記憶がない。ただ、思い出そうとすると震えが止まらないんだ…。真っ赤に染まる視界とか振り上げられた拳とか…罵詈雑言とか…あれ、涙が出てるよ…アハハーヘンダネ。

で、こうして彼女 水無氷柱の会話（物理）により強制的に今の人格が形成されましたとさ…。

この弄り過ぎる体質は氷柱による暴力の賜物で、傍若無人つぶりはアホの子 いuzzみんの真似で、真っ直ぐなどこがあるのはちーちゃんのおかげだと思う。

いまの俺はある三人のお陰だと思う。

俺はあの三人の子分で、友人で、ストレス発散の相手だつたと思う。氷柱もわざとあんな事をして元気付けてくれたんだと今なら理解できる。それ故に、転校の際は確りと彼女には別れを言いたかった…。

p i p i p i p i

携帯がなる。知らない番号…通話ボタンを押すと聞き覚えのある彼女の声が聞こえてきた。

「…転校の件、すまなかつた。それと、あの時俺を殴つてくれてまで進

ませてくれてありがとう。」

「ふん。ストレス発散の相手だから気にしなくて良いわ。で、今はど

うなの?」

「…最高の友達達だよ。氷柱も、そしてあの二人も…ね。」

「泣かないの。つたく、貴方がまた私の前に来るときは連絡位寄越し  
なさいよ。勝手に居なくなられたら心配するじゃない…」

「…ありがとう」

「ふ、ふん。じゃあね」

プツン：

切れた通話は不機嫌そうだつたけど、俺は彼女が嬉しかつたのを  
知つて いる。

最高の友達だよ、氷柱は。

…何処かのとある学校で…

「あれ? カウンントが増えてるよ! ?」

「…私も」

二人の携帯にはこう文字が並んでいた。

上野ちひろの普通カウンント2

(+1 宇図心結)

変友カウント変化無し

渋谷いづみの手下カウンント2

(+1 宇図心結)

変友カウント変化無し

「⋮元気かな？」

「あんなお別れ嫌だつたけど、こうして思い返せば嬉しいものですね  
⋮。」

何処かで友人達が今も笑つてるような気がした。

### 13 センチメンタルハート

こんなアホな時間も電話一本で終わりを迎えた。

p i p i p i p i  
p i p i p i p i

「ん？」

「おっ!?」

「ダブつて聞こえるねん…」

「伊御くん、電話ですか？」

「いや、メールだな。…あー、急用が出来たから俺 先に帰るわ」

「残念です」

「知らない番号だ…。はい、もしもし。」

「心結さんは電話だつたみたいじゃね」

伊御くんはメールだつたみたいで少し残念そうにしながら手で帰るアピールをしていた。声を小さくしてそう伝えたのはたぶん俺が電話なのを気遣つてだと思う。出来た子だ…一家に一台欲しいね♪

「ポカリ残つた分つみきにやるから酔いでも醒ませ」

「ヒニヤツ!?」

「伊御さんは…」

伊御くんは恋愛よろしく、冷たい缶をミニワンのほっぺにピトつさせてた。初々しいですね〜

ミニワンの反応もまたよろしい。良いものを見させて頂きました！ええ、思わず会話も短く終わらせて通話を切つて、激写しちゃう程度には青春してるとと思うぞ♪

「…はやつ」

「ああ、うん。青春してるなあつて思つたらつい。  
「どうか、心結さんも電話切つて良かつたの？」

「かけ直すから問題ない。ただお小言ぐらい我慢すれば良いだろうからな。」

「で、誰からなのん?」

ニヤけながら聞いてくるマヨイだつたんだけど、走馬灯つて言つたらおかしいけどそれぐらいに感じる程度には色々と思ひ出していた。だから今の俺の心情的に悪ふざけはしたくなかったんだ。マヨイが弄ろうとしてるのも分かつたけど、敢えてノる事はしなかつた。

「前の学校の友達だよ。何にも言えずに転校になつてたから行方不明一步手前で心配になつて懃々かけてきたんだとさ」

「いい友達じゃねえ！」

「俺には勿体無い位の奴だよ。」

「心結さん…」

「……。」

たぶん俺の様子から汲み取つてくれたのかそれ以上は聞いてこなかつた。姫ちゃんは勿論、あのマヨイも…だ。

たしかに、色々と事情があつて説明しづらかつたから良かつたことは違いない。…だが、同情されるより笑い話にしてくれた方が俺的には嬉しいんだよね。だって、もう終わつたことだし、クラスメイトについてはいつかまた会うことも出来るわけだしなあ。

気を取り直す意を込めて、何時ものバカをやつてるときの雰囲気に戻す。そして、不遜にものを言う。

「伊御くんも帰つちゃつたしこれからどうしようか」

「私は帰るわ」

「そうじやねえ…確かにキリもいいしこれで解散っていうのもアリじゃね。」

「なら、そうしましようか」

みにわんの返答に便乗する形で皆で帰る支度を始める。

俺も今日はこれといつてこのあと用事があるわけでも無いので暇だ。だから帰つてもやることはない。どうせだから駅の方にでも足を運んでみるかね」

「じゃ、暇だし俺は皆の事を送ることにしようかな?」

「そんな事言つて送り狼になるつもりじゃね?くふふふふふ

「あ、そういうのは大丈夫です」

「あつさりかわされた!?しかも棒読み!!」

頭に何か湧いて出たかのような事を言い出したマヨイのネタをポツキリと折つてやつた俺は愛想笑いを浮かべる姫ちゃんの横に並び、一緒に歩きだした。

：切り替えたつもりだつたけど思つているよりも自分は弱い人間なのかもしけんな。気分が上がらなかつたんだ…。

それでも、見栄つてもんがあるから誤魔化すんだけどね。

「んじゃ、レディのエスコートお願ひできるかしらあん?」

「それがマヨイのレディ（笑）のイメージか」

「かつこ笑いかつこ閉じつて、日常会話で使う物じゃないんじやよ!」

「マヨイ（笑）

「物凄いバカにされたつ!?」

「心結さんもあんまりマヨイさんを苛めちゃダメですよ?」

「……え?」

「その「え」は何に対してのえ何ですかマヨイさん?」

驚いた：芸人に対するイギリス姫ちゃんの目には苛めてるようにな見えたらしい！マヨイも驚いて隠れて見えない目を丸くしてる（ように見える）じゃないか!!

素直過ぎる子つてたまに凄いよね！

気を取り直した様子でオホンとかわざとらしい咳を一つすると、切

り替えたのかニヤリとほくそ笑んで悪い顔をしているマヨイ。

「伊御さんは私達女の友情より男を取るのね、酷いわっ！」

体をくねらせイヤンイヤンとするマヨイは芝居染みた口調でそんなことを言い出していた。俺は勿論のことミニワンも呆れながらその様子を見ている。リアクションの大きい姫ちゃんだけはその場で転けていたんだけどね

「その言葉の使い所違うだろ!?」

「いやいや、ここで俺にふるなよ。何? マヨイさん 僕にこの場でウホツとも言えと?」

バカ言つちやけねえ。その青いツナギの人は男にとつちやあ恐怖の対象なんだぜい

「…ツハ!! 青鬼じや

「安部鬼とかけたのか?」

こんなバカなやり取りだけど伊御くんは優しく見守るような瞳で無視せずにいてくれている。うむ! イイコや!!

で、区切りが良いところまで来ると伊御くんが支度が終わつたみたいだつたから帰るようだ。最後まで付き合つてくれてありがとう!

今度またジュースをおごつてあげよう。そう静かに決めた俺は教室から出ていく伊御くんを見送りながら手を振つていた。

そして放心するかのようにボーッとしていたが考えの海から意識を浮上させれば先程から一言も喋らない事に不思議に思つてた俺はミニワンの方を向くと…放たれた鉛筆達がカーブしてマヨイの頭に吸い込まれていくのを見てしまつた。

ツカカカカカ

小気味の良いそんな音をBGMにしながら綺麗に刺さる鉛筆たち取り敢えず拍手を贈つた。

いや、確かに止めてやれよとか思うんだけどミニワンの怒り具合からしてマヨイが余計なことして怒らせたつて分かるから、まあいいかつてね♪

「ダメじやろ?!てか止めて!死んじやう!死んじやうから!」

「あ…よいこは真似しないでね♪」

「そもそもあんな真似無理ですよ!よいこはそもそも鉛筆投げないですからね!」

「そりやそうだ。姫ちゃんは鉛筆で曲芸出来る?」

「つみきさんのアレって曲芸なんでしょうか…」

「吸い込まれるようにマヨイに刺さるんだし見てる側からすれば楽しませて貰ってるしそうなんじやないかね」

適當な物言いだつたけど少し考えるそぶりを見せたあと、姫ちゃんも納得していた。

そしてミニワンがツンデレつてそういう事だつたんですねとよくわからぬ結論を出してもいた。

：それでツンデレ認定つていうのもまたへんな話だが、恋する女の子はたいてい素直になれないものがあるのでツンデレと言つてもいいんじゃないかな?

つて、俺も人のこと言えないな…。前後の会話が全く関係してないし…。

ま、結論はミニワンはツンデレ。以上!!

で、帰り道のことである。俺は駅までお伴をする際ひつそりと心のなかで忠犬ハチの気持ちになりながら話に華を咲かす。あ、別に誰かのペットになることを甘んじるほど俺は落ちぶれてないのは分かつてるよな?

もし分かつてないなら…少し路地裏まで来てもらおうかな♪

大丈夫：読者様が分かってくれるまで頭、冷やしてくれるまでおはなしするだけだから。

：ん？お話がO・H A・N A・S Iに聞こえた？うん。ダイジョウブダヨ、合つてるからフフフ

「実は忠犬ハチ公のお話つて物語性を出すために毎日ご主人の帰りを待つ姿で描かれてるけどあれって嘘なの知つてた？」

「えつ！」

「知りたくないかった真実つてやつじやね。でも、確かに駅で待つてたから銅像にまでなつたんじやないのん？」

「確か鉄橋の下にあつた焼き鳥屋の残り物を貰うために通つてたんじやなかつたかしら」

「正解だよん。みにわんは博識だねえ」

そうなのだ。よくある美談に改変するつて奴だな。ちなみに詳しい話をするなら解剖結果で胃から焼き鳥の串が出てきたつてことで判明したんだよ。

ま、それでも広まるつてことはある面ではあの話も真実であつたが故に起こつた事だ。だからあの話は半分本当でもあるんだからな？皆、がつかりするなよ？

俺としては水戸黄門の話の誇張具合の方が驚きだつたけどな！

「たしかに下らない見栄であそこまで話を大きくしちやつてたら呆れもするわね…。」

「…今さらつと心読まなかつたか？」

「どれだけガツカリしてたのか分かるぐらいに氣落ちしてたし、声に出てたんじやよ？」

「そんな…バナナ！」

あ、バックからお昼の残りのバナナを出してかじつておくのも忘れてないからな？くつふつふー、…あ、別に主人公に弾丸ぶちこんで死

ぬ気でやれとか抜かすスバルタ家庭教師が出てくる作品の幻術使いの真似じやないからな！」

頭をパイナップルにするとか…ウケる！

「なんでバナナ食べてるのかは聞かないでおくんじやよ…」

「チョコをかければチョコバナナになるね！」

「溶けた状態で常備するような人居ないと思うんじやけど…」

「ところがドッコイシヨ!!俺のバックは四次元を通り越して五次元のポケットを持つてるためこうしてひょいと出てくるのさあ♪』

「青い猫さんの秘密道具ですか!?』

「姫ちゃんの意見だけど残念ながら出てくるのは実現された秘密道具1号ことテレビ電話♪♪しか無いのことよ』

え、信代さんボイスは封印したはずじやないのかつて?

甘いな！俺が出したのは水田わさびさんのほうさ!!変わつてからもう既に十年も経つてるんだ！認めてあげようぜ♪

たしかに信代さんの印象が強いのは認めるしそれが真実と思う。だけど、わさびさんの努力だつて報われても良いじやない！十年だぞ！？認めても良いじやない。

某暑苦しくて最強の応援団長こと修造さんも行つてたＺＯ!!中途半端な気持ちで出来るか こんなのがつて

だから俺はわさびさんが富士山にもなれるつて信じてるんだよ！俺だつてマイナス10℃(に感じるような冷たい世間で)のところ、シジミがトゥルルつて頑張ってるんだから！

「今日からお前も富士山だつ!!』

「…心結さん。私 頑張つてみるよ!!』

「…修造さんの真似ですか？」

「今の俺には勢いがある つて訳で明日からマヨイは富士山決定な？」

有無を言わせない。強引に押し込め！お前の終わりかたを無理やりなんと無くフイニツシユさせたのさ!!富士山だよ、富士山。マヨイの明日のあだ名は富士山だから鷹と茄子でもプレゼントしてみようかな。

富士、鷹、茄子…縁起が良いじゃん？マヨイが犠牲になるだろうけど皆のために幸せを配り歩いて貰おうよ！

ほら、大丈夫だつて！いつもの変な行動だつて思つてくれるよ♪

「失礼じやよね？流石にこれは怒つても良いような気がするんじやあ！」

「褒め言葉より苦言に感謝しなきや！これは俺からの愛の鞭だ！愛だよ、愛!!そこに愛があるから」その言葉なんだ：分かつてくれ マヨイ

「心結さん…私、勘違いしてたよ。思つての行動だつたんじやね!!」

いや、流石に無理あんだろ。ノリつて大切だと思うけど立ち止まることも必要だと、俺は思うわけで…チョロくて歯応えが無いのが残念だ。チョロいと言えば、パイセン結婚おめでとう御座いまーす！

「むううー。マヨイさんだけズルいです!!なら私にも苦言下さい！」

姫ちゃんの迷走っぷりが凄い件について…スレは立つてないけどね！

てか、バツクからチョコが出てきたことに付いてのツツコミが欲しかった…。あと、本当にバツクからテレビ電話も出したんだから何があつても良いんじやねえかな？

「私、此処だから。」

「ホンジヤマカ、バイビー♪」

「いやいやそれじや、つみきさんが芸人になつてるから…」「つみきさんまた明日♪」

「ん、また明日」

お、モツチロンふざけてるけど俺もマヨイも手を振つて見送つてるからな？線引きはしつかりしてるから問題は無いのだよ、ワトソン君！

そういえば、伊御くんの用事つて何だつたんだろうね？ここで適当なフラグでも立てておけば案外すんなり会えたりしてね、なんちやつて♪

「…伊御くんがもしバーテンダーの格好して御注文は何でしよう？とか言われたらどうする？」

「そうじやね～…ふむ。では、彼方の方にウォッカをストレートで倒れちゃいますよ！」

「確かにアルコール度数の高いお酒を薄めないで飲む人を生で一度見てみたい気はするな～♪じや、姫ちゃんは？」

「え、わ私ですか！…ううん…オススメのケーキ下さい！でしょうか？」

バーテンダーの意味がない姫ちゃんはらしいと言えばらしい回答が返ってきた…ん？でもなんか具体的じゃないかな？バーでケーキなんて出てくる訳じやないだろうし…もしかしてバイトでもしてるとかかな？

ま、明日聞いてみるんも手だねえ～♪

そして俺は頭で大人しくしてハクを一撫ですると鼻歌を歌いながらヨホホホホ♪と笑つてみるのだつた。

# 14 プロは何があつてもプロだからプロなんです

そして翌日

え、いきなり飛んだ？だつてあのあと何が有るわけでもなかつたんだもん。

いくら女の子二人と歩いてるつて言つたつてまだ出会つて3日仕方つてないのに進展もくそも無いだろうよ。

出会つて2日3日で何かしたらそれはヒロインがチョロインだつたつてだけだよ。よく考えてみ？恋に落ちるのなんて千差万別でも大抵は恋はタイミング。その子の問題で俺が介入する余地なんて無いんだよん♪

劇的ななにかがない限りそんな簡単には心の中は複雑怪奇な異次元空間になつてるのだから何もないのだ！

「皆あ～聞いたかい♪」

「おー、富士さんじやん。どした？」

「え？まだそれ続いてたの（ですか）!!!」

「富士山？俺が帰つたあと何かあつたのか？」

「富士山じやなくて富士なんじやねえ～：マヨイじやよ!?」

「ナイス、遅延ツツコミ！」

まるでカエル男商会の関ヶ原先生みたいだつたよ？」

「また、ミニアツクな…桶狭間じや!?」

なんで伊御くんの捕捉をしないかは、敢えてしないことでミニワンに二人で話すという建前を上げるためだ。別に面倒とかじゃない。うん、きつと…たぶん…メイビー…

おつと、マヨイを引き付けておかないとまた伊御くんとミニワンの邪魔するから弄り倒さなきや！

「だつて～可能性感じたんだ～♪つてな訳でこれで一つどうぞ!!」

渡したのはメモ用紙でそこにはカエルの絵を描いてある。

…ゲコ太ではないぞ？だからといつてケロロとかでもないぜい！

「心結くんから何を渡されたんですか？…って上手い！」

「そんなに上手いのか？…お、おお」

「どれどれ…確かに上手ね。でもなんで鳥獣戯画なのよ」

ミニワンって器用だよね♪なんで感心しながら呆れるつていう顔出来るんだろうね？表情筋どうなってるのそれ？

で、マヨイもカエルでネタが完成したらしいけど…まあ人に見せられたもんじやないからまたの機会にでも楽しみに…。

「…ハア、ツマンネ」

「酷いんじやよ!? ネタふつたのだつて心結さんじやよね!?なのにそんな仕打ちつて…仕打ちつて…ひd「ゾクゾクするのか？」い…。だからそのマゾつていう勘違いも忘れてほしいんじやあ!!」

どうやら伊御くんとみにわんの会話も終わつたようで、こちらの会話に参加してくる。…して、のつか？

「そんなことは兎も角、…で結局何が言いたかつたんだよ？」

「そんなつて…ううーん…ま、いいじやろ。で、聞いて驚け！」

「おおーーー？」

「次つてなんだつたつけ？」

「数学」

「お、美味い。次からこれを買うのもありだな！」

よくわかつてなくとも感心したような…でもやっぱり分かつてない姫ちゃん。そして授業の準備の片手間で会話を優先したミニワン。俺は一応、聞いてるぞ？パン片手に。

「聞いてくれよお～!?」

「泣くほどかっ!?」

「まつ聞いてほしくてポージングしてまで話を大きくしてゐるのに全く興味を持たれないからやるせない気持ちになつちやつたんだよ。ほら、何処かの電車のヒーローが変身シーンでやつてるようなポーズじやん?」

「平成ライダーで一番ストーリーが凝つて面白かったよな、電王」

そこまで察してゐなら言つてやるなつて?甘い。甘過ぎる!どれくらい甘いかつて言えばホットケーキに生クリームをかけてその上にハチミツ、黒蜜、イチゴジャムをトッピングして更にだめ押しにチョコ、メープル、水飴をかけたぐらい甘いぞ!!

個人的には焼く前の生地に紅茶を少し混ぜるのをオススメしよう。で、話を戻してデンオウの話をしようか!

「電車王に俺はなる!!」

「いやいや、それ海賊王じゃないか?デンオウの話でも無いぞ!?」

「ハーレム王に俺はなる!!」

「それだと碧陽学園の生徒会副会長になるな…」

「なんか意外な単語が伊御くんの口から出てきたあーー!!」

「榊さんが一時期スッゴいハマつてたのが原因じゃと思うんじやよ♪

「…あー。納得」

ボケてた筈がいつの間にか突つ込みに変わつてる謎。…ナアゼエー。

「あ、マヨイは俺、参上!!とか言いながらまたそのポーズしてみ?」「俺、参上!!：おお!?ホントだ!マツチしてるんじやよ!!」「デンオウですか?電車男の続編ですか?」

「電車の中で酔っぱらいうに絡まれていた女の子を助けたのだけど、実はその女の子が実はお姫様だつたのです!!」

「な、なんじゃとおーーー!?」

「色々ファンタジーともどネタがごつちやになつてるわよ…。因みに姫、デンオウというのは仮面ライダーよ。」

「ミニワンも知つてるんだ! スゲエデンオウ! イマジンとか敵じやねえ!!」

「ふつふつふ…伊御さんと会話するためになんやかんやで全部見てたんじやよ♪」

「…私、内緒つて言つたわよね? 覚悟は出来たかしら」

『見せられないよ!』サーツ

今、なんか居なかつたか?!? 具体的に言うと笑つた顔のピンクっぽいデフォルメされた何かが…おお…何時もより高く飛んでいます!

…回つてはいないぞ?

ビタンツ!!

…チーン

地面に落ちたマヨイはまるで車に轢かれた生物の死体のようなグロッキーなことになつて…いない。

てか、見せられないよっていう看板? が邪魔して見えない…。貴様、やるな!!

発禁阻止のプロだけはあるな。だが、俺はそれすらも越えてやる! ーーーよ、俺は人間をやめるぞおーーーー!!

その看板を足場にして大きく飛び上がつた…あと少し…もうちよつと…見え…見え…見えて(ドコーーン)…はい?

俺は目の前が真つ暗になつた。

あと少しで見えるという瞬間に頭に衝撃を受けたと思つた…だが、実際はそんな物じやない。俺はまさかと思いつつ直ぐにこの結論に行き着いた。

「「「……え、え、ええつと!?……ええええええええええええええ——!!」」

クラスの一体感がカンストしました。そしてガラリという音になりました。

先生が入室しました。

そして多分自分の姿を見て驚いたんだろう。

ヤニはり一休尼は現在進行形でカンスト状態で

「…いたたたた。強く殴り過ぎじゃよつみきさんって…ん?え?は?  
うええええーーーー!!」

マヨイも復活しました。

そして相変わらず「一体感」か（my）

では、今、この場にいる皆さんどうぞ!!

「「なんで天井に刺さつてる（のお）（んじやあ）（んだよ）!!!」」

はい、俺は勢いが着きすぎたようで飛んだ拍子に頭が天井にズボーリしましたとさ。いつたい誰がこんな展開を予想できたであろうか：

そして『見せられないよ!』のプロは越えられない壁だつたようだ。  
見せられないよには勝てなかつたよ…

## 15 春だけど夏の予寒

授業は終わった。

相変わらず授業の進みは前の学校に追い付くことはない。つまりは暇だつたという事だ。天井に刺さつたわけだけど案外力を入れたり抜いたりしてたらスポーツと簡単に抜けた。抜けた後は先生が保健室へ行くように激しく言つてきたが勿論こんなの日常茶飯事だった俺としてはその程度で?と思うわけで普通に授業に出ました。

だが、この先生がイイ人であるのはよく理解したよ。暑いまるで太陽のような熱さを誇る熊谷のような・つて流石に伝わりにくいか?

(・▽・) r歎く『『『;△。) ノゾーさんだよ! 松岡の(・▽・)  
r歎くゾーさん。あの人の本気は世界を変えるね!! テニス業界でも、  
CM業界でもある人は富士山だと思うね!

「お、そう言えば今の今まですっからかん忘れてたけど  
「すっかりじやないです!!」

「それだと何も無くなつてた事になるな…」

「皆無じやよ。」

「で、その先は?」

「へいへいほー!」

ほいほいじやないとこが俺流つす!

バツクから出したそれを片方はマヨイに持たせる。もう片方を腕に装着。さあこれで完成じやー! 俺が渡したもの!! それはあ!

「茄子と…た、鷹あ!」

「歐米か!」

「それはトシじやあ!」

「ひいいいい!」

「ちょっと待つて。これ良くできてるけど偽物よ」

「ぬいぐるみ…だな。リアルすぎる…」

そうなのダア、これは俺が夜なべまでして編み上げた一分の一そのまんま鷹君ぬいぐるみなのだ!! 精巧な作りのこの貴さんは爪もくちばしも石を加工アンド砥いでるのでこの通り! 鷹アンドトシなのだ!

「いつつたアアア!! なんじやあ!!」

「タウン。」

「マヨイさんから血が出てますう!!」

「心結、あれは?」

「リアルを追求するためリアル並の鋭さを持つりますん。因みに少しずつ絞まっていくという設定ですんで、あそこだけ地獄スクラッパーなのデース!」

個人的にはデーモンハンドのほうが好きだったんだけどね!

つと、ジョークで済まなくなりそうだつたんでも鷹の爪団をマヨイから取り外しマヨイの頭の団子に装着するとピッタリフィット! もとからこの為だけに作つてたから他の所に装着すると地獄スクラッパーと化すんだよね。鷹の爪と団子に装備つて意味で鷹の爪団なんだからね! ベ、別に誤変とか誤字じやないんだからね! 勘違いしてもいいんだからね!!

「なんで無駄に精巧な作りにするんじやよ!」

「富士さんだから?」

「あー、一富士二鷹三茄子か。納得した」

「伊御さんが納得しちやつたんじやよ!!」

「でも、やり過ぎね。」

「後悔はしている、反省はしていない! やりきつた清々しさすら生まれている。」

「やり遂げましたもんねー」

姫ちゃんの間抜けた相槌は相変わらずだが、俺も相変わらずバカやつてるんで何も言えなかつた。それよりずつこけたミニワンを転ばないように支えてる伊御くんに萌えたよ。男として惚れ惚れするね！流れるようなすつこけかたのミニワンとそれを吸い込まれていくと錯覚するような綺麗なフォームで受ける伊御くんだった。

ん？錯覚？では聴いて下さい「今のを受け止めるじやと!?」…台詞被された…。

「つて、姫つちそこじやない！問題はそこじやないんじやよ！」

「はあ…因みにこの鷹さんにこの茄子をくわえさせると…」

「え!!まだ他のギミックが残つてたの!!」

「正直言うけど、これだけで充分よ…」

姿勢を立て直したミニワンは溜め息を吐きそうな呆れ顔をしながらそんなことを言つた。だが、無駄な才能を無駄に使うのが俺クオリティ!!てな訳でござ！

「まず、この鷹だけど見た通り滑空して獲物（マヨイの団子）を掴んだ格好だけど…あ、カツコウになるつていうのは無いからな？」

…んで、茄子借りるぞ？茄子をくこう！嘴に食べさせると…」

……。

「んう…?…何も、起きない？」

「もう、何かまだ有るのかと思つちゃつたじやないですか」

「アツハツハツこれは心結さんに一本取られたんじやよ」

「確かに何も起きな…いや、待て！」

どうやら伊御くんは気付けたようだ。俺はあえて勿体振るようにしている。そして俺はニヤリと不敵な笑みを浮かべ口角を上げる。

ギ……ギギ……

バサアツ！

マヨイの足元の影が元の大きさの二倍近くに膨れ上がる。俺達の目には太陽光を遮るような形になる

俺も某マジシャン且つ泥棒のような演技がかつたポーズをとる。あ、ポーズだけでレディース、エアーノド、ジエントルメエーン!!とか言わないからな??これ大事。

「そう、コイツは茄子をくわえさせると時間差をつけて羽ばたくのさ！」

厳密に説明すると鷹くんは胸を張るような姿勢で両翼を広げ、両足でマヨイの両方の団子を齧掴みしている。…齧じやなくて鷹だけどな。

分かりづらい？ならグリコっぽい格好。グリコの両足を地に着けたバージョンだ

「名付けるなら荒ぶる鷹くんのポーズ！」

「グリコじゃないのがポイントね。」

「…あ、なるほど。茄子には磁石が入つてゐるのか」

「ふむり…なら、鷹の方は歯車じゃね？んむ…？」

「どうかしましたか、マヨイさん？」

「不意に首をかしげ出すマヨイに疑問を抱いた姫ちゃんがそれを問いただす！マヨイの思考に隠れた意味深な行動。

次回、眞実に隠された思惑。デュエル、スタンバイ！」

「次回予告？」

「いきなりだな…」

「問いただしては居ないですよ!!」

決闘者なネタは最初しか分からないんだけどさ！

城之内君の顎が狂氣：おつと、凶器だつたり、自分自身がモンスターカードになる某コーポレーションの社長だつたり、コントローラーを弄くり倒す変態MADが世の中に回った社長だつたり、もう一人の僕とか言つてヤバイ奴が見えてる少年にボコされる社長だつたりね？

デイスつてるつて？意味分かんないよお～

おふざけしてる間に話が進んでいたようで、気付けば頭に？を浮かべてる一同がそこにいた。どつたのお、先生？

あ、ワーナーマイカルシネマ系列の映画館行きたい。たまにマイカルかマイケルか分かんなくなつてめんどくさくなるワーナーさん行きたい。

「いや、マヨイ。流石に考えすぎじゃないか？」  
「…でも、マヨイの意見にも一理ある気がするわ」

「伊御君の言う通りですよ、少し感覚がおかしくなつちやつてるだけですよ…これ、言つてて悲しくなりました…。」

「じゃろ？夜なべまでしたつていうのが冗談なのか、真実なのかも疑わしいつて思うんじや」

あ、なんかアウェーだ。なんの会話してるか分からんのだよ。俺、察しの良いガキじゃないからねえ…嫌われてないよね？大丈夫だよね？

⋮ ( ̄・ω・ ) ショボンヌ

「ウジウジ考えても始まらんのじゃあー！男は黙つて突撃じゃあ！」

「女性ですよ！」

「クールポコ？」

「違うんじゃないからら？」

「つて、ファツ！」

なんか驚いた声が聞こえた気がするけど氣のせいさ…俺は悲しみの向こうさ…。俺を慰めてくれるのはことり隊だけなんさあ…あはは。ナンクルナイサア。

バツグから大量のヌイグルミを出しながらそうボヤキ続けた…。

「可愛い筈なのに居すぎて怖いですぅ!!」

「まさかこれのせいだつたのかなん?ウムム」

「一匹一匹がリアルね…」

「どうか、ハクちゃんが埋もれてるけど…良いのか?」

「「……あつ!」「」

「ことり(すずめ)が一匹、ことり(メジロ)が二匹、ことり(ハト)が三匹、ことり(カラス)が四匹、ことり(カモメ)が五四、ことり(ぬえ)が六匹、ことり(もず)が七匹、ことり(キビタキ)が八匹、ことり(カワセミ)が九匹、ことり?・8・?が十四…  
…ふふふ、トリサンガイツパイダア

「ええーっと…心結さん?」

「鳥さんはつ籠の中、死人は墓の中…俺は…蚊帳の外…♪」  
「ヒィイイ!!心結さんがなんか怖い歌歌つてますう!!」

「じゅ、重傷ね…」

「なんのリズムだつたつけ?知つてるのに思い出せないねん…  
…着信アリじゃないか?」

「テ・テ・テ・テン・テ・テ・テ・テン・テ・テ・テ・テ・テ・テ・テ・テ・テ・レン・テ・レ・レ・レ・テ・レ・レ・レ・レン♪  
レン…テン…テン…。テレレ…テレレ…テレレ…テレレ…テレレ  
レン、レン、レン、テレレン、テレレン♪  
「ヒィイイ!!」

「なんで機械音が口から流れるんだ!!」

「え?あ…いや、これ携帯だよ?ほら?」

俺はそういうと携帯の画面を見せた。

すると姫ちゃんとマヨイが更に大きな声で叫び声を上げた。あの伊御くんですら少し焦つてみえる…ただ、ミニワンだけは呆れていった。

バツクグラウンド以外で曲が流すと通話画面のスクショ画像を標示しているので端からみたら着信アリが着信で流れるようにも見えるからだと思われる。つてか、それで驚かす目的で設定してたのを忘れてたんだよねえ～？…あ、そんなことより謝らないとだった。

「てへぺろ！」

「軽いっ！」

ペシンって音が出る程度でのツッコミを入れられた俺は一先ずしつかりと事情を説明して今度はしつかりと謝つておき、許してもらえた。

ううむ：夏は集まつて怪談大会っていうのは開催しないほうがいいかもしないなあ…あんまり良い様子じやないし!!

## 16 宣伝かい

この前（ついさつき）の出来事で放課後の時間がかなり磨り減つてしまつた訳だがどうにかフォローを入れ終えた。…いや、主に俺の性だけどね？

「つて、時間がないの忘れてた…。」

という、伊御くんにスッゴい申し訳なさが込みあげて、くうるうう。え？ 嘘だ？ そんな訳ワカメだよ。

何処かの運命つてタイトルのシンジつていうワカメは三下ゲスワカメだけど…。

「えく、これから茶しばきに行く予定じやつたのにいく」

「先約ありだ、悪いな」

「むー：用事があるなら仕方無いね」

「折角お茶碗使つて京谷しばき倒しに行こうかと思つたのになあく」

「つ！（ビクウ!!）」

距離的に聞こえないであろう咳きに反応している京谷さんマジパナイワア。第三の目宣しくきつと何かの能力に目覚めたに違いない。間あ違ひ、ない。

なんて相も変わらずバカな事を考へてゐる間にどうやらマヨイが何時もの世迷い言を言つてゐるようだ。あ、今のは「マヨイと世迷い言でかけたのだからね？ 中島みゆきさんのじやないかんな！」

「是非是非つみきさんとのデエクト、楽しんできてくれ」

「『テート!!!』」

「捏造だつ！」

ううむ…伊御くん、時間押してゐみたいだけど大丈夫かなあ…。え？ やる気無さそうだつて？ まあ、そんな日もある。

気分転換したい気分なのさ。落差が激しいのは今に始まつた訳

じゃないんだけど、どうしてか急になんかやる気が出てこなくなつた。ううむ…体の何処かに貧ちゃん神さんついとるんちやいます?

「おー、ずいぶん萎れてるけど大丈夫か?

例えるならおじやる丸の…」

「あ、そのクダリもう既にやつたからいいよ」

「突つ込みに覇気がない!!」

「やる気が起きなくてねえ、…んくつか」

「お? どうかしたか?」

いや、そこ「お?」じゃなくて「オウ!」とか「オウ! オウ!」とかしなさいよ。島風とかアザラシとかそちら辺でやれば京谷でも可愛いねーとか頭でも撫でてやるぞ!

「…今何か変なこと考えなかつたか?」

「サーッ!」

「それはYESっていう意味のsirなのか、さあ? つていう事のか少し気になるところなんだけどな。」

「そんな小さな事気にしてると禿げるぞ? 詳しくいうと波平スツツ! オラ、この場で禿げ出すんのワクワクして見るつぞ」

「見るつぞ!! ゴロ悪つ!!」

禿げるについては否定しない京谷に、突つ込みが追い付いてない事を理解しながらそれでも追い討ちをかける。かけてかけてかけまくるぜえ! マイルドだろう?

「茂野おー、お前がミスすんの珍しいじゃん!」

「それは茂野吾朗だつ」

「忍! 忍! …からのお! 相手のゴオールにシユーッ!! チヨー、エキサイティーン!」

「五郎丸が…それ?」

「あれ、窓割れてね? ピヨンピヨンキラーで有名なアニメの犬。」「たろう丸!??」

「ナルトのヘビっぽいオカマ」

「大蛇丸だ」

「山口多聞の幼少の時の名前」

「えつと…多聞丸？」

「はい、正解！」

「射命丸う！」

「クイズじゃないよ！クイズじゃないんですよ！」

ちよつといい気分転換になつたわー。（いや、ハラペコ煽り虫じやないよ？知らなければニコ動さんでハラペコ煽り虫で検索検索う）え？いつも通りだつて？お前が言うならそうなんだろう、お前の中ではな！

つと、どうやらマヨイ達はとつくに話終えたのか急いだ様子で教室を出ていった。なら今日はもう解散つて感じかなー。あと、俺忘れられてるよね？

「うまいこと誘導された気がするわ。てか、コール＆レスポンスとか、懐かしいな」

「石鹼屋！」

「μ、sとか言うなよ？」

「ボケを取られた…だと!!

くつ…ミユージックう～スタート！」

「うえーるかーむスオント、言わせんじやないよ」

「松岡」

「ウルトラソウ！」

なんて軽いやり取りに満足した俺らは笑いながら帰ることにした。別に土に、じやないからな？

：ん？ そういうや今更だけど気付いた事があります！つか、なんか思い出しちゃつたつて訳やね

「なあ…京谷？俺さ…ヤバイことに気が付いちまつた…」

「心結…？お前がそんなに震える位にか!!」

「ああ、俺はなんでこんな事も気付かなかつたんだ!!クソツ！DQN  
風に言うならマジfact！」

オドロキダワー、workingのチーフは轟ダワー、キマシタ  
ワーですわー、ぶつぶーですわー

あと、factは脂肪とかつていう意味で悪い言葉じやないです。あとfactはスペルがhookなので似てるのは聞こえ方だけでスペル的には被らないから使わなかつたんだよ？ボケにアドバイスなんてしようとしないでくれよ？おいやん泣いちやうで？

「取り乱してどうした？気になるだろ」

「あ、DQM3発売おめでとうござります。」

「え？あれつてもう出たのか!!」

「残念だつたな！3月24日だ！」

「ダニイ！騙したな！」

「騙されて手玉にとられる方が悪いんだよ！このお手玉が」

いや、なんで俺は京谷ディスつてるんだろうね？ノリつて怖い。あと、京谷も頃垂れてるし相変わらず收拾つかないな！…まずそもそもつける気無いけど!!

なんて言つてるけど、次いかないと進まないから言うなよ！ジョーカーはスペディオが兎に角可愛い。

「いや、多少ハクと散歩がてら散策するけどそれつて商店街とかから離れた公園とかそつちばかりで行つたことないなつて気付いてさ？知らないとこだらけじやん!!豆板醤！のんさ」

「なんでさ…」

「体は細胞で出来てゐる。」

血潮はヘモグロビンで心は精神。

幾度のシリアルスを越えて無双。

ただ一度も逃走はなく、ただの一人もを笑顔にさせる。

彼の者は常に多数、円満の中で微笑む。

故に生涯を捧げる。

その体は、きっと笑顔で出来ているであろう！」

「長えよ！なんで全部言えるんだよ！何ちやつかり自分用にアレンジ加えてるんだよ！」

オカン系の英雄か!?ただのいい奴の詠唱じやねえか！」

「でもボブは最近オルタ化したから！ただのオカンじやないで？新たなる外道への道を開拓したんや！……まあ、オカンエミヤさんの方が良いけどさ…」

「でも、アーチャーしてるエミヤよりクロエの方が」「それ以上は言うなあ!!上位互換とか言われてるんやぞ！これ以上エミヤさんを殺さないであげて!!キヤラ立つてただけで人気とつてるとかいっちやダメ!!」

なんて、二人でFGOで盛り上がりがついているが然り氣無く帰りの支度は終わってるしちゃつかり校門前なんやで！

あ、あと俺の戦闘スタイルはフレンドとライコウママンによる高火力ブツッパあとジャンヌで守りと星稼ぎがメインだね！殺つちやえバーサーかあさん！

「すまないんだけどこの街の案内頼んで良い？」

「ああ、構わないぞ？そういうえばFGOの前そんな話してたつけな？忘れてた。」

「…アーバかよ。」

「単細胞生物じやねえよ！」

「そういうやコンタクトレンズ」

「辞めろお！アーバとコンタクトっていう単語で察したわ！」

まあ、有名といえば有名だよね…怖いし知りたく無かつたけど知ら

ないと被害出るし…知つてれば問題はないっていう程度な問題だよ。  
知るか知らないかは貴方次第!!ま、コンタクトする人は知つてないと  
不味いっていう程度だ!

「誰だつて目の角膜が食べられますなんて言われたら恐怖しか感じ  
ないよな」

「言つてるう！」

「あ、スマンスマン。すまない…」

「すまないさん!!いや、ジークフリートは辞める。ハロウインは笑う」

「ワロチ」

べ、別に恐怖発言した空氣を一掃するためにボケたんじやないんだ  
からね！勘違いしないでよね！

アーチャーなんて好きじゃないわよ！ほ、ホントよ！

だあれが赤い悪魔よ！ゼニゲバでも無いわよ!!

あ、京谷との案内に関してだけど語ることはあんまないよ？だつて  
男二人だし、した話もFGOから始まつてアプリゲームばつかだつた  
からね？モンスト、パズドラだつて攻略についてとかなに持つてるか  
とかばつかだしねく

そんなの聞いても他者からしたらは？なにそれキレイそう状態にな  
つちやうでしょ？だつて、ガチャ運良いから…。

行つた場所といえばゲーセン、マック、商店街内のお店だね？ゲー  
センとマックは勿論軽く寄つてた。ゲーセンはガンシユーティング  
を協力プレイで1クレ全ステージ無双したり、イニシャルのレーシン  
グで対戦して京谷に大敗を喫することになつたのは正直かなり悔し  
かつた。次の機会までに腕上げてリベンジしてやるわあ!!

んで、時間もそれなりになつたからマックでメガポテ頼んで外の席  
でハクとつまみつつ京谷とのお喋り。ここだとゴッドイーターとモ  
ンハンメインだつたな。オンラインの方だつたり、新作どうするかあ  
とかそんな感じで軽く。

商店街だと、あつさりだつたな

「それいけ、隣の商店街!」「アンパンマンか!」「略して、それ街!」「ん?いや…突撃隣の晩御飯と被せたのか!!」つて感じだつたし。

まあ、勢いよくわーっと行つてわーっと一周して戻つてきた。それで案内ご苦労だつたと肩を叩いてリストラされたサラリーマンみたいな感じに京谷を労いつつ解散。？イマココ

つて状態な訳だけど今日の晩御飯どうしようかな?

折角だし紹介された商店街で買い物しようか…。ほらそこ、今までなんで商店街来なかつたとか痛いとこツツカナイデ!トランナイデ!ほら、折角コンビニい～エンストア～♪が近いからそこで全部済ませちゃつてたのだよ、ワトソンちゃん。え?男じゃないのかつて?緋弾のアリアのワトソンだから良いの良いの。間違いぢやない、イイネ?（～▽、）b

ハクだけど、何故かスクールバッグが気に入つたみたいで顔だけ出して静かにしてるんだよね…学校だろうと関係ないみたいでずつと一緒にいる。まあ、問題を起こさないからこつちもそこまで気にしないんだけどね?

学校の方は正式に許可出ちゃつたし…校長先生からは良ければハクに合わせてとまで言われた。…意外と可愛い趣味な先生っぽい?あ、そういえば明記した記憶ないから言うけど母さんよりは下らしいけど校長先生は女性ですぜい?

涙目の似合うキャリアウーマンですよ?

正直、和服着てもらいたい感じの方だぞ?黒い長い髪の日本人らしい日本人?うん、そんな感じ。

一先ずまた商店街の中をゆつたりとどうするか考えながら歩き出す。世の主婦は毎日三食何を作るか考えるのにこうしているのか…ううむ…頭が上がらないな…。

うちは主婦じゃなくて主夫だけど…父さん元気かな…。

なんていうのは明後日にぽいぽいい～して、買いm…え?…さつきは気付かなかつたけど何これ…何これえ!パリコレつ!

「……。あ、俺：結構余裕あつたのね」

うん…まさかこのタイミングでもボケかませるとは思つてなかつたダヨー。ビックリしたさー。思い付きで生きてるつて怖いじやん？じやん、ジヤンジヤンジヤン！

あ、東方M—1ネタはダメ？

：カラーボール投げたいけどダメえ？

あ、可愛く言つてみても許されない…ミトメラレナイワア、認められませんわ!!

ダロウナ！分かつてた。

状況を説明すると電柱に真新しいひび割れが伝染して、メッコリ行つちやつてるんだ、メランコリー♪

今のはメッコリとメランコリー、電柱を伝染つまり電線にかけた訳ですよ！メランコリーの方に目が行くように意味わからん小ボケを入れた訳だが気付けたかな？言えるかな？ポケモンの名前えく！

そんな事言つてたら前方に荷物を持っていたサカキンがいた。別にハローーきんいろモザイクとか言わないぞ！…あれ？ユーチューブだつたつけ？まあ、些細な事だね。

「迫るショッカー！地獄の個人

おまえを狙う黒い影世界の平和を謳歌する！ゴツ！ゴツ！レツツゴツ！月面パンチいゝ♪

「それアクエリオンの必殺技だろ!!」

「必殺、月面パンチ！（歌詞の擬音的に連續で三回やつちやつてるけど良いよね？）

「今然り氣無く心の中でスツゴいこと呴かなかつたか？」

「すつごーい！貴方は人の心を勝手に読むフレンズなんだね！サトリなんだね！」

「思つてたあ！う…うん。そのネタは突つ込まないぞ。突つ込まないからな！」

榊が折角の時事的ネタを放り投げようとしてる？そんなことさせ  
るかあ！絶対に突っ込ませてやるう！例えどんなブラックネタだろ  
うと突っ込んで突っ込ませてやるからな！覚悟しておけ！覚えてお  
けよ！…とは言つてもブラックネタで言えるのは一つしかなかつた  
りするわけだ。

「まあ、アニメ直前で潰れたアニメなんて突っ込む価値すらないと榊  
はいうのね…酷い」

「違うわ!! そうじやないだろ!!」

「そうなの…難しいのね。」

そして、示し合わせた訳でもないのに見つめあつた。目と目が合う  
♪瞬間どするか気付いた♪

ああ、気付いた。榊が何をするのか…何をしようとしているのか…  
その全てを理解してしまつた。そして分かつた以上俺もその行動に  
乗つかるだけ。

「トリニティセブン、映画化おめでとうござります！」

…また宣伝してる？

意図してた訳じゃないんだけど…ま…まあ、仕方無いさ。

あとけものフレンズはいいけど、けだものフレンズはダメだよ？  
はつきりわかんだよ？

野性の獣と野獸じや大きな違いだからそこんとこよろしくね？

そういうや、けものフレンズに犬科のフレンズつてキツネしか出てな  
いよ…な？…そんな、嘘だつ！

プレーリードッグはネズミだからな!! 犬じやないんだぞ？引き合  
いに出そうとしてたらオレサマオマエ、丸裸だ！

お前をハダカデバネズミにしてやろうかあ！

…うちのハク、コーカサスハクギンオオカミをフレンズにしてくれれば推しになりますわー犬は神がかつた可愛さですわー、徳川のお犬将軍はマジで将軍ギザミですわー

## 一キュピン

は…妖氣！

アホ毛が…立つた！それこそクララが（r y位にプルプル立つた！べ、別に俺は鬼太郎なんかじや無いんだからね！奇異太郎なんだからね！…妖怪絵日記はただのほのぼのかと思つたけど結構考えられる内容の所もあつて結構好きだつたなあ）

…あー、まあ妖氣なんて無いだろうから今のアホ毛センサーはきっと風のイタズラか、妖怪のせいだろうね！

「それはきっと妖怪のせいですね」

うん、オマエは幽靈で妖怪じやねえよとは突つ込まねえぞ？ウイスパー…お前はもう死んでいる。

「榊はん？その重そうな荷物良かつたら一袋お持ちしましようか？」

「なぜ京都弁…？いや助かるけどさ」

そういうと右腕を持ち上げる榊。たぶんそれを受けとれという事だろうね。だが、甘い！そんな姑息な手に引っ掛かるほど私は甘くない！MAXコーヒーほどは甘くないのだよ、少年。

「…ふつ、私はそつちを持とう。」

「いや、重いしそつち持つけよ」

「いやいや、折角持つんだから軽い方じやなくて重い方もつわ。あと、人に押し付けられた道とか歩む気になれないから！獣道の方がワクワクするから、冒険、探索、迎撃は男の子サガツトなのさ」

「タイガーアップバーとか出来ないよな…？」

「流石にできないよ…出来て俺ガイル」

「待ガイルじゃない!!」

因みに俺が迎撃するときはこのバツグからハクによる追尾式咬住弾が解き放たれます！全砲門ファイヤー！

ハクは呼んだ？と言わんばかりにバツグから顔を出して見上げてきていた。コイツ、人の脳内を…。

「…男の子だからね！」

「男の子だからといって全員が目を腐らせる訛じやないだろ！」

「テテテテンテテテテン♪」

「みんな目が死んでるうへ♪いや、アレは特異な環境だろ！」

ズビシツとか音が聞こえてきそうなキレイな突つ込みを左手でやる榊。そう、左手だ。本来渡そうとした方の腕はどうちだつたかなあくくくふ、はつはつは！ そうだ！ 右手だ！ つまり俺はこの数瞬の隙を付き、すり替えておいたのさ！ 榊もまだその事実に気付いていない！ 全部俺の手の上で踊っていた！ さあ、楽しい楽しい道化の演目が今始まる！ 楽しませて貰おうじゃないか、さあかきクウン？

「まあね！ いも子とツナは／＼あかよしトウナイツ♪チヤオつす！」

「そつちのツナかよ！」

「わりいか！ ダメツナだろうと中学生だつたらまだ許される気しかしない程度のミスでもダメなんだつて悩むツナくんいい子じやん！ バカにすんなよ！ 忘れてやんなよ！」

「マグロの方のツナじやねえのかつてことだよ！」

「同じ突つ込み役で何かと苦労に絶えないことかおんなじだし気が合いそうだろうが!!」

「…たしかに…。」

あれ？ 納得させた？ ボケたのよ？ 突つ込みは？ 突つ込みはどこですか？ 早く！ 早く誰か突つ込んで!! 終われない！ 終われないから！

ちやんちやん

。。

## お気に入り百件記念 消失

「もう、こんな時期なんですね」

「早いものだよねえ‥」

「‥‥‥。」

「でもさ、こう振り返ってみると色々あつたなあつて感慨深いよなあ」「まあ、実際沢山有りすぎた訳ですし、4月の出会いがずっとずっと前だつた気がしちゃいます。」

「‥‥‥。」

「んで、黙つたままなんで何もないかのように炬燵に入つてるんだよ？」

「えつと…この人いつたい誰なんですか？」

「‥‥‥（ダラダラ）」

「それに地の文もないけどな」

「地の文…つてなんですか？」

「いや！私が責められるなら分かるよ!!でも君がそんなメタ発言しちゃダメじゃん!!」

「わりと何時もだぞ？むしろそんな事まで忘れたのか？」

「／（^\_^）＼オワタ」

「今のどうやつて発音したんですかつ！」

「…まあ、いいや。わざわざこっちに出向いたつてことは何か意味あつてやつてるんだろう？」

「お、いい目してるね！いつも脱線させて物語進ませないくせに!!」「ぶつ飛ばすぞ糞作者!!」

「殺れるもんなら殺つてみやがれ！私は神だ！けして私の作りし者になど負けぬよ」

「ほへえ～神様だつたんですか」

「へあつ！」

「いや、姫ちゃんや？確かに作つたけど神様というのは言葉のあやで

あつてだね？」

「そうだぞ、姫ちゃん。コイツが神なら意識さんは果たしてどうなる！あと、下手なジョークは姫ちゃんがキラーだから通じない場合があるから自嘲しろ！榊とかマヨネーズとか凶やんとかじやないと着いてこれないぞ」

「うーん難しいですね…それとお二人つて仲が良いというか息が附てるつていうかなんか疎外感感じちゃいます…」

「おい、作者？何姫ちゃん悲しめてるんだア、アア？」

「おい、お前こそどれだけネタ詰め込んでるんだよ…それアセロラレーターサンだろ？あと実際に戦うつもりはないから姫ちゃんは心配しなくていいからね～…野菜人には勝てねえよ（ボソツ）」「そうなんですね…なら安心です！えっと…糞作者さん？「グツハア！」ふええええ!!血を吐きましたけど大丈夫なんでしょうか！」

「クフフ…姫ちゃん、糞作者っていうのは全く駄目な作者への罵倒であって、名前じゃ無いからねえ？」

「クフフがリボーンの骸か…個人的にはあの作品はドクロちゃんが一番可愛いと思うけどそこそこどうよ？」

「自己紹介しろつつってんだよ!!このお馬鹿様が！後俺はハル派だぞ」

「お馬鹿様…問題児の黒ウサギだな。断然サラ＝ドルトレイクを推させて貰うけどね。ツナさんラブだからハルであつて、故にハルちゃんには是非ツナとくつついて欲しいっていうのが私の本音だ。」

「問題児は分かるがレティシア＝ドラクレアの本来の姿も捨てがたいと俺は思う！それと相容れないようだが話は分かつてゐみたいだな、同士であることは認めよう。ようこそ、作者。」

「（ガシツ）ふ、歓迎の言葉をありがとう。こちらこそ今日はよろしく頼む」

「え？・え…え？何か男の子同士で何か分からぬシンパシー？みたい

なのでいつのまにか仲良くなっていますう!!

「姫ちゃん、どうも初めましてこの世界の作者、文才皆無。です。よろしく頼みます。」

「え?あ、はい!!よろしくお願ひしますね!」

「で、姫ちゃんの質問に答えてあげよう。さあ質問ハリアップ!」

「『の』つて、なんだ!俺の質問は無視か!」

「ボケだらけになつたら不味いから突っ込んでてくださいよお~、だつて私作者だし。作者だもの」

「人間だものみたいに言い直すなよ!」

「息ピッタリですね」

「そりやあ、創造主とその想像された人物ですからね!」

「今のは誤変か?」

「わざとに決まってるじやん。私の作風でしょ?」

「いや、直せよ」

「断固拒否、私は拒絶する!!」

「相変わらず変な所に引き出しがあるようで安心だよ、堕作者が!」

「貧乏神ではなくてよ?」

「作者さんですよね?」

「「はつ…ね、ネタをネタと認知されてない!!」」

「てか、この地の文無しはいつまで続けるんだ?」

「挨拶が終わるまでだよ。さあ、出演者からの質問はあるかい?」

「斬新! 読者じゃなくて出演者!!」

「はい!」

「はい、姫ちゃん」

「無視か!」

「作者さんつて普段何をしてるんですか?」

「オウオウオウオウニネンブウリデスカ、いきなりアプカリップス!」

「えつと…聞くなつてことでおk?」

「いや、言うよ。普段は仕事してるけどしてないときは家で寝てるかもイクラかポケモングハツ」

「ダメ人間か!」

「心結さん!! いきなり暴力はいけないと 思います!」

(……………少年鎮静中…………)

「初地の文はネタか!」

「残念、ソイツはざん…私の心の声だ。」

「あはは、天衣無縫ですね」

「お、姫ちゃんは私という人間を理解してきたようだね」

「天衣無縫は本来 誉め言葉に使うものだから間違いだぞ」

「シャアラップ! 赤い彗星にクレラップだ心結よ! 天衣無縫は飾り気のないそのままの君という意味なので合っているのさ!」

「捏造すんな!」

「え、じゃあ生まれたままの姿つてことですか!!」

「姫ちゃんもそつち側に回らないで!! てか、生まれたままの意味をちゃんと理解しないで使わないと くれないかな!!」

「…ホウ、つまり脱げと」

「脱いだら 小説から摘まみ出す」

「聞いたことないような低い声ですう!!」

「ガチなトーンや… 因みに私の背後には雷の落ちるトーンが出ましタワー!」

「」

「コホン、では改めましてどうも文才皆無。 の作者です。」

「逆だ」

「あつ…作者の文才皆無。 です」

「素でミスつてたのか!!」

「あ、また脱線してますよ。 そして、春野姫です」

「ツツコミ担当の」 宇図心結です」

「あ” あ” !!」

「あ、ケンカは駄目ですよーめつ!」

「…はい。」

「反省した!!」

「という訳で私は眞面目モードに切り替えます! メルヘンチエンジ」

「初手ボケんなや!!」

「…あのさ、ボケないのキツい…」

「ええ!!泣くほどですか!!」

「ボケないと死ぬんかお前は?」

「死ぬ。」

「あ、じやあ後最低でも百文字無言な?はいスタート」

「……!!」

「ええうつと?作者さんが口開こうとしてますけど…パントマイムで  
しようか?」

「マイムマイムだな」

「もごもがもごあ!」

「なんて言つてゐのかわからないですう!!」

「言い直すなあ!だな?」

「分かるんですか!!」

「あつたりいゝ!」

「…………。」

「ふう…まあこうしてみると百文字つて短いよな?」

「ボケてツツコミいれるだけなのに会話だから文字がかさむんだよな  
…なあ、つまり普通に書いてれば即文字数行くよな?」

「ダツシユ、ダアツシユ、脱臭!」

「それを走る掛け声にするアホウはテメエ程度だ!」

「つまりこれは君もやるということだ!ハアーツハツハ!（・□

、・）」

「ぶつ殺すぞ!」

「良いぜかかつてこいやあ!」

「…ケンカはダメですよお!」

「…はい」

「空白四行の間にお一人のお顔がブクブクです!!」

「赤いお魚」

「それはプクプクだろ！」

「ナイスツツコミ！」

「いや、中々のテンポのボケだぜ、作者！」

「俺たちいいコンビニなれるぜ！」

「おでんください」

「えつとえーっと」

「何にしますか」

「えつとえーっと」

「いい加減決めや!! 表でえやお客様ア！」

「キレんの早つ！」

「俺が速いんじやない、世界が遅いのさ」

「キメ顔すんなよ」

「サー、セーン」

「仲直り早いですし、喧嘩するまでがノンストップですう！」

「誰も俺には追い付けない！」

「スピードイーナボケとツツコミの応酬がこの作品の売りだからか？」

「お、おう。」

「核心突かれると言葉少なくなるの気を付けような？」

「しようがないでしょ!! だってこの作品のお気に入り100件突入しだんだよ!! そうなのかもって思つたら嬉しいじやん!! 違うかもだけど!!」

「…もしかしてそれが本題か？」

「あ、…なるほど!! そういう事だつたんですね！」

「うん、そうだよ。100件記念やらなきやつて思つてたから変な形でもあげにや思つたんよ。」

「いや、本題切り出すまでに3000字越えてたんだが?」

「うん。だから作者と心結くんと姫ちゃんの三人のやりとりをボイスレコードでラジオ風にしてみたんだよ。結果はご覧の有り様だけどね！」

「記念事に関しては全力タイプなんだな…」

「心結さんと同じタイプです…」

「作者だからね…」

「…まあ、作者と俺が似てるかもしけないって話は今はいいや。で、俺から聞きたいことが一つある。」

「ん？ 何、何い？」

「これから展開もしくはネタについて考えはあるか否かだ」

「あら少し意外！ 真面目な質問だね～ま、読者様方に対する礼儀だね。いいよ、応えてやろう」

「上から目線ムカつくな」

「ケンカはダメですよ？ それに答えて貰つてから遊びましょうよ、ね

？」

「…姫ちゃんの顔に免じて許す」

「ありがとう。んじゃ、答えるよ？」

ネタは小出し出来るレベルで幾つかあるよ。オリジナル展開混ぜつつネタに走る事になりそうだし使えるのはまだ等分先になりそうなんだけど想像をメモつて形にしてはいるから引き出しならあるつて感じ。相変わらずの展開の遅さにはなりそうかな？ 最新話もあるの続きになるし、意識さんのあつちこつちの描かれてない部分も勝手な想像で埋めていく形になるから四コマからの小説つて意外とやること多いんだよね…それ故やること増えて大変頭が足りてないのよ？だからこそお待ちいただきたいの。いや…遊びの時間減らせつて言わればそれまでなんだけどそれやつちやうと今度はネタが無くなつちやうんだよ…ほら結構タイムリーなネタもあるでしょ？ そういうののこと。まあ、もつと自分が要領よく出来ることが一番だからさ。削れる部分削りながらやるからさ？」

「お前の方が真面目に答えてるじゃねえか！」

「…ふふ、良くなきました！」

「ボケないと…死ぬう」

「よく言うよ。今どんな顔してるか知ってるか？」

「ブサイク」

「その通り」

「殺す」

「なんで二人とも一言ずつ会話してるんですか！」

「だから、まあやつくりだけど書いてるから読者様には大変迷惑かけてるけど一日百文字でもいいからって考えて書こうとはしています。だからエタる事だけはしないつもりなのでこれからも応援お願ひします」

「お願いします！」

「…てつきり心結の家族構成、及び出番の話かと思つたわ（ボソツ）」「…は？え？ちょっと待て！今なんて言つた！お待て逃げるな!!なんでこんな最後だけはやいんだよ！…くつ、逃げられた」  
「これから展開考えてくださいってはいるみたいで安心しましたね？」

「考えてるとは言つたが書けるとは言つてないけどな？」

「…はつ!!確かにそうです！」

「…ま、ここは作者も帰つちやつたしちゃんと俺らで占めますか」「お読みの方々へ！今日はありがとうございました！」

「次回はしつかり本編りますからね？」

「…こんなことやつてないで本編書けよ…」

「「「では、また!!」」

## 17 理解するよりも感じどれ

榊を弄りながらもなんやかんやで目的地に着いたらしい。

なんやかんやつて何か？なんやかんやはなんやかんやだよ！もし  
くは、丸々シカシカ、丸々ウマウマ、マルカリジウマウマでもいいよ  
？

「荷物持たせて悪いな」

「ええんよええんよ、お礼は身体で払つてもらうさかいニヤア」  
「貴方、私に酷いことするつもりね！工口同人みたいに!!工口同人み  
たいに!!」

「ぐつふつふカスタム！」

「略してグフカス!!そこはイグナイトツドだろ！」

きつと京谷がいたらツッコミを入れているだろう。違う！論点は  
そこじゃない!!と

だが、掘り返せば怪我をするのは我々であると互いに分かつていて  
故にこうして誤魔化し合っているのが現状。

だが、私はあえて突っ込もう!!それが心結クオリティです！

「現状的に工口同人つつーよりもBLだよな?」

「何故より酷い方に言い換えたア!!!!」

「え～wだつてえwこつちは店員としてしつかり働いて貰えれば結構  
だよって意味で言つたのにw榊がwあんな風に誤爆するんだもおん  
ww」

自分でやつておいてなんだけど、かなりうざいね！あ、あと掘り返  
す、突つ込むにかかるて欲しくないのにかかっちゃつた（意味深）だ  
けだからね！ほら！やらかした！もう、俺もこのネタ触れねえわ！  
触つたら引火するんだけど!!

厄介すぎるんだけど!!怖いわあ～ホモお怖いわあ～、森のホモおだ

わ～マジパキケファロサウルスの化石×夕暮れの教室つすわあ～

あ、恐竜の話だけどどこの1000ちゃんの那珂の人はログイン  
しないでえ!!那珂ちゃんの中の人は寝てる人!!

キヤパシティがオーバーロードですたい!

「クッソ！裏切り者!!」

「あの日やられた裏切りは僕の名前をまだ知らない」

「混ざってる混ざってる」

「裏僕×あの花」

「やめい！てか、心結お前実はそういうの好きだろ!!」

ピキピキピギイ！

コメカミ辺りにはきっと十字路が出来ているだろう。間違えた、血管が浮き出て怒りマークが逃げちゃダメだして。なんでだよ、父さん!!シーラ、カンスツ！右手のエイリアンはミギイ！ヨシヒコのはビダリイ！

「なあ、言つていい冗談と悪い冗談があるんだよ？分かるかい？俺は男だよ？」

「す…すまん。そりゃあそうだよな…」

「俺はただこういうネタで弄られてる奴を見るのが好きなだけだ!!そしてある程度寛容なだけだ!!」

「最低だーつ!!俺の謝罪を今すぐ返せえ！」

ゼエゼエと肩で息をする榊。どこか申し訳ない気持ちになつたが榊自信に謝罪を返せと言われてしまつた以上返さぬ訳にはいかないわけで…ん？違和感？その正体は割れてるよ？

謝罪を返せ…まあ、普通返せないからねえ。概念的な問題でしょ？でも、俺に不可能はない！何故なら俺はエネイブル：哥の二つ名持ちのネームドモンスターでデイノバルドも曰じやないのさ!!ネームドモンスターはSAOで二つ名モンスターはモンハンよ？

…人間辞めたつもりはないけどさ、遠山さんの血って怖いよね。で、俺なら返せるっていうのだけどまあ、誰でも出来るからいつか機会があれば誰かにやつてみるといい。じゃあ、心結、実践します！あつ！しもうす！

ポケットに手を突っ込み、ブツを取り出す。そして牡丹を…コホン、ボタンをポチつとな！因みに18歳未満は牡丹は駄目よ？ほら…グロいから…

「んじゃ、はい！返すな？」

『す…すまん。』

「それボイスレコーダー！ってか、返すんじゃなくて繰り返してるだけじやん!!」

『す…すまん。』

「俺の声で会話成立させんなやあ！」

あえて言おう。これ、店前での会話なんだぜ？んで、榊なんだけど丁度振り替えつて俺を見てるんだよ。ドアの前で。

…察した？君は実にいい目をしている。だが、私は君のような勘の良いガキは嫌いじゃない。元ネタの真逆だけど嫌いじゃないのよ。別にコードDTDとかしないよ？男がヒートエンドしていいのはゴッドハンドかゴッドファインガーしたときだけです。シャイニングファインガーも勿okです。あと、男がキヤストオフしても誰得よ？そして、ここはメタだがギャグ小説。つまりはくはい。世界の真理が発動！俺は場に伏せていたカード、ブービートラップをこの場で使わせて貰うぜ！

……ガチャ  
ゴン

「お、虹色の卵だ」「ぐおおおお！頭が割れる様に痛い」

「遺体だけにか…」

「死んでねえ!!」

「いや、すまん。店先で騒いでるのは聞こえてたんだがまさかドアの前に居るとは思つてなかつたんだ」

榊の頭に狙いをきいゝめて、便座ブロツク！

今レゴつて凄いからなあ…あ、ブロツクつてそつちじやないか。じやあ便座カバーだね！

そして地味に出来ているたんこぶに痛そうだなあとかいながらも伊御くんに挨拶をした。あと、別にガチャのクダリを無視されて寂しくなんてない。悲しくなんてないんだからね！

「ああ、さつきぶりだな」

「だねえ～喫茶店で働いてるとは思つてたけどまさかこんなに早く会えるとは思つてなかつたよ」

「ん？」

「ん、いや何。姫ちゃんが地雷踏み絵したからもしかしたらつて思つてたんだよねえ～。まあ、あの二人は気付いてなかつたっぽいから安心してくれていいよん、略してクレヨン。」

「ふみぬいた…だろ？あと、そのクレヨンは分かりづらくないか？」

「じゃあ、鉛筆」

「いや、しんちゃんじやないんだから」

「鉛筆しんちゃんは今時知つてる奴居ないだろ？」

「流石ゾンビ」

「一人して俺の扱いが酷え!!」

冗談は一先ず置いておくとして、店先でコントをやつても客寄せになるかは微妙な所だからそろそろ店内に案内してもらおう。伊御くんに続く形で俺、榊とはちぽち（たつた今看板を確認しました。）に入つていく。ドアを抜けるとそこは……

「雪国…じゃない!?」

「ドアに入つたら雪国つてどこでもドアじゃないんだから普通に店内だよ。」

「あ、いや。ごめん?なんか出てきても驚かない自信があつたから逆に普通で驚いた」

「いやいや…雪国の方を驚けよ…」

「あ、榦。いらっしゃいませ」

「ただいまーつて!!その挨拶は違うだろ!今まで一緒だつたよな!!あと心結は迎える側じゃなくて迎えられる側だろ!」

ギヤーギヤーギヤーギヤーやかましいんだよ!お前は発情期ですかコノヤロー、バカ野郎!

ん…あれ?銀時さんとビート版コケシさん混じっちゃつた?あれ?台詞も間違つてる?えつと…

p\_i\_l\_p\_i\_l\_p\_i\_l\_p\_i\_l\_うるせえんだよコノヤロー!発情期ですか?始まりですか?テーッテレーーハだつけ?

なんか原形留めてないような気がシテキタワー。そんな放送禁止用語みたいな感じだつたつけ?あつれれえ~おつかしいぞお~

「ん…?あれ?二人とも此処にたどり着いてたんだね」

「無視された!!」

「なんか一人人数が足りてないんじゃよ!!私か?わたしなのか!!」

外野でなんか言つてるけど、あえて言うなら姫ちゃんを外しただけだからな?だつて、姫ちゃんだけ知つてたはずだから伊御くんの居場所見付けたんだ?つて意味で言つたんだからね?

まあ、わざわざ言わないけどね!（鬼、悪魔、ちひろー）

「…あ、いらっしゃい心結くん」

「あれ?みいこさん?」

「ふふ、覚えてくれてたのね。 そうよ?ここは私のお店なの。 その感

じだと榊のお手伝いしてくれたんでしょう？お礼じゃないけどサービスさせて貰うわね」

「いえいえ、榊の手伝いは俺がやりたいからやつたので気にしないで下さい。お代はしつかり払わせて下さい」

「常識的ね」

「真面目な応答だな」

「偉いですよ」

「アリエナーヴ」

「天変地異の前触れじゃね！」

だまらつしやい！外野はトヨタ車です！あれはガイアだつたつけ？（。。？）ムムーン…ワタシヨコモジワカリマセーン！

後ろ二人は失礼だなあと思いながらも自分のやり取りを思い出し、俺が人の事言えた身じやねえやーと自己完結してみいこさんに向き直る。

みいこさんは改めていらつしやいと言うと微笑む。あらあらうふふと笑う満点の店員スマイルだった。

：氣のせいたよな？みいこさんの背後から花が咲き乱れてるような気がしたんだけど…？

…うん、みいこさん目的でこの店に来るお客様とかも多そうだね。こんな店員さんスマイル向けられたら分かつても勘違いしちゃいそう！心結さんにも春が来たのかと錯覚しちゃう！！

ん？錯覚？では聴いてください錯覚クロスロード…………あれ？言えた！前回は被されてネタ出来なかつたのに…やつたよ、やつたよ僕。やりとげたよおつかさん。岡○さん

「うふふ、人の好意には甘えるのが良い男の子ですよ」「なるほどなら俺は良い男ではないですね。

（；・。・。）ショボンヌ

「あらあら、そういう意味では無かつたのですけど…。」

「甘えてくださつてもいいんですよ？って事ですよね～（この人もし

かしてネタが通じない!?)

戦々恐々としながらたじろぎ、然り気無く他の店員に視線を送る。  
死線とか何処かの七夜は関係無いデース。

死線とか何処かの七夜は関係無いテリア

榊の反応は「やはり勝てぬか…みいこねえラスボス説が強まつたか」とか言つてた。自分の姉がラスボスでいいんか?つてツッコミを入れたい。

次に伊御くんはどうと「ダメだつたかあ…」…あの…みいこぎんってそんな強敵扱いなの？てか、バイト先の店長さんにそんな感じで大丈夫なのか？

一大丈夫だ  
問題ない

「…いきなりどうしたのよ」

「あ、もしかして、このアーティストの二枚目が、いぢめられたりしてな？」

なんじやよ！」

「みぎやあああー目があ！目があ！」

アホすぎる：何やつとんねん：。しかも目じやなくて頭だし：。アンクローなんだから目は関係ないじやん。

いやそれメタルクローカーお!!

え？ 攻撃力上がったの？ なんで？ 爪か！ 爪が鋭くなつたの？ 我が事ながらゲーム脳怖いわ。まさか脳内にテロップ出てくるとか予想外にも程があるつづーの！

一心結はスマートホーンをくりだしたい。

し・る・かあーーー！つーので角か!!しかも出したいつて願望持つてねえよ！ククイ博士からスマートホーン貰うけどマジか、ケータイ渡す博士とかヤバイなとか思つたら技だつたガツカリ感とか感じたけど今このときに繰り出す余地がねえよ！

一心結は榊の地にねむるを予知した

だからア!! 今度は余地か! なんやねん! もう!! 何処でも反応するのかよ。なんでもありか! あと縁起悪すぎるわ!!

「心結はなんでもなおしを使つた  
使つてねえよ!! あとなんでもなおしは瀕死にはつかえねえよ!

一使えよ

なんでだよ!! しかも会話すんなよ! 何がしたいんだよ! お前えツツコミ追い付かなくなるわ! あと然り気無く命令形ウザいな

一若干や草

表でやがれこんにやろー! てか、それ言いたいが為だけにこの無駄なやりとりやつただろ!! ほんと無駄だな! てかお前は結局誰やねん!

!

一私はですねえ (ry

だから誰え!! あと中途半端すぎる多摩動物公園の飼育員さんの真似も辞めろ!

.....。

そして、それ以降あのテロップは出てくる事は無かつた。スッキリしない。終わり方とか色々と…。そして謎過ぎる…故に気になつて集中出来かつた。

何よりもこの瞬間が無駄すぎる…なんだつたんだよあの無駄空間⋮。文字稼ぎも要らない文字数なのになんで始めた!! 責任者（作者）だせ、訴訟モンだぞこれ

「心結くんは表情が豊かなのね」

「心結くんは表情が豊かなフレンズなんだね

とか頭の中で変換しちゃつたんだけどお!! マジアイツ迷惑だつたわ! ヤバイ…なんて言つてたつけ? 最後の会話つてなんだつけ…あ、あれか!

「ですかね? みいこさんだつて美人じゃないですか~引く手多数なんじやないですか?」

いい男とかそんな会話だつた希ガス！これならきっと違和感ない会話を……を……あー……やつちやつたぜ!!

いや、やめてえ!!え？戦犯もの!!なんで姫ちゃんこっちを親指のタタキ…じゃねえや、親の仇みたいに見てるのさ！怖いよ!!あと榊くん除いてみんなヒソヒソヒソ力に内緒話やめてえ!!あと砒素砒素（と山のようすに盛られる）ヒソカさんじやないデスヨー？

バンジーガムは関係ない！

榊くんやー親指突き立てんな！天に向かっていつそ「我が生涯一片の悔いなし」みたいに綺麗に親指上げんな！むしろ落とせよ!!死ねえとか言われたらまだ納得いくから！だから榊の反応だけ困るんだよおおお――――!

## 18 お茶会に失礼します

「それで心結さんや」

「なんだい榊さんや」

「結納の日取りは決まつてるんかいのう」

「寝言は死んでから言え」

「はつはつは…はあああ！」

「えつ、ちょつ！そこはせめて寝て言えじやないのかよ！」

「いや、死んでから逝ってくれ。…あ、もう大丈夫だ少年、私が来た！生者は嘘を吐くが死人は真実を語る。これは顔の堀りが深いヒーローとあるN C I Sの検死官のセリフだよ。さあ安心してゆっくりしんでいつてね！…即○ねやオラアア！」

「直球過ぎんだろ！容赦ねえな、オイ!!」

俺のこのやりとりは本当に死んでほしくてつて訳では勿論ない。こうでもしんと榊はん、冷やかすやろ？心結（ちい）知ってるよ。なんて内心余裕ぶつてるけどエマージェンシーコール鳴りっぱなしったりするんだよね。前後の会話が頭に入つてこないつていうのはつまり最悪話を月牙天衝、卍つ解！天鎖斬月ドドーンつて感じで無月するんやね。心結はI N Tが一段と上がつたよ。え？言葉がすでに頭悪そう？シャラップだわ。

君はいい友人であつたが君の父親がいけないのだよ。聞こえていたら君の生まれの不幸をのろうがいい…坊やだからさ☆キラツ

「それはシャアラップだろ」

「冗談ではないつ、私を誰だと思つている」

「心結さんですよね？」

「ふふふ、姫ちゃん大丈夫よ。あれは照れ隠しだと思うわよ。だつて榊もたまにああなるもの。」

「そなんですか…。心結さんも照れたりするんですね」

「失礼な！ツンだけじやないデレたりもするよ！」

「以外と余裕ありそうじゃね…」「もうやめてあげないか？」

被弾者が二名に増えてる現状に震撼するよ…。完全に巻き込まれた形で跳弾を胸に受けた榊は隣で呻いている。正直一番の被害者と言えよう：俺は当事者だからまだ事故死程度だが榊は味方である姉の援護射撃でノーガードに一撃必殺たたき込まれたからね…。あと、その気持ちもよくわかる…。あれは…ツラい…。

なるほど姫ちゃんのように無自覚にたたき込むくせにそれを敵味方関係なく一撃必殺も繰り出すスタイルは裸素ボスだな…。もち、誤字にあらず。裸も素も似たような意味だから被つてるんだけどね…。…そして我らが良心は伊御君だけだよ。ありがとうね…。

悪ふざけもいいけどもそろそろ腕が…というかふくろをもつてる掌に食い込んで少し痛いかなって思うのよ…。だあれが貧弱だつて、ああん？ そこまで言うなら貴様も実践してみいや。是非袋に牛乳のパックが五本に小麦粉二袋入った袋を持ち続けて貰おうじやないか！いやね、ホント男の子としての意地があるから黙つてるけど地味にダメージの蓄積量多いのよ…。考えてみ？ これ持ち続けて二話目なんだよ！ ここまで来たらチキンレースやんな。

これに加え卵二パックと生クリームつて明らかに罰ゲームの域に達してるような気がするんだけどどうなんだろうか…。ああ見えてもしかしてみいこさんつてスバルタ：いいえ。ミイコサンハイイヒトデス。キレイデキレイデキレイな人なんだよふざけんな！ つて電波受信したんだが何処から流れてキタンだろうか？ 紅蓮で裸眼なんだろうか？ ギガツドリルウブレイクウア！！

「前後の会話はギガドレジやなくてゴマダレ♪」

「ギガドレイン？ … ポケモンの話しか？」

「ギガド（リルブ）レ（イク）つて些か無理ないか？ や、 おれもその略しかた嫌いじゃないけどさ。」

「ゴマダレですか？」

「姫、別にただゴマダレっていう意味で言つたんじゃなくてあれはスキップするつていう言葉を違う言い方するつていうような様式美みたいなものだから食いつかなくて大丈夫よ」

「榊さんは分かつたんじやね…いや、つみきさんも詳しすぎじゃね!!」  
「榊もたまに唐突に意味の分からないこと叫ぶものね?」

「世界の中心で…つて地球が丸いと思つてたときは何処で叫んでも中 心だよね…って思つてたとこあるわ」

「愛は叫んでねえよ!」

「確かにそれは昔思つた事あつたな。 実際はかなり歪な形なんだつた よな…」

伊御くんが同意してくれる。いや、皆ウンウンと頷いていた。あの 作品を知つてて且つ地球の形を知らなかつたら絶対思うのだろう。 世界＝地球つて方程式出来上がつてるけどそこはトリックだよね? ん? ロジックだつたつけ? まあ、いいや。

「ですよね! 分かつてました! 僕今、ホント分かつていながら、あえて 動搖してみせてたとこあります!」

榊はあくまでも君が好きだと叫びたいだけだよね? ゴメンねゴメ ンねえー」

「謝る気ゼロじやねえか!!」

「f u ↗♪ZERO↗♪」

ですよね! からの一連の言葉はゲームーズ! のネタだつたりする けど皆は見たかな? たしか夏アニメだつたはずだけど…ん? 僕は一 卷出た時点で買つたよ。だつてあの葵せ○なさんの作品だぜ? 面白 くないとかアリエナーライ。生徒会の一存の作者さんだぞ? 白骨化し ていたとかもう帰つてこないとか頭から離れんよ…誰もあんなもん 作れないと思うのよ。他にない良さがあるんだよねえ…だからあの 作者さんの作品つてなつたらチエックはする。んでんでんで、にやあ んで…君が好きだと叫びたいのはスラムダンクよ? いわずもがなだ

よ。喜界島もがなだよ。それはめだかボツクスか：。  
ちやん可愛くない？今はどうでもいい？  
でも喜界島

(一・ω・) シヨボンヌ

「あ、じやあみいこさん俺ティーセットアールグレイ、チーズケーキで  
お願ひします。」

「ふふ、はーい！ 承りました！」

「十三ヶと注文したあ！」

「自然すぎるけど、不自然すぎるダイミング!!」

「アーラクレイ…そこは心細なアーリジンを選ぶと思ってたぞ！」

貴方はこの格言を知ってるかしら？『我が行くは恩讐の彼方

7

「万歳」ハニ川・シヤトロ・テニー！】

『虎よ 煙々と燃え盛れ』でも正解がよ。

飞  
?

「意味などないわ！ 感じるままに感じろ！ 待て、しかして希望せよ！」

「！」

ダージリンですからね…格言なんて意味あるのかないのかは微妙

などこでしょ？そんな事に意味はあるのかな？

… 外一様とミカニで似たところあるよねー？ 乗ってるのにはチャーチルと BT-42 と共に通点はねえぞい！ どこか天然なところのあるリー ダーって言う観点だけやけどね？

そして榎は自分でネタ振つてきたけど今日も中々冴えたツツコミ…ん？まだ前話から日付変わつてない？メタイねえ。君、実にプロミス…メタイよ！もうね、マスターソードでブンブンとネギ振りしちゃうくらい初音ミクやでえー！え？そこメタナイトちやうんかい!!つて？なんでそんな言葉を…。また関西人カブレがしたいのか、あんた達は！

「はあい、こちらアールグレイになります。」

そういうと目の前にそつと置かれたティーカップ。みいこさんはサラッと普通に置いたけど…ティーカップに波紋一つ立つていつた。…波紋で反応したい欲は抑え付け、匂いを嗅いでみるとスウっと脳にまで響き渡るような感覚に陥る。イイ香りだつた…。これはまさしくアールグレイみたいな香りがp n p nするぜえー！（イイ香りすぎて元ネタの表現はどうしてもしたくなかった。）

芸人の風上にも置けない…だから風下に置いてくれ…。  
でも…おれは…俺は…芸人でありたいんだあーーー！

「この上品な香り！これがブルーマウンテンかー」

「アールグレイですかね？」

「この酸味…キリマンジャロだね」

「頼んだのアールグレイですかね？」

「安心する味！これイン…」

「……。(じー)

「どつても美味しいアールグレイです。香りも引き立つて茶葉が程よく開いていて、開きすぎた苦味もなく薄くなってしまうこともなく！凄く美味しいです！（インスタントなんて言えるわけねえだろうがアアアアアアアア!!）

ふ…風下どころか川下にでも流してくれよ…。

あーあー川の流れのように…緩やかに死に行く人生でありたかつた…。いやね？ 美味しすぎてネタにするのも憚れるのよ…。コーヒーの方が好きな自分でさえ通い詰めたくなるぐらいに美味しいかつたんだよね！

「ふふふ、ありがとうございます。」

「いえいえ、こちらこそ美味しいアールグレイ御馳走様でした。毎日

でも飲みたい位でした

「なんなら、毎日淹れましょーか？」

「なら毎日通いますよ。」

「うふふふ」

「あははは」

俺とみいこさんは和やかな雰囲気の中互いに微笑み合う。何者にもどらわれぬまま、温かな雰囲気に流れながら良い笑顔をしている。…さらっとみいこさんが俺の心の内を読んだのにはスルーするとして、ね…。

あと、外野静かだね？心愛ちゃんの真似したらツッコミ来ると思つたんだけど予想外ダツタヨー。

「…うん？」

「ありや？」

「……。」

「サラッとタイトルの伏線回収したな…あれは。」

「あーなるほど…お味噌汁か。」

「「伊御（くん）（さん）が鈍くない!?」」

「さらつとなんか驚かれた!!」

味噌汁にアールグレイは合わんよ？DOKIDOKIディスクは関係ないつたらない！二個二個動画で夏と冬のコミケ前のラジオが楽しみとかそんなことないんだあー！

で…話を戻すけど、アレはシン・アスカの真似してたんだよ。え？ 何処だよつて？

トミ（力）、明星（会エスマラルダ）、ちから（のたね）…この世の全てを手に入れた男模倣王ゴールドミュー彼の死に際に放つた一言は極一部の読者様を冒頭へと駆り立てた。

俺のモノマネか？知りたきや教えてやるぜ探してみろこの話の何処かに置いてきた

世はまさに大後悔時代！

つていう訳で探しても得にはならんよ。それでも知りたいならみ



俺に効く

「これで大丈夫かしら？」

「全然大丈夫です、ありがとうございます。」

「うふふ、気にしなくてもいいのよ。それに頼んだのは私だもの。」

「あれは頼まれたって言うんですかね？自分からだと思うんですけど

⋮」

「あれ？もしかしてアレって心結のこと？」

榊が何か言いかけたと思つたら榊が：

アイツは白目を向きながらくらりと体を傾かせると立て直す事もせずそのまま膝から崩れ落ち、倒れた。

俺たちは何があつたのかわからず困惑した。一瞬影が見えたような気もするが視認したというよりもそんな気がしたという物で何とも言えない。

もしかしたら見えてたのではと少しの期待を込めてミニワンに視線を送ると…ミニワンもまた同じような表情をしていた。

あ“つ…！この川、深い…！?

ちやうね。

この感じたぶん向こうも同じ光景を目撃したのだろう…と言う事はあれは残像…？速すぎて残像すら残像つてもう何が何やら…

仕方ないので地面に崩れ落ちてている榊を肩に担ぎ…高くジャンプ！筋肉うバスタアアー！

もちろんしないよ？

普通に肩を貸し、伊御くんに案内されながら隣に置きっぱなしにしてた榊の荷物（あつ、榊が荷物じゃないからね？勘違いは禁物だよん？）を持ってバックヤードに運ぶ。

「お客様なのに荷物持たせて悪い」

「ん？あー、そつか伊御くんは知らないのか。別に自分から榊を手伝つただけだからね、気に知ることないよ。それに、こんな楽しい経

験つてあんまり…あんまり出来ない？し…」

「そこなんで疑問系なんだ？急に自信無くなつたみたいだつたけど」「いやね？前の学校もかなりぶつ飛んでたから珍しくないのかもしれないなあつて気がしちやつてさー

あはは、飴ちゃん吹き飛ばす破壊兵器な妹ちゃんとビビリなあまり机から出られない後輩ちゃんとか妖怪探知機な同級生とか居たら自分の常識疑つちやつたんだよねえ～変な事なんて何にもないのにおかしいね！」

「確実にそれはおかしいだろ…」

「…えつ!?どこが!？」

「前の学校で何があつたら人外魔境に早変わりするんだ!?」

「全部妖怪のせいだよ！」

「それで片付けていいレベルじやなくないか!?」

でも残念ながら全部妖怪のせいだつたりするので否定できないのが辛い。言われて気づいたけどやつぱりクラスメイト変だつた！そ удよね：演劇やるからつて女装強制つてやつぱりおかしいよね：？（そこだけじゃない！）

今地の文でツツコミ入らなかつた？気のせい？ならそうなんだろう、お前の中ではな！

ゴミ箱から失礼しちやうようなクラスメイトだしそこはもう…いいか。いいクラスメイトだつたけどヅれてたんね。ズラがヅれた校長だつたけど…ヅラじやないカツラだ！

「…榊ここに寝かせとけばいい？」

「せめてイスに置いてあげないか？そこ思いつきり床だぞ…」

「ジョーク！」

「それジョーク！」

「大丈夫！しまつてないから！チョークスリー。パーだつて問題ないよ

ね！」

「愛さえあれば問題ないみたいに言つてるけど一応怪我人（？）だか

ら

「あーい！」

くだらないやり取りで笑い合う俺と伊御くん。

特に意味なんてないやりとりだが、それでも俺の中では何かが満たされるような気がした。まあ、所詮感覚的物で目には見えないんだけどね～。

「じゃあ、俺は仕事に戻るから」

「うん、お勤めご苦労様だよ。俺も姫ちゃん達のところ戻るよ若者よ、頑張りんしゃい」

「あはは、なんだそれ」

「なんだろうね？」

「分かつてないのか。」

「そんなの気分だからね、それじや引き止めるのも悪いから今度こそ頑張つてね」

「ああ」

伊御くんの背中、仕事の出来るお父さんみたいな背中やなあ～なんて冗談めかして心で呟くとよっこらせ！と声を出し立ち上がるとハク達のいる喫茶店の方に歩き出した。

## 19 話題があつちこつち

回レ回レ回レ回レ回レ回レ回レ回レ回レ回レ回レ！

髪も振り乱されて〜

え？歌詞転載？なあにソレえ意味わかんないよお〜

だつて回レ10回だから違うし！振り乱すじやなくて振り乱されてるからちやうし！

あと、回つてるのは肩に乗つてるハクがプロペラヨロシク扇風機と化した野獸（の尻尾）先輩で俺の後ろ髪が貞子並に前に垂れて来ちやつてる現状を詳しく説明してるだけだし！招き猫ダックだし！

AFLAC！

え？ JASRACだつけ？

あ、こらそこのちびっ子！俺はライオンさんじやないぞ！あと人に指差す行為は褒められた物じゃないからやめようね。

そりや髪の毛四方八方ブワーしてるけど、ライオンさんじやないのか！ナツツ！

…あ、これはREBORNのツナのライオンのBOX兵器のナツツとアメリカの俗語のNut's！をかけたんだよ。Nut'sつていうのはラインの守り作戦でドイツ軍に対して馬鹿野郎！つて返してえ？つまらない？桃はせつかち…じゃねえや、ホモはせつかちだもんね！ランボ（心結だけど）さんは大人だからそれ位なら待つてやれるけどね!!ランボはREBORNにはかかつてるけどライオンじやなくて牛だからそつちにはかかつてねえけどな！

ちびっ子がこつちを見てライオンさんライオンさんつてママさんに言つてるのが微笑ましい。

ママさんの方もこつちを見てごめんなさいね？と言わんばかりに片目を閉じて手を合わせるジェスチャーをしてる。なんというか若々しい奥さんだね？

よおし、気分が乗つた！やあつてやるやつてやるやあつてやるぜ

！  
ちびっ子にチョイチョイと見てるよ？と合図すると俺は渾身のモ

ノマネを披露する！出血大サービスつて奴だね！貧血で倒れちゃう！

「グルオーウオオウ!!（最後ら辺低く唸るようにするのがコツ）」

ちびつ子が呆然としていた。いや、この場にいる全員が、だ。  
やつちまつたあー！下手こいたゞでけでんでけでんでけでん：  
ぴいや！

‥。スベリ芸すら出来るぐらいには平氣だつたわ。メンタル硬  
かつたわ。硬度10だつたわ。ダイヤモンド不愉快だつたわー。碎  
け得ぬ闇に鋼の意志でした：なんでや！システムU—Dは関係ない  
やろ！ラストアタックを命を捨ててまで取りに行く見苦しさは正直  
ナイワー。夜間ゲームはナイター。喫煙具と作家はライター。変身  
するのは仮面ライダー。

‥‥‥。

何故私がしつこく天丼的ネタに走るのか、何故  
こうも文字数だけが加算でいくのかア！

それ以上ゆーなー

その答えはただ1つ：

ヤメロオー

アツハイ！

‥‥‥。

真実は割と迷宮入り！迷探偵ミ Yun

なんか色々ごめんね？お付き合いありがとうね？

後半に至つてはネタにキレがないからつて誤魔化してごめんね？  
物語の進みが遅くてごめんね？つて、この物語の偉い人が言つてた！  
主に愚作者が謝罪会見で泣きながら貴方には分からぬでしようね  
！つて開き直りオルガ（愚か）に言つてたからキボウノハナーの餌食  
にしといた！心結偉い？

でもオルガ、読者が止まらねえ限りその先にいるぞ！だからよ、（更  
新）止まるんじやねえぞ‥

だとかなんとか！エタリかけで何言つてんだろう感拭えないよねえ（グフウツ!!作者はブルーバツクにはなりません。インムはイヤア!!）

「…あ…。

お母さん！ライオンさん!!ライオンさんだつたよ！」

「…え、ええ。そうね…？」

目をパチクリする奥さん。昔やつてたキヨロちゃんのアニメで確かにパチクリくんつていなかつたつけ？ほらソニックみたいなカラーノ…え？お前何歳だよつて？

んなモンケーブルテレビの再放送に決まつてんだろ！  
キヨロ缶欲しさにチョコボールいっぱい買つて銀が一枚だけ足りなかつたのは懐かしい思い出だよ…

ピーナツツとキャラメル…凄く美味しかつたよね！だが、いちご味、お前だけは容赦しねえ！…ワルサーは二丁もいらねえんだよ。  
いや、別にいちご味に恨みは無いけどさ。あれだけなんか普通だつたからさ…あれつてチョコボールである必要あるのかなつて…あーはいはい。私の好き嫌いですよーつだ！

あ、そういうソニックさん映画化おめでとうございます。アニメも昔やつてなかつたつけ？マジモンのレーサーを…自慢の脚で打ち負かすのやめれ

…つてチョコボールの話からどんだけ掘り下げるんだよ…

この状況、どうしましようかねえ

うむ、一人動物園でもやればいいかな。…自分いいすか？

今何でもするつて…言つてないね！

あ、そうそう。アレからね、戻つて駄弁つて普通にお茶してハク回収。いい時間だからつてお開きになつたよ。

後はそうだね…みいこさんからバイトの募集を受けたよ。その場で保留にしたけど…

そういうや、伊御くんがミニワンのメイド服を想像して松浦果南したいと公言してた。おい、誰だ松浦果南と書いてハグと読むとか言い出

した奴！作者だよ！まったく、どうしようもねえな！まあ、作者だし是非もナイヨネ！

考えておくとは言つたけどお自分、カフェでコーヒーをサイフォンで入れたりラティアートでゲルニカ作つたことある程度だよ？あとは仕込みの手伝いとバーインダーになつた程度だからなあ…え？何処のカフェ？そりやラビット…ゲーフンゲフン

既にアンゴラウサギ師匠に教わつた技術は全部吸収済みさ！（キリツ

うさぎの娘さんにお兄ちゃんと言われたり、お店の店員さん仕込の宇宙のつかないガチなCQCとか、弾丸逸し、ビリヤードなんていうのはお手の物よ！さて、これで問題が全く無いことに気付いてしまつたわけだが…どないしましょ？まあ、落ち着いてから考えるとしよう。

えー…もつと戻つたときの事掘り下げろよ？やだよめんどい。オコトワリシマス！

えー…じゃあ詳しく述べと作者がゴミだから場面を無理矢理にも進めないと進行出来ないからだ！

ドーモ読者サン、メタ（な）モンです

はいはい、ラビットハウス云々は勿論嘘ですよ

なわけ無いでしょー？この作品にクロスオーバータグ付いてないでしょー…え？番外編？何それ僕シラヌイ。

何か落ち度でも？

…でもいつか出てきそうだよね、本編に絡んでくるであろうクロス作品キヤラクター…うん、電波受信したわ。オールナイト全時空エバーグリーンだわ。主のゲーム関連だわ。

エバグリつていうと…あの作品つて学園内に忍とか超能力者とか色々出てくるけどウチの高校は大丈夫だよね？前の学校ですら妖怪が跋扈してたけど…大丈夫だよね？

私、気になります。

えー…現実逃避はやめにしましょ…だれも頭皮の話はしてねえよ！反応すんなハゲ！違うだろ、違うだろおうー!!この、ハゲえー!!

勘違い系ヒステリック政治家の話はまた今度に…どちらかつて言うと絶叫系号泣会見政治家の方が好きです。

誰だつて？ マンマやろ？ マンマ Me や！

はつ！俺だつたのか！

ちやいますねー、インド式ミルクティーはチャイですねー

チャイは苦手なんだけどねー

そして、ハクさんご機嫌な様子で現在進行形でプロペラしてるね：

おいかけの効果で速度上がつちやうよ？

まあ、ポケモンは正直2とかウルトラとか付けてそれっぽくしてるけど蓋を開ければ前作と被りまくつてるせいでやる気完全に削がれちやう奴だ。

ポケモンは既に底が見え始めてる感強いね。

それが悪いとは言わないけど、追加パツチレベルの物でしつかりと金取つてる時点で子供向けをうたつちやいけねえよな？

子供に大人の事情巻き込むなつていう気持ちが強いよ？

…また脱線しちゃつたよ。新幹線なら大事故だね！ワタクシで隠さなきや！べ、別に中国デイスつてねえです。いざなたん可愛い。しつぽモフリたい。

…ん？風が止んだ？

ハクのプロペラはぴたつとハウス：おつと失礼、ぴたつと静止したと思えば今度は見せつけるように顔の前で上下にユサユサと揺らされる。

これで我慢しておけという事だろうか？…いや、馬鹿言つてないで現実を見る、これが真実だとでも言つてるのだろう。今だけは聴きたくないよ：悲しい歌。

なんか、もうこれでも良いかねえ…そつとハクの尻尾を鷲掴みに…した時点でマルカジリされるから持ち上げるように両手で掬い上げ、その感触を楽しむ。モフモフッ！、フウーモツフ！モツフ！

心愛ちゃん、古泉一樹、ボン太君の物真似を心の中でしながら癒されました。感触を楽しむつてなんか響きが変態っぽいよね。

「へぶつ!？」

ハクさんからの久しぶりのツツコミ入りましたー。尻尾でおでこをベチンされましたー。

もつふもふです。幸せです。ご褒美です！

( ̄・̄・̄ ) どやあ

なんでドヤ顔なんだろうね…？

うん、取り敢えず餅突こう。ペツタンペツタンペツタンコお！  
おい、誰が千早さんの話をした！赤城某十一歳に負けてるとかやめい！

そんなこと言つてると72さんが首をだせえいとかやつてきちゃうぞ。枕元に立たれてアズライイール！つて呼ばれるぞ！ご近所迷惑になつちやうからな!!

因みに俺は文字ピッタン聴きながら千早さん見て胸ペツタン咳いた日に夢の中にののワさんが現れた位でしたぜ  
ののワさんがチエーンソー片手にお家に突撃！お前が晩御飯してきてワイラガトマト投げ祭りの惨状を起す夢だよ！  
どうせだ。

その話をしよう、あれは丁度36万…いや、1万4,000年前だったか、まあいい。私にとつては昨日の出来事だ。

……

…本当にこれでいいのだろうか？いや、よくない！

1万年と2000年前だ!!間を取つて一億年と二千年後でも可！

いや、愛は叫ばないし音楽も流れない。地獄は…まあいい。そして、それは読者様にとつては十三日の金曜日の出来事だ。  
覚悟すると良い。それはもう既に君のすぐ近くに居る。

ノ ( ワ の の レ'し

どうかしたのか？

いきなり怖いわーなにか見たみたいな顔してるぞ…よく猫がやる動作ですわ。まったく…犬派の俺の対する宣戦布告だな？よろしい、ならば戦争だ！

最近拗れまくってる世界情勢にメスを入れてやるから待つときい！友人にも煽りが神がかつてるとお墨付きだから大丈夫だ、問題ない。手始めに北朝鮮のふりしてお米の国にケンカふつかけてくるからよお！

：おい、誰だ健全な物語の中でメスとかおすとか入れるとかかけるとかつていう話出した奴！

お兄さんそういうハレンチなのいけないと思います！

お前だろっていうツッコミありがとうございます。でもね、思つたんだ…これ、ギヤグやん？いろんなネタあるやん？でも唯一手を出してないネタがあつたねん。そう、それが下ネタや…。

気付いたときにはやらなやらな思いながら敬遠し続けてた…どうせだ、出来るときやらなきや男が廃るつてもんだ！別に、やらかしてしまつても構わんのだろう？

真の男っていうのは背中で語るんだよ。

龍が如くの桐生さんとかシティーハンターのリョウちゃん赤い英雄の弓兵とか白い髭の船長さんとか黒の兄妹の長兄にグレン団の団長、鉄華団の団長つてね！

だからよお、止まるんじやねえぞ…

脱線この上ないね！脱線事故のし過ぎでキボウノハナーですよ。

何やつてんだよ団長お！

ライドオ…断腸の思いでやつた、後悔はしていない。

馬鹿やつてんなよ団長お！

：そろそろ疲れてきたし、どうでもいいや  
そうだ、お家帰ろう。

おうちには桜の名所は流石にありません。  
予約するならお早めに、満開は結城友奈で  
今年の春は冬木の桜を見に行こう  
：作者は桜散った後に京都行つたらしいぜ

m 9 ( ^ Δ ^ ) プギヤー

収集つかへん：終わつていい？だめえ？

そして上着の袖をひっぱられるような感覚がして意識が戻された。  
コイツ、いつの間に！？

はい、阿呆やつてる間に視線の下より這い寄る混沌されてただけで  
すね分かります。

さつきの少年がキラツキラした目で見上げていた。どうしてそんなに大きくなつちやつたんですか？なんでやろなあ。牛乳飲んでき  
たからよ、ね？

心結さんマークの发声者！

「お兄さん他にも出来る？」

「ほつほくい：僕、アンポンタン！ピッカチュウ！ハハツ！」

凄い凄い！とはしゃぐ少年にほつこりしながらもネタに興じる。  
一つ一つのネタに食い付くリアクションに嬉しくなつてしまいつい  
つい大盤振る舞いしちやつたりしてるけどたまには良いよね。

その日、その街には凄い大道芸人が來たと噂となり本人の預かり知  
らぬ間に周知されるのだが当人にはその自覚はなく、ただ笑ってくれ

るから期待に答えてただけだしそこまでではないだろうと考え、別人  
だろうと高を括っていた。

その誤差が次第に大きくなりそのズレが自分に返ってくることに  
今は本人も、そして誰もが気付く事は出来なかつたのだつた

## 番外編 Non stop my way

事の始まりはとある一本の電話だつた。

ゴールデンウィークに一度実家に帰つた時の出来事。ソファの上で段々暑くなつてきてジツトリした日差しに辟易してエアコンの冷氣をこれでもかつていう程浴びていたら家の電話が鳴り響いた。

丁度父は久しぶりの休みということもあり母のご機嫌とり、もといお出かけだ。妹は部活。姉は大学でサークルで試合だとか…身内が血涙して慟哭しながらイヤイヤご学友の方に引っ張られていく姿とか見たくなかつた。思わず敬語で愚妹

そりや、滅多に帰つてこないけどそこまでか？

うん：あのやんやん姉妹なら別に奇行に走るのはいつもだわ。俺が第一こんなんだし、血のつながつた姉妹がアレでもアレだわ。うん、アレだよアレ。

アレはアレだ、ちょっとは自分で考えろよおー。

んで、電話に出た訳ですよ。え？ 説明？ んなもん読者なら知つてるでしょ？ 投げっぱなしシャーマンよ。あ、別にM4は関係ないぞー米国戦車じやないんだからー

「もしもし、此方はお留守番電話サービスカスタマーセンターです。」「あら？ 間違えちゃつたかしら？ もう一度かけなおしてみましょウ」  
「ツツツ…

うん、まさか本当に騙されるとは思つてなかつた。似せたけど…もしもしつて最初言つちやつてるし気付いてくれると思つたんだけど…なんか罪悪感がつ！

そして、直ぐにかかる電話。うん、真面目に出よう。純粹な子を騙すと胸が…高鳴るね！ うん、アタイつたらサディストね！ ⑨はさるのだね！

冗談は三分の一の純情な悪戯心という感情の残りの三分の二だけにする。いや、冗談辞めろとかいうのは…無理だから。マグロだつて泳ぐの辞めたら止まるでしょ？ 止まるんじやねえぞ…するでしょ？ キボウノハナーですよ？

それと一緒に。魂レベルに刻まれちゃつてるから…自分の道に外れたら戦車が泣くでしょ。今、戦車関係ないけどさ。ここでサンダース回収するんかーい！ってツツコミ入れた貴方はきっと作者と話が合うだろうね。うん、完全に他人事だけどねー

「はい字図です」

結局真面目に、出るんかーい！

失礼かなつて、妹か姉の友達だろうし適当に相手したら監禁されかねない：厳密には軟禁？どつちにしろ笑えんから！あ？読者は笑える？それなんていう愉悦？麻婆流し込むぞオラア！

「あ、良かつたわ！お父さんに教えて貰つて電話かけて頂きました弦巻です。」

「弦巻さんのお父さん？…あ、もしかして父にご用件ですか」

どうやら彼女自身が用事があつた訳じやなかつたようだ。それだと弦巻さんの要件があるのは母さんか父さんになる。まあ、十中八九そんな父さんに決まつてる。仕事関係だろう：役者というのは忙しいんだろうね。家ではペットの猫にも負ける家庭内地位で下の下だというのに…

え？なんでかつて？うん、全部父さんが悪いからどうしようもない。

4月1日が結婚記念日なんだけどエイプリルフールでもあり、笑えない嘘ついて母、姉、妹に嫌われた。デリカシーがなき過ぎた嘘は流石にちよつと…まあ、自分は母に付くでも父に付くでもなくあくまで第三者として仲を取り持つたんだが…うん、離婚一步手前に発展する嘘をついた父に人権はないという事だろう。

「…貴方の声何処かで聞いたことあるような気がするのよねどこだったかしら？」

と、言われた。いや、会つた事はない。てか結局父に用事なのかも答えてくれてない。さてはオメエ、アンチだな？

アンチじやないけど、周り巻き込むタイプの人間だな。同じタイプ

だから分かるわあ。川島さんにあらずだけど、波長とでも言えばいいのかこつち側の人間だなってなんとなく察する事ができた。

これは…!?

なにかが起きるな。京谷が野垂れ死んでないか心配になる。だって映画とかだったら真っ先に死にそうな感じがするんだよなあ…京谷。あとで生存確認のためにメールでも入れとこ

「まあいいわ！それで連絡入れさせて貰つたのは…文化祭のゲストのお話をしたかったのだけど不在ならしかたないわね。」

「なるほど…確かに父は俳優ですし理解いたしました。なら帰つてきたら弦巻さんから連絡があつた事を伝えて折返しかけさせますよ？」

「…ううん、貴方の声やつぱり聞いた事あるわ！貴方はえーっと

「あ、宇図心結です。」

「心結ね！私はこころ、弦巻こころよ。よろしくね！」

「ア、ハイ。よろしくお願ひします？」

なんだろう…この人俺よりゴーイングマイウェイだ。嫌いじやないわこういう強引だけど率先力あるカリスマタイプ。うむ、気に入つたわ。

それになんていうんだろう、この子どもの子でも仲良くなつてそう。なんか野に放つたら氣付いたら群れの真ん中で立つてそう…。力強い感じかな？

「心結は年齢いくつなの？」

「高1ですよ、そういう弦巻さんはいくつなんですか？」

「へえ！私も同じよ。花咲川女子学園の高校1年。だから敬語なんかいらないわ普通に話してくれて構わないわ！その方が仲良くなれるわよ」

…正直声だけだと判断しづらいからなんとも言えなかつたがてつきり中学生位だと思つてた。妹と同じぐらいなのかと勘違いしてた。

元気でわーって感じなのと声が幼そうに思えたからね。まあ、判断材料少ないから結局はイメージだけど。そして、向こうの了承も得たからこつからは素で対応していいみたいだね。父さんのお客様つてことで改まつた敬語使つてたけど最早、お前は誰だ！俺の中の俺！とか言いたい気分だつたからね！キャラ崩壊し過ぎて世界から俺という存在が抹消されて人理崩壊するレベルだよ。ウムウム、これこそ俺だわ。

「ん~じやあ、敬語は抜いていつも通り話させてもらうね? こころはどうしてウチに電話を? 父さんに用事らしいけど…」

「そうだったわ！花咲川の文化祭のクエストで誰を呼ぼうって話を学園長さんに聞かされて、知り合いは居ないって聞かれたんだけど、正直有名人の友達って言われてもパツと思い浮かばなくて父さまに相談したら心結のお父さんを紹介されたのよ！それで連絡したの」

「なるほど 学祭かあ 分かった。この人のお父さんと父さんか知り合  
いつて事らしいし折返し電話入れさせるよ。」

そう言い終え、電話を切ろうと耳を離そうとしたその時だつた。微かな息遣いを耳が捉えた。はつとしたようなその息遣いだけが何故か耳に異様に残る。：：幾らかの逡巡をするよりも速く耳だけは離すべきだつた。だが、もうこの時には遅かつた。

あとミミガーネタは何番煎じだろうね。

：じやなくて、耳が吹き飛ぶんじやないかというレベルの大絶叫だつた。音響兵器、デアラの美九、もうそんなレベルの音による衝撃波が耳をダイレクトアタック。やめて、俺のライフはもうゼロよ！

大丈夫だよね？血出でないよね？鼓膜が処女膜が如くやべ…え？

デデーン、心結アウトー！

一ガブ

ハクよ、お前何処から……そしてケツ噛むな。離して……踏んだり蹴つたりだよ！チツクショオ

耳元からグググ…といった耳鳴りがするような気もするがまあい。痙攣してるような気もするけど置いておく。

「何処かで聞いたことあるつて思つてたけど分かつたわ！心結、貴方  
m. o. n. さんね!!」  
「よく分かつたね、俺はm. o. n. :無音ことミユートであつてる  
よ。」

スツキリしたわ！…とでも言うような天真爛漫さを受話器の向こうで感じる。きっと悪気は無いのだろう。だけど電話で大声は危険なので気をつけてね。…とは、今のこころのはしゃぎようからは言い出せなかつた。すまぬ…いつか犠牲になる誰かよ…ワシにはこころの楽しそうな様子に水を指すことなどできなんだ…怨むなら予測できなかつた自分を恨んでくれ。なあに、俺も同じ目にあつたさ。お前より先に俺の屍はいるぞ！だからよお…止まるんじやねえぞ…：

うん、耳鳴り収まつたわ。え？人間辞めてる？お前、人間じやねえ  
！

それこそ今更つしょ！今夜は焼き肉つしょ！

ウダウダやつてる間にこころはヒートアップしてた。色々と凄い。勢いが凄い。誰だー、こころ蒸氣機関車に石炭突つ込むとこにガソリンハイオク満タンばら撒いたのー、先生怒らんから正直に手を上げなさい。

：私だ。おm…いや、もうこのクダリいいわ。うん、そろそろ他のネタ仕入れねば（鋼の意思）

「決めたわ！」

「では、注文お伺いします。」

「心結、貴方よ。」

「こちら非売品となつております。」

「なら店ごと飼いとるわ！」

「ファンタッステイツク！」

ゴージャスいいよね。それと、買うと飼うをかけるなんて高尚（交渉）なネタ突っ込んでくるなんてやるなこころ！

それと人一人飼うとか辞めて！店買えちやう人が言うと冗談に聞こえない！犯罪臭!!

「どうと？こころ、次はどうする？次は何をやればいい。次はどんなワクワクすることを見せてくれるんだ」

「ふふふ、貴方もワクワクが止まらなくなる事を望んでいるのね！なら私についてきなさい！私にいい考えがあるわ！」

「Y e s, m y l o r d. お心のままに」

うむ、オルフェンズにギアスの返答でも反応なしなど見るとそういつたアニメの知識は無さそうだね。まあ、ロボットアニメだし女の子だと興味無いのは普通か。それと、女性だからY e s, m a m だろうとかいうの無しな？ギアスのネタだから。

それからは真面目なお話になつちやつたから総カットでいいよねえ。色々予定詰めてただけだからね、報告いる？後で全部分かるから必要には駆られないけど。

真面目な話をする俺とか最早キヤラ崩壊だろオ（巻き舌）  
画して心結とこころの出会いはこうして一先ず幕を…降ろさない  
んだよなあ、これが！

アクセル・アルマーの真似だけど分かりづらい？大丈夫！コレ無限のフロンティアの方のアクセルさんだから！分からなくてジャガーになつても！

皆さん、わたしのネタでジャガーになつてもスナネコにはならないで下さい！前田熱盛い！失礼、思わず熱盛にしてしまいました。あ、敦子とアツコ、小文字にするだけで大御所に変わるね！どうでもいいね！飽きた！

そして別れを告げたこころは電話を切る。

因みにそのまま京谷に電凸。残念京谷は生きていた。ふざけてさてはオメエゾンビだな？って言つたら力ユウマつて言つたから夏場にお粥食うとか勇者だなつて返しツツコミを貰う。満足したからそのまま切つた。なんか折返しの電話があつたがなんとなく話が読めてるのでドライブモードに切り替えておいた。きっと向こうで微妙な顔をしているに違いない。それをほくそ笑む俺は性格悪いなあと思いつつお土産はちよつと奮発する決意を決めたのでしたー。

あ、m・o・n・つていうのは俺の youtubeネームね？ m.  
o・n・||無音、無音||ミュート、ミュート||心結

宇図つていう図式よ。

という訳で俺はユーチューバーだつたのだけあつさり暴露するスタイルなのよ、わい。

その電話から翌日、事件は起こつた。

朝6時頃に懐かしい（と言つても数カ月前まで普通に生活してた）道でのハクとの散歩をスマホで撮り終えた帰り道の事。

不幸にも黒塗りの高級車が目の前に止まる。

追突はしていない。てか、生身でやつたらただの人身事故だよ。いや、確かに事件だけどそうじやない！

黒塗りの高級車からグラサンにスーツをビシツと決めた人達がガチャツという音と共に現れる。助手席と左側面のドアが同時に開き直ぐ様スチャという金属音に揃つた綺麗な動きで構えられる。その人達の腕には：銃が握られている。

俺は直ぐに察した。

そして、反射的にその人達から庇うようにハクを抱き抱える。

一ダダダダダ

そんな音を耳にし収まると俺はそのまま身を翻し右手の小指、薬指、中指を握りそれを受け、雄叫びを上げる。

——才才おお！」

その人達の一人が開いたドアの中に倒れる。慌てた様子で、その仲間達は車に入るとキュルルルルルルという音を上げながら急発進させ路地裏に消えた。

「だからよお、止まるんじやねえぞ…」

人差し指を上に掲げ、地面に倒れ伏したのだつた。

• • • • •

うん  
スツキリ

ここまでやらせてもらえるなんてね!

少し離れた所から拍手を貰う。

少し離れた所から拍手を貰う。あの路地を曲がりに曲がり見えぬところでわざわざ回り込んで後ろに止まつて黒い高級車の前に立つスーツの女性達が拍手してくれていた。誰だか知らないけど人生一度はやつてみたいシチュエーションが出来たので大満足です!!心結、感激!!感無量です!!ありがとうございます!これだけ好き勝手やつて俺たち何一つ事前の打ち合わせ無しなんだぜ?何やつてんだ、心結う!・つて感じだわ。

車のドアが再び開くとそこから金髪の女の子が飛び出してくる。うむ、誰だろ？知らない人です。

全力で少年ように目を輝かせる彼女。うん少年じゃなくて少女だろとか言う野暮なツッコミはいらん。この寸劇を甚く感激してくれているのだろう。うむ、全力で応えただけあるよ！

…あれ？前回そんなことした気が…木のせいだよね。全部キジムナーのしわざ。それ木の精やーん！

それから黒服さん達と金髪さんが此方へとやつて來た。珍しくハクは威嚇しない。害意を持つてないからだろう。ハク、慣れてない人から撫でられそうになつても威嚇するからね…。俺に撫でてもいいか聞いてきた人と慣れてる人じやないと威嚇するからね…。

すると、待ちきれないという様子だった金髪さんが此方に駆け寄つてくるとタックルをしてきた。唐突う！

ゴフツツという声と息がお腹から押し出された。容赦ない一撃だつた。ジャンピングタックルだね！青空ジャンピングタックル！

俺の体に身を預け、張り付いたままの金髪娘さんがガバリと顔を上げる。身長差とくつついてるせいで彼女に上目遣いされてるようだね。うん、人懐っこい大型犬みたいだと思つたけど声には出さなかつた。

「初めまして！私はこころよ。よろしくね、心結!!」

元気一杯、先日の電話の相手弦巻こころと同じ名前だなあとか電話で聞いた声と一致するとか色々思考が追い付かなくて混乱してるらしく、何故か真面目に考察始めてる脳みそに感謝の念と謝辞を贈る。だつて、女の子がゼロ距離で抱きついてくるんだぜ？つまり…察しながらいよ、ばか！

通常状態なら小躍り（スリラー）でも踊り出しそうだが、混乱脳みそさんのお陰でそんな事考えられないんだから俺の理性脳みそさんマジ有能。正だか梵字じやないぞー！

「うんよろしく、こころ。でも、初対面で抱き着く物じやないぞ？それには合つてたからいいけど間違ひだつたら迷惑（なわけない）か

けるかも知れないから気をつけようね？」

「はーい、分かつたわ！」

すごくいい返事！でも、たぶんこれ分かつてないときの返答だわ。いや、初対面で何言つてんだ、貴様にサンが救えるか！って所なんだけどさ。

サンは救えないけどFGOでハサンは救つたよ（ドヤア）  
因みに抱きついたままだとご近所さんの噂になつて家族に根掘り葉掘りされるので早々に離れてもらつたよ！

黒服さん達がそのタイミングで近づいて来てこころにバレない程度の声で私達が既に確認を取つていた為にお止めしなかつたのです。と言つていた。え？なんで俺は聞こえたか？ご都合主義つて奴ですエ：

しかしアポ無しで来る行動力に昨日の今日だぞ…一体この人達何者だ：有能過ぎ、俺の脳みそ並み！ついうのは失礼だね。うちにも欲しいぐらいだ、主にあのシスターズの抑止力に。シスターズの抑止力とかいうとアクセロリータ…おつと失礼アセロラさんみたいだね。アクセラレータだつたつけ？禁書目録は二期と映画見てから時間たち過ぎてて忘れちやつてるわ。それと今更感溢れる三期おめでとうございます…とても言うと思つたか。言うと思つてた皆様にはバカめと言つて差し上げますわ。

俺は高雄さんに膝枕されたい（断言）。でもアズレンの高雄さんに懐刀になつてほしい。てかアズレンは重桜の子みんな可愛いすぎな

!!

ふう：

で、なんだつけ？

「そうだつたわ！心結、貴方に話があるの！

それで時間も惜しいから先ず車に乗つて頂戴！移動しながら話す

わ

「わーい、リムジンだー」

思考が追いつかない。移動つて何処に？うん、先ず家に連絡させてくれとは思ったが言おうとした時には待ちきれない様子のこころに手を引かれドナドナされていた。くつ、意外と子柄な女の子なのに力が強い。心結連れ去られちゃう！嫌なのにでも感じちゃうビクンビクン

うん、キモい。客観的に見てキモい。普通にキモい。死んだほうがいいね。

お巫山戯してたらリムジンに載せられたでゴザル。黒服さんがドア閉じてくれた。凄い！VIP感！

リムジンのイス柔らかい！人を駄目にしそう！

色々と言わなきやいけない事あつた気がするけど全部境界の彼方だわ。え、それを言うなら空？

空の境界は関係ないよ？

あ、そうそう。電話だつたわ

「少し家族に電話するけどいい？」

「ええ、時間はあるもの」

…え、あるの？さつき無いって…あ、惜しいって言つただけか。それ結局時間押してるから時間無いんじゃ…とか言いたい事あるけど取り敢えず電話だけしちゃおう。待たせるのもアレだし…

家の電話にかけるとプルプルプルという音がする。（ワンピースのデンデンムシじゃない）

だが、本来鳴る音の途中で切れた。

ブルp…ガチャつて感じ。

まさかのワンコールすら許さない速攻に驚かされたが気を取り直し要件だけ伝えとこう。

「もしもし、おにい！おにいだよね。おにいしかありえないもん。おにい、何？用事だよね？私にお願いしたい事？うん何でも言って！お

にいの為ならおかげのお供にエッチな写真でも撮るよ！」

「……。」

ヤバい。今すぐ切りたい。電話も縁も…

兄として言いたい。こんな妹は嫌だ。

「んもう、照れちゃつて／＼私とおにいは切つても切れない関係じやない」

ただの兄と妹の関係です。

「母さんに伝えといて欲しいんだけど…」

「私と話してるので別の女の話…うん、分かったわ。市役所で婚姻届取つてくるから印鑑押して欲しいって事ね！」

別の女つて…貴方の母です、そして俺の母です妹よ。すげえ一方的。これ拳ならリンチだわ。Y o u（俺からしたら『I』だけど）リンクだわ。

「違うからね？ちよつとリムジン乗せられてそのままどこか連れて行つてくれるらしいから帰り遅くなるかもだから宜しくってことだよ。」

そう言うと電話を切る。

下手に長引かせると妹があの手この手で長電話させようとしてくる。さつきのアレもその一手だ。

昔はあるのマシンガントークに付き合わされて酷い目にあつた。なんも手につかなくなるから時間をまるつと妹に奪われちゃうんだよ。

兄に甘えたがりで可愛いんだが兄離れが心配だよ

一段落ついたので一息つくと目の前のこころに向き直った。ワクワクが止まらないのに待つてくれたようでその様子は餌を前に

待てをさせられたワンコの様であると追記します。

つまり可愛い。

うん、俺が待て。色々おかしいのは割といつもだから気にしないでいい。こころは可愛いと思つたのはまあいい。そうじやなくて黒服のS Pさん達あ、S Pって言つてもゲーム機じゃないぞ？年代の事突つ込んだ奴、内には姉がいるだけ言つておこう。てか、それが答え。

S e c u r i t y p o l i c eでS P要人警護の人とでも言つたほうが分かりやすいかな？え？知つてる？豆知識的な言つたほうが頭良さそうに見えるでしょ？アホな事ばかりやつてると頭悪いって勘違いされそだからね！テコ入れつて奴さ、ハハツ！（まあ、黒服さん方が慌ただしくしてた。

あれれえ、心結分からんない。

とかふざけてたら黒服さんが焦つた様子のままガシツと肩を掴んだ。うむ力強い。流石S P、力が無くては大変なのだろう。

「心結様、い…今の説明だと誘拐された様に聞こえませんか!?」

言われて最初は何を言つているのだろうかと思つて振り返る。何を言つたかな？うん…ん？確か…そうだ「ちよつとりムジン乗せられてそのままどこか連れて行つてくれるらしいから帰り遅くなる」だ。とすると…

（強引に）リムジンに載せられて…連れて行つてくれる＝連れ去られる。とも解釈出来るね…。

…オチ付け、冷静になれ、Be koooolだ。

されど嫌な予感しかせずゆつたりと背中に冷たいものが流れた感覚だけ鋭敏に感じ取れた。

長い時間意識が飛んでたような気もするし、一瞬だつたかもしけない。今だつたら「一瞬の風になれ」の感想文が原稿用紙5枚出来上がる気がする。うん、何言つてんだろ。

「…………。今すぐ家に連絡入れます！」  
「お願いします」

黒服さん達も粟立つてゐる。そりやそうか、要人警護がまさかの誘拐とか立場逆転も良いところだ。不用意な一言でダイゴさん……失礼、大誤算だよね。別に今ダンバル渡されても困っちゃうよ……

大誤算だよね。別に今ダンバル渡されても困っちゃうよ…

所でダンバルとダンベルつて一瞬見間違えるよね！ダンベルよりアレイの方がカッコいいと思うから好きだけど。語感だけの違いだ

二十一

•  
•  
•

• • • • •

そして結論から言うとあと一歩でアウトだつた。

ね。 どうにか首の皮一枚で食い止められた それでも致死なんだにと

あと少し遅れてたら警察にお世話になる所だつた訳だが妹が姉連絡を入れたために早急に手を打たれそうになつたようだつた。あの姉の普段ポンコツな癖に一大事な時だけ異様に対応力高い所は昔から恐怖だつた。なんで誰にも言つたことない秘密解き明かしてるんだよ…。その過程でクリスタルスカルの在り処に辿り着いたとか抜かしたけどそっちの方がよっぽど大事だからね？インディーすら超える冒険者とか嬉しくない！しかも解き明かす内容が弟の秘密とか過程でヤベーアイ神秘解き明かす姉つてもうわつかんねえな！ヤンデレ妹に終末すら回避出来そうな生まれてくる世界を間違えた姉。正直ゴッドイーターの世界でもコンビニ行つてくるついでに救いそうだわ。

それとこれ以上は何があつたか聞かないでくれ。なんかすつごい疲れた。ドツと押し寄せて來た。例えるならアルコールしこたま撮取して次の日起きた時の二日酔いレベル。いや、ただのイメージだけ

どさ。

ふう・思わぬ出来事に冷や汗でベトベトだわ。

何もしてないのに疲れた。こんなに疲れたのは白雪を拾つた時以来かなあ…。

あ、白雪は実家の飼い猫の名前だぞ？誘拐じやありません！

ムツ！ 楽天カードマアーン！

10点のデキだ。赤点再試級の駄ギヤグだな。人生やり直しの来世に期待だわ。俺、生まれ変わつたら一騎当千の戦国武将の配下のその配偶者程度の人間に生まれ変わりたい。もしくは貝になりたい。出来ればシャコガイがいい。ヤコウガイでも可！

え？ 貝の要求の方が無駄に高価？ そんな日もあるさ。その質問に意味があるとは思えないなポロローン

俺と警察の方にそれとなく説明してくれて謝つてる姿はちと有能過ぎるような気もするけど、そんな黒服さん達は車内で気持ちぐつたりしてるように…いや、氣のせいだろう。出来る大人は凄いのである。社畜の皆様には頭が上がらない。俺は無理、日本で社畜やらされるぐらいならいつそ海外で働きたいって思うからね！ 賃金最悪、残業フル、サービス残業当たり前：

おーすごいすごい（棒）

うぜえ丸ご降臨!!

うん、脱線したわ。

えっと、それでなんだっけ？

「説明出来ず申し訳ないのですが、到着しましたので詳しいお話は中でさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「アツハイ」

黒服さん達が申し訳なさそうにしている姿にこつちの方が申し訳なかつた。さつきの騒動の原因完全に俺のせいだから…

むしろ警察への説明全て任せてしまつた事の方が申し訳ない。出たとこ勝負のいきあたりばつたりは当たり前。むしろバツチコイだ！

さあ、なんでも掛かつてこい!!

あ、屏風の虎を成敗してくれとか言うの無しな？俺は正直そんなん言われても一休さんみたいな知恵働かないから出てこない内に火炙りにして地獄絵図みたいな…これから毎日ゲルニカしようぜ！位しか取れる手段がないのだ。

奥さん、最善を尽くしたのですが焼き討ちしかもう方法は残つていなかのです…残念ですが…虎さんとは今夜でお別れとなつてしまます。力及ばずすいませんでしたつてなるぞ。

オイ！（キズ○アイボイス）

そういえばキズ○アイつて言えばバイオ実況の「あ” “あ” “あ” “あ” “あ” “あ” “あ” “あ”」つて叫ぶとこあるじやん？何処だよつて？「お前絶対許さねえかんなあ！」つて虫オバちゃんにキレる直前だよ。あ、オバちゃんはお化けとお婆ちゃんが掛かつてて…うん、説明いいや。

それで汚い叫びのシーンで衛宮切嗣が被さつて見えるんだけど俺だけかな？

…どうでもいいか。

そして着いたらしい場所はとてつもなくでっかいお屋敷でした。  
たぶんこころの家かな？

：お兄ちゃん初対面の男の子をお家に上げるように育てた覚えありますん!!

そもそもお兄ちゃんじやないし、育ててないからそんな記憶あつたら驚きです。貴方は最低です！

一パン!!

脳内にそんな音が聞こえた。

ごめん、違つた現実だつた。

目の前に広がる大豪邸の扉がぶつ壊れるんじやないかつて位に勢いよく開かれた音だつたみたい。

中から飛び出す女の子。ダウナーな雰囲気を纏っているのにその少女は一目散に此方に駆けてくる。まるで飼い主の帰りを待ちわびたワンコ…では無いな。どうやら疾走少女はおこなようだ。

少女、おこだよ！

最近のラノベっぽい…うん、完全な偏見だけどね

こころの前まで来ると問答無用に何も言わせずチヨツップ一つ。手慣れてる：叱る事に躊躇がなかつたのを見るところとの仲の良さというか距離感の近さを感じた。もやしこれが第六感！？

違いますね、ハイ。根暗な豆つこは関係なかつたねー

一通り叱り終えたのか、少女はこちらに向き直り腰から曲げ45度の角度のお辞儀をする。

綺麗なお辞儀だ…ここまで綺麗なお辞儀なんて卒業式本番位しか見る機会ないぞ!!さては少女、君黒服さん達の御同類だな!!

「どうやらこころが迷惑をおかけしたみたいで…」

「え？ もしかしてこころのお姉さん？」

幼馴染つて奴だとは思うけどもしかしてもしかするのかも？そんな感じでポカンとしながら問い合わせる。

ある種保護者となりつつある少女に察しつつ同情の念を抱いた。2こころ（謎な単位）ぐらいの俺ところ合わせるとめんどいぞ、たぶん。

「あ、自己紹介まだでしたね。奥沢美咲です。こころとは幼馴染なんです、よろしくお願ひしますね？」

「なるほど、保護者の方でしたか。私こういう者で此方名刺になります。もしよろしければアイドルやりませんか？」

「いや、そんな強面のプロデューサーみたいな挨拶されても困るんですけど…」

宇図心結？宇図つて…あ、もしかして

「はい、父の代理で來ました。（シレツと嘘）」

そこからはその嘘が信じられたようで何故か歯車が狂つたままスルスルと物事が進んでく。あ、俺が脱線させてないからか。あと、こころがイタズラを思い付いたようで何故か美咲さん（下の名前でいと言われたので）の勘違いを一切訂正しなかつた。

まあ、俺も自分がなんで呼ばれたのかも分かつてなかつたし、彼女に任せとけば滞り無く進行する為にまあいかと流し続けていた。べ、別にめんどくさかつたとかじや無いんだからね!!

勘違いしないでよね！その手腕に見惚れてたとかじや無いんだから!!作者的にもそんな腕が欲しいとか思つてるんだろうなあとがメタイ事考えてるんだからね!!

結論、美咲さんのおかげで文化祭のゲスト話がぱぱっと日程等など色々決まりました。

そしてそつとこころに耳打ちされたけど父じやなくてそこは俺で良いみたい。ゲストが俺で果たして良いものか…だつてただのユーチューバーだよ？バーチャルじやないんだよ？

あと、『父さんや 家の外でも 要不要』

：季語が入つてないな。不要と扶養掛けたけど、まだ煮詰められそうだ。うん、悲しい父の一句だけど家族からの扱いがアレだからしゃーない。

ボケない話に価値はないと思うからカット。

真面目過ぎる普通の会話だつたんだよお！いい事なのにこれじやいけないんだよお、どげんかせんといかんだよお！

あ、一先ず言えるのは美咲ちゃんめっちゃいい子。真面目で頑張り屋な子だからみんなすこれ！

そうだ、みんなは誰が好き？

僕は…ミツシエルが好き。

ピキィィーン！

勿論みんなも好き

ピピキイイーン！

分かるマーン♪ワイトもそう思います。

：はつ!?なんジャックされた?!脳内電波ジャックだ。誰もお母さんお腹キルユージャックじやないぞー。A p o c r y p h a のジャックちゃんはもうちょい救いがあつても良かつたと思うんだ（涙目）

ふう…落ち着きました。

餅つき朧月伸ばすぞオラア！ってやつたら落ち着いた。あ、もしかして蓬莱弁分からんパティーン？あれ、こんな蓬莱弁なかつたつけ？それっぽだけだつけ？ワカララン。

あ、ワカラランとケセランパサランつて似てない？似てない！知つた。

大事な話は結局全部美咲ちゃんに仕切られて終わつた為暇を持て余した神々（俺とこころ）。そして闇のゲームで何かしらと精神が繋がつている城之内だけの精神が燃え尽きちゃう。

お願ひ死なないで城之内…

アンタが今倒れたら俺やこころの持て余した時間はどうなつちやうの？

時間はまだ残つてる、暇を耐えればマリオに勝てるんだから  
次回、城之内明日に向かつて走り出す

デュエルスタンバイ！

：何かしらつて、もしかしてクトウルフ産の何かかな？それなら精神燃え尽きちゃう理由になるし、最後狂つてどつか走り去つたのも説明付くし…城之内…お前に一体何が起きるんだ…

次々回、城之内死す デュエルスタンバイ！

運命は変えられなかつたああ!!!!

え、発狂して死ぬのか!?救いは!?救いの手は何処に!!

あ、向こうにお手手が…

シールドトリガー発動デーモンハンド！

城之内、死す！

城之内いい——？